

久宝寺遺跡

財團法人八尾市文化財調査研究会報告89

- I 久宝寺遺跡（第23次調査）
- II 久宝寺遺跡（第30次調査）
- III 久宝寺遺跡（第39・51次調査）
- IV 久宝寺遺跡（第50次調査）
- V 久宝寺遺跡（第63次調査）
- VI 久宝寺遺跡（第65次調査）

2006年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

久宝寺遺跡

財團法人八尾市文化財調査研究会報告89

- I 久宝寺遺跡（第23次調査）
- II 久宝寺遺跡（第30次調査）
- III 久宝寺遺跡（第39・51次調査）
- IV 久宝寺遺跡（第50次調査）
- V 久宝寺遺跡（第63次調査）
- VI 久宝寺遺跡（第65次調査）

2006年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

今回報告書を刊行するに至った久宝寺遺跡は、大阪府八尾市南西部の久宝寺、西久宝寺、南久宝寺、北久宝寺、北龜井、龍華町を中心に広がる縄文時代晩期から近世の複合遺跡であります。

この久宝寺遺跡の南部では遺跡を横断するかたちで「国鉄竜華操車場」が占地していました。「国鉄竜華操車場」は国鉄が民営化される昭和61年に先立つ昭和59年に廃止され、その歴史に幕を閉じることとなりました。

同跡地については、昭和61年7月に八尾市から「竜華操車場跡地の基本構想」が発表され再開発が具体化したことで、平成9~17年度に亘って、道路部分ならびに主要建物等を対象とした発掘調査が(財)八尾市文化財調査研究会と(財)大阪府文化財調査研究センター(現 大阪府文化財センター)によって継続的に実施されてきました。それらの結果、縄文時代晩期から近世に至る遺構・遺物が検出される等の多大な調査成果が得られています。

そのなかでも特に、古墳時代初頭から古墳時代前期の集落については、居住域・生産域・墓域の配置が明確にされており、当時の集落形成の在り方を知るうえで貴重な資料と言えます。また墓域からは、約80基に及ぶ墳墓が検出されています。なかでも、割竹形木棺の使用や墳丘四隅に底部穿孔を持つ大形直口壺の配置を見た「久宝寺1号墳」の存在は、周溝墓から古墳への墓制変化が中河内地域において、古墳時代前期前半に波及したことを明確に定義づけた点で注目に値します。

今回、平成9~11・14・15・17年度に実施しました大阪竜華都市拠点地区内における7件の調査(久宝寺遺跡第23次調査、第30次調査、第39次調査・第51次調査、第50次調査、第63次調査、第65次調査)の整理が完了しましたので、報告書として刊行する運びとなりました。

本書が地域の歴史を解明していく資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して御協力いただきました関係諸機関の皆様に深謝すると共に、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 前田 義秋

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成9～11・14・15・17年度に実施した発掘調査の報告書を収録したもので、内業整理および本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成18年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した各調査報告の文責は以下の通りである。Iが原田昌則・二宮(旧姓金親)満夫、IIIが原田、IIが原田・荒川和哉、IV・Vが荒川。全体の構成・編集は原田が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の1/2500の地形図(昭和61年測量・平成6年修正・平成8年7月編纂)、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成13年度版)を使用した。
1. 本書で用いた標高の基準はT.P.(東京湾標準潮位)である。
1. 本書で用いた方位は、国土地標第VI系【日本測地系】の座標北を示す。国土地標数値については、平成14年4月1日から「日本測地系」から「世界測地系」への変更が行われているが、本報告では既往報告書との対応から「日本測地系」を使用した。
1. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編1997年後期版『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に準拠した。
1. 遺構は下記の略号で示した。
井戸-S E 土坑-S K 溝-S D 小穴・柱穴-S P 落ち込み-S O
土器集積-S W 不明遺構-S X
1. 遺構図面の縮尺には、平面全図1/100・1/200・1/250・1/400、断面全図1/40・1/50・1/300がある。部分図面の縮尺には1/20・1/40がある。
1. 遺物図面の縮尺は、土器類1/4、石器類2/3、金属類1/1・1/2に統一した。断面については、弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器・金属類は白、須恵器・陶磁器は黒、屋瓦・石器・木製品・土製品は斜線を用いた。なお、黒色土器の煤付着範囲については粗い水玉を使用した。
1. 調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

目 次

はしがき

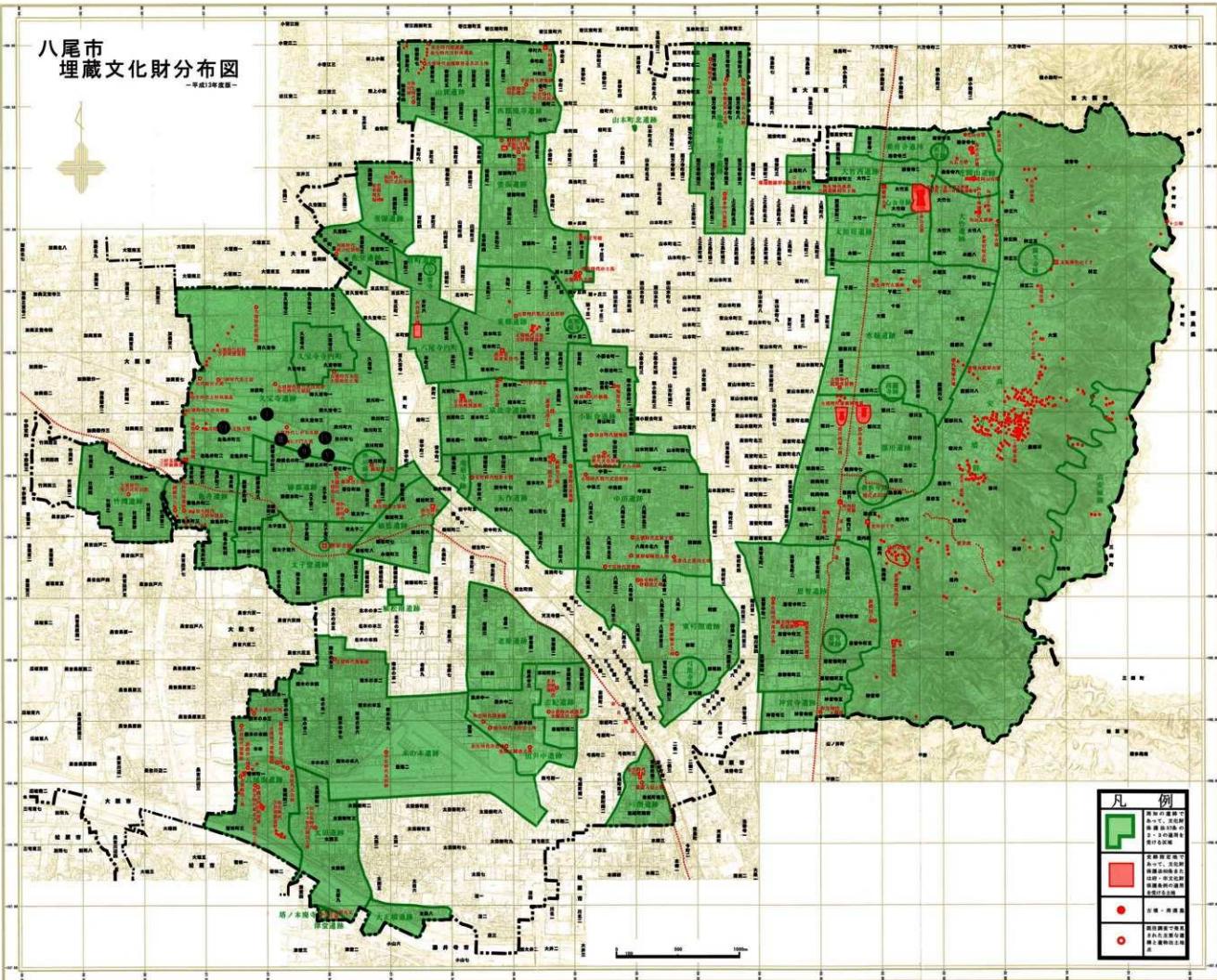
序

八尾市埋蔵文化財分布図

I 久宝寺遺跡第23次調査(K H 97-23)	1
II 久宝寺遺跡第30次調査(K H 99-30)	227
III 久宝寺遺跡第39・51次調査(K H 2001-39・K H 2003-51)	309
IV 久宝寺遺跡第50次調査(K H 2003-50)	363
V 久宝寺遺跡第63次調査(K H 2005-63)	371
VI 久宝寺遺跡第65次調査(K H 2005-65)	407
報告書抄録	

八尾市
埋蔵文化財分布図

一平成13年度版



凡例

■	墓地、古墳
■	史跡、古跡
●	文化財
○	文化財

I 久宝寺遺跡第23次調査(KH97-23)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市大字龜井他で計画された大阪龍華都市拠点地区内で平成9～10年度に実施した久宝寺南駅前線2工区に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第23次調査(KH97-23-1～KH97-23-26)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が住宅・都市整備公團関西支社(現、独立行政法人都市再生機構西日本支社)から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成9年10月23日～平成10年6月30日にかけて原田昌則・岡田清一・吉田珠己・古川晴久・樋口薰が担当した。調査面積は7720.16m²である。現地調査においては、朝田要・板野行伸・伊藤静江・岩沢玲子・小野沢健二・垣内洋平・川村一吉・岸田靖子・北原清子・藏崎潤子・小林範彰・坂田典彦・辻野優子・永井律子・中前和代・中村百合・西村和子・松井三千子・松江光記・水木純司・村井俊子・村田知子・村本恵一郎・山内千恵子・横山茂文・横山妙子が参加した。
1. 整理業務は、平成14年10月1日～平成17年3月28日に実施した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－伊藤・岩沢・加藤邦枝・北原・田島宣子・永井・中村・村井・村田・山内・吉川一栄・若林久美子、図面トレース－村井・村田・山内、図面レイアウト－原田・二宮(旧姓金親)満夫(現 宮崎県教育委員会)、遺物写真－垣内・原田が行った。
1. 本書の執筆は、調査終了報告書および調査担当者との検討を基にして原田昌則が行ったが第3章第3節第4面の墳墓については一部、二宮が行った。
1. 遺構番号は面毎に調査区番号の先のものから順に通し番号を付けた。
1. 本書で記述した古墳時代初頭～前期の土器形式と時期概念は、古墳時代初頭前半・後半(庄内式－古相・新相)、古墳時代前期前半～後半(布留式－古相～新相)に区分した。当該期の土器形式分類および土器編年は(財)八尾市文化財調査研究会報告37(原田1993)に従った。
1. 本書で記述した古墳時代中期～飛鳥時代の時期概念と須恵器型式との関係は以下のとおりである。但し、提示した全ての須恵器型式が出土したわけではない。
 - ・古墳時代中期(5世紀)
 - 前半－TG232・ON231・TK73・TK85・TK216(初期須恵器)
 - 中葉－ON46・TK208
 - 後半－TK23・TK47
 - ・古墳時代後期(6世紀)
 - 前半－MT15
 - 中葉－TK10
 - 後半－MT85・TK43
 - ・飛鳥時代(7世紀)
 - 前半－TK209

中葉-T K217

後半-T K46・T K48

1. 現地調査の実施および整理業務においては、以下の方々からの協力とご指導を受けた。

堅田 直(帝塚山大学)、村川行弘(大阪経済法科大学)、寒川 旭(通商産業省工業技術院地質調査所)、藤岡達也(大阪府教育センター)、井藤 徹・小林義孝・亀島重則・横田 明・山田隆一(大阪府教育委員会)、赤木克視・鋤柄俊夫・本間元樹・本田奈都子・島崎久恵((財)大阪府文化財調査研究センター)、別所秀高((財)東大阪市文化財協会)、都市基盤整備公団関西支社、(株)かんこう、(株)淺川組、中林建設(株)、(株)島田組、(順不同・敬称略、所属は調査時点)

なお、自然科学分析および木製品保存については、下記の個人ならびに諸機関に委託した。

【年輪年代】光谷拓実(独立行政法人奈良文化財研究所)

【花粉分析】水谷陸彦(総合科学株式会社)

【樹種同定】パリノ・サーヴェイ株式会社

【木製品保存】パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 土器の形式・編年および検出遺構で参考とした文献については、203頁に提示した。

本文目次

第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 地理・歴史的環境.....	2
第3章 調査概要.....	14
第1節 調査の方法と経過.....	14
第2節 基本層序.....	17
第3節 検出遺構と出土遺物.....	32
1) 各調査区の概要.....	32
・第1面〔近世～近代〕.....	32
・第2面〔古墳時代中期後半～近世〕.....	51
・第3面〔古墳時代前期前半(布留式古相)～平安時代末期〕.....	100
・第4面〔弥生時代後期後半～古墳時代前期前半(布留式古相)〕.....	116
・第5面〔弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)〕.....	145
・第6面〔弥生時代後期前半〕.....	172
・第7面〔弥生時代前期新段階～弥生時代後期前半〕.....	177
2) 遺構に伴わない遺物	186
第4章 自然科学的分析	
第1節 久宝寺遺跡第22次調査(KH97-22)、第23次調査(KH97-23)に伴う花粉分析 報告 水谷隆彦	
1. 調査概要	205
2. 分析方法	214
3. 分析結果	214
4. 古植生・古気象	241
5. まとめ	249
6. 文献	249
第2節 久宝寺遺跡第23次調査出土の樹種鑑定報告 パリノ・サーヴェイ	
1. はじめに	261
2. 試料	261
3. 分析方法	261
4. 結果	261
5. 考察	262
第3節 401号墳北周溝検出の木棺墓401底板の年輪年代について 光谷拓実	
1. 久宝寺遺跡出土木棺材の年輪年代調査	265
2. 方法	265
3. 結果	266
4. 展望	267
第5章 まとめ	269

挿 図 目 次

第1図	久宝寺遺跡周辺の遺跡分布図	3
第2図	調査地周辺の発掘調査位置図	10
第3図	調査区地区割模式図	15
第4図	調査区設定図	16
第5図	1～5調査区断面図	19-20
第6図	6～9調査区断面図	21-22
第7図	10～13調査区断面図	23-24
第8図	14～16調査区断面図	25-26
第9図	17～20調査区断面図	27-28
第10図	21～26調査区断面図	29-30
第11図	第1面平面図(17調査区～22調査区、24調査区～26調査区)	33-34
第12図	S E 102平断面図	35
第13図	S E 102出土遺物実測図	35
第14図	S E 109平断面図	37
第15図	S K115出土遺物実測図	40
第16図	S D111出土遺物実測図	42
第17図	S D122出土遺物実測図	43
第18図	S D124出土遺物実測図	44
第19図	樋管101平断面図	50
第20図	樋管101瓦質土管実測図	50
第21図	S B201平断面図	51
第22図	第2面平面図(14調査区～16調査区)	52
第23図	第2面平面図(17調査区～22調査区、24調査区～26調査区)	53-54
第24図	S B202平断面図	55
第25図	S B203平断面図	56
第26図	S E201平断面図	57
第27図	S E202平断面図	57
第28図	S E203平断面図	58
第29図	S E203出土遺物実測図	58
第30図	S E205平断面図	59
第31図	S E205出土遺物実測図	59
第32図	S E206平断面図	60
第33図	S E206出土遺物実測図	61
第34図	S K201平断面図	63
第35図	S K201出土遺物実測図	63

第36図	S K203平断面図	64
第37図	S K203出土遺物実測図	65
第38図	S K207平断面図	67
第39図	S K207出土遺物実測図	67
第40図	S K209平断面図	68
第41図	S K209出土遺物実測図	69
第42図	S K213平断面図	69
第43図	S K213出土遺物実測図	70
第44図	S K217出土遺物実測図	70
第45図	S K217平断面図	71
第46図	S K222平断面図	71
第47図	S K222出土遺物実測図	72
第48図	S K228出土遺物実測図	73
第49図	S K230平断面図	73
第50図	S K230出土遺物実測図	73
第51図	S K231平断面図	74
第52図	S K231出土遺物実測図	74
第53図	S K236～S K238平断面図	75
第54図	S K236出土遺物実測図	75
第55図	S K237出土遺物実測図	75
第56図	S D201、S D202断面図	77
第57図	S D240断面図	79
第58図	S D242断面図	79
第59図	S D242出土遺物実測図	80
第60図	S D243出土遺物実測図	81
第61図	S D248出土遺物実測図	81
第62図	S D255出土遺物実測図	81
第63図	S D270出土遺物実測図	84
第64図	S D271出土遺物実測図	84
第65図	S D270、S D271、S D274断面図	84
第66図	S D274出土遺物実測図	85
第67図	S D282～S D284断面図	86
第68図	S D282出土遺物実測図	87
第69図	S D283出土遺物実測図	88
第70図	S D287出土遺物実測図	89
第71図	S D2107出土遺物実測図	90
第72図	S D292出土遺物実測図	90
第73図	S P241平断面図	92

第74図	S P 252平断面図	92
第75図	S P 241、S P 252出土遺物実測図	92
第76図	S P 2100出土礎石実測図	94
第77図	S P 2107出土遺物実測図	95
第78図	S P 2114、S P 2120、S P 2129出土遺物実測図	95
第79図	S P 2145平断面図	97
第80図	S P 2147平断面図	97
第81図	S P 2145、S P 2147出土遺物実測図	97
第82図	26調査区 砂脈201平断面図	99
第83図	S K301出土遺物実測図	100
第84図	S K301平断面図	100
第85図	S K302平断面図	100
第86図	第3面平面図(1調査区、14調査区)	101
第87図	第3面平面図(17調査区・18調査区、20調査区・21調査区)	102
第88図	S K305出土遺物実測図	103
第89図	S K303～S K312平断面	104
第90図	S D301出土遺物実測図	105
第91図	S D301西壁断面図	105
第92図	S D301出土木製品実測図	106
第93図	S D305出土遺物実測図	107
第94図	S D307出土遺物実測図－1	108
第95図	S D307出土遺物実測図－2	109
第96図	S P 303出土遺物実測図	109
第97図	S P 312出土遺物実測図	110
第98図	土器棺墓301平断面図	112
第99図	土器棺墓301出土遺物実測図	112
第100図	土器棺墓302平断面	112
第101図	土器棺墓302出土遺物実測図	112
第102図	18調査区 砂脈群301～砂脈群304平断面図	113
第103図	20調査区 砂脈群305、砂脈群306平断面図	114
第104図	21調査区 砂脈群307平断面図	115
第105図	第4面平面図(7～12調査区)	117-118
第106図	S E 401・402平断面図	119
第107図	S K 404平断面図	121
第108図	S K 404出土遺物実測図	121
第109図	S D412・413断面図	123
第110図	S D412出土遺物実測図	124
第111図	S D413出土遺物実測図	124

第112図	401号墳平断面図	127-128
第113図	底部穿孔二重口縁壺(217)出土状況	127-128
第114図	木棺墓401平断面図	127-128
第115図	401号墳周溝内出土遺物実測図	129
第116図	木棺墓401底板実測図	130
第117図	402号墳平断面図	131
第118図	403号墳平断面図	132
第119図	404号墳平断面図	134
第120図	404号墳主体部平断面図	135
第121図	404号墳周溝内出土遺物出土状況平面図	135
第122図	404号墳周溝内出土遺物実測図	136
第123図	404号墳組合式木棺側板実測図	137
第124図	404号墳組合式木棺小口・底板実測図	138
第125図	405号墳平断面図	140
第126図	405号墳組合式木棺底板平面図	140
第127図	405号墳組合式木棺側板実測図	141
第128図	405号墳組合式木棺底板実測図	142
第129図	406号墳平断面図	143
第130図	S W401平面図	144
第131図	S W401出土遺物実測図	144
第132図	S E502出土遺物実測図	145
第133図	第5面平面図(2・3調査区)	146
第134図	S E502平断面図	147
第135図	S K507平断面図	148
第136図	第5面平面図(4調査区～10調査区)	149-150
第137図	S K508平断面図	151
第138図	S K508出土遺物実測図	151
第139図	S K509平断面図	152
第140図	S K509出土遺物実測図	153
第141図	S K512平断面図	154
第142図	S D556平断面図	157
第143図	S D556出土遺物実測図	158
第144図	S D576出土遺物実測図	159
第145図	S D577出土遺物実測図	160
第146図	S D578、S D581出土遺物実測図	160
第147図	S D582出土遺物実測図	161
第148図	S D583平断面図	161
第149図	S D583出土遺物実測図	162

第150図	S D590出土遺物実測図	163
第151図	S D596平断面図	164
第152図	S D596出土遺物実測図	165
第153図	S D5102出土遺物実測図	166
第154図	S D5103平断面図	167
第155図	S D5103出土遺物実測図	168
第156図	S D5112、S D5117、S D5120、S D5123、S D5128出土遺物実測図	168
第157図	S O501出土遺物実測図	170
第158図	N R502出土遺物実測図	171
第159図	N R601出土遺物実測図	172
第160図	第6面平面図(8調査区・9調査区、11調査区～13調査区)	173-174
第161図	S K701平断面図	177
第162図	S K702平断面図	177
第163図	S K702出土遺物実測図	178
第164図	第7面平面図(8調査区～13調査区)	179-180
第165図	S K704平断面図	181
第166図	S K704出土遺物実測図	181
第167図	S D701出土遺物実測図	181
第168図	S D712出土遺物実測図	183
第169図	第Ⅲ層出土遺物実測図	187
第170図	第Ⅳ層出土遺物実測図	187
第171図	第VI層出土遺物実測図-1	188
第172図	第VI層出土遺物実測図-2	189
第173図	第VII層出土遺物実測図-1	192
第174図	第VII層出土遺物実測図-2	193
第175図	第XI層出土遺物実測図	196
第176図	第XII層出土遺物実測図	197
第177図	第XIII層出土遺物実測図	199
第178図	第XIV層出土遺物実測図	201
第179図	第XV層出土遺物実測図	202
第180図	第XVI層、第XVII層出土遺物実測図	202
第181図	調査地周辺の古墳時代初頭前半(庄内式古相)～前期前半(布留式古相)の集落分布図	271

写 真 目 次

写真1	再開発中の旧国鉄龍華操車場跡地	1
写真2	調査風景	14
写真3	S E 101検出状況	32
写真4	S E 102検出状況	32
写真5	S E 106検出状況	36
写真6	S E 105、S E 107、S E 108検出状況	36
写真7	S E 109検出状況	37
写真8	S E 109断ち割り状況	37
写真9	S K 103検出状況	38
写真10	S K 108検出状況	39
写真11	S E 208検出状況	62
写真12	S E 209検出状況	62
写真13	N R 202壙部材検出状況	98
写真14	砂脈群201検出状況	99
写真15	土器棺墓302検出状況	111
写真16	18調査区 砂脈検出状況	113
写真17	砂脈群301〔A地点〕	113
写真18	砂脈群302〔B地点〕	114
写真19	砂脈群304〔C地点〕	114
写真20	砂脈群305〔D地点〕	114
写真21	砂脈群306〔E地点〕	115
写真22	砂脈群306〔E地点〕	115
写真23	砂脈群307〔F地点〕	115
写真24	S E 403検出状況	120
写真25	機械掘削終了時の403号墳検出状況	133
写真26	機械掘削終了時の404号墳主体部木棺検出状況	133
写真27	405号墳主体部検出状況	139
写真28	405号墳主体部出土骨片検出状況	139
写真29	406号墳検出状況	142
写真30	S E 501検出状況	145
写真31	S D577検出状況	159
写真32	N R 501検出状況	170
写真33	N R 502検出状況	170
写真34	8調査区 S P 601～S P 606検出状況	172
写真35	8調査区 足跡群603検出状況	175

写真36	11調査区	足跡群604検出状況	175
写真37	12調査区	足跡群605検出状況	176
写真38	13調査区	足跡群606検出状況	176
写真39	13調査区	足跡群607検出状況	176
写真40	13調査区	足跡群608検出状況	176
写真41	12調査区	S D712検出状況	183
写真42	9調査区	小穴検出状況	184
写真43	13調査区	小穴検出状況	184

表 目 次

第1表	調査地周辺の発掘調査一覧表	11-13
第2表	調査区一覧表	17
第3表	S D117～S D120法量表	43
第4表	S D138～S D151法量表	46
第5表	S D152～S D169法量表	46-47
第6表	S D170～S D193法量表	47-48
第7表	S P101～S P107法量表	48
第8表	S P108～S P117法量表	48-49
第9表	S D207～S D238法量表	78
第10表	S D244～S D255法量表	82
第11表	S D257～S D259法量表	82
第12表	S D260～S D262法量表	82
第13表	S D290・S D291、S D293～S D2107法量表	90
第14表	S P203～S P210法量表	91
第15表	S P211～S P222法量表	92
第16表	S P223～S P298法量表	92-94
第17表	S P299～S P2103法量表	94
第18表	S P2108～S P2130法量表	95-96
第19表	S P2131～S P2142法量表	96
第20表	S P2143～S P2159法量表	97
第21表	S P301～S P306法量表	110
第22表	S P307～S P311法量表	110
第23表	S P312～S P314法量表	110
第24表	S D414～S D427法量表	125
第25表	S D429～S D433法量表	126

第26表	S D504～S D539法量表	155
第27表	S D540～S D555法量表	156
第28表	S D558～S D568法量表	158-159
第29表	S D569～S D588法量表	162-163
第30表	S D5104～S D5131法量表	169
第31表	S P601～S P606法量表	172
第32表	S P705～S P711法量表	184
第33表	S P714～S P722法量表	185

図版目次

図版一	調査地からの遠景	図版一四	26調査区 全景
	調査地からの遠景		24調査区 S B203検出状況
図版二	調査地を含む旧龍華操車場跡全景	図版一五	20調査区 S E203検出状況
図版三	17調査区 全景		23調査区 S E205検出状況
	18調査区 全景	図版一六	23調査区 S E206検出状況
図版四	19調査区 全景		15調査区 S K201検出状況
	20調査区 全景	図版一七	16調査区 S K203検出状況
図版五	21調査区 全景		同 上 上部遺物出土状況
	22調査区 全景		同 上 下部遺物出土状況
図版六	24調査区 全景		同 上 完掘状況
	25調査区 全景	図版一八	17調査区 S K207検出状況
図版七	26調査区 全景		18調査区 S K209検出状況
	26調査区 全景		19調査区 S K213検出状況
図版八	14調査区 全景	図版一九	23調査区 S K222検出状況
	15調査区 全景		25調査区 S K231検出状況
図版九	16調査区 全景		26調査区 S K236検出状況
	17調査区 全景	図版二〇	22調査区 S P2100検出状況
図版一〇	18調査区 全景		24調査区 S P2130検出状況
	19調査区 全景		26調査区 S P2145検出状況
図版一一	20調査区 全景	図版二一	15調査区 N R201検出状況
	21調査区 全景		16調査区 N R202堰部材
図版一二	22調査区 全景		検出状況
	23調査区 全景	図版二二	1 調査区 全景
図版一三	24調査区 全景		14調査区 全景
	25調査区 全景		

図版二三	17調査区	全景	図版四〇	2 調査区	全景
	18調査区	全景		3 調査区	全景
図版二四	20調査区	全景	図版四一	4 調査区	全景
	21調査区	全景		5 調査区	全景
図版二五	17調査区	S K301検出状況	図版四二	6 調査区	中・西部検出状況
	17調査区	S K302検出状況		6 調査区	東部検出状況
	20調査区	S K305検出状況	図版四三	7 調査区	全景
図版二六	1 調査区	S D301内木製品出土状況		8 調査区	全景
	14調査区	土器棺墓301検出状況	図版四四	9 調査区	全景
図版二七	14調査区	土器棺墓302検出状況		9 調査区	全景
	14調査区	土器棺墓302検出状況	図版四五	10調査区	全景
図版二八	7 調査区	全景		10調査区	全景
	8 調査区	全景	図版四六	3 調査区	S E 502検出状況
図版二九	9 調査区	全景		7 調査区	東部遭擣検出状況
	10調査区	全景	図版四七	7 調査区	S K509検出状況
図版三〇	11調査区	全景		7 調査区	S K509検出状況
	10調査区	S D412、413検出状況	図版四八	6 調査区	S D556検出状況
図版三一	7 調査区	401号墳検出状況		6 調査区	S D583検出状況
	8 調査区	401号墳検出状況		7 調査区	S D596検出状況
図版三二	8 調査区	401北周溝断面	図版四九	8 調査区	全景
	7 調査区	401号墳北周溝内底部穿孔		9 調査区	全景
		二重口縁壺(217)出土状況	図版五〇	11調査区	全景
図版三三	8 調査区	401号墳北周溝内木棺墓401 検出状況		12調査区	全景
	8 調査区	402号墳検出状況	図版五一	13調査区	全景
図版三四	9 調査区	403号墳検出状況		9 調査区	N R 601検出状況
	9 調査区	404号墳検出状況	図版五二	8 調査区	全景
図版三五	10調査区	404号墳検出状況		9 調査区	全景
	9 調査区	404号墳周溝北西コーナー部 遺物出土状況	図版五三	10調査区	全景
図版三六	10調査区	404号墳組合式木棺検出状況		11調査区	全景
	同 上	組合式木棺細部	図版五四	12調査区	全景
図版三七	10調査区	405号墳検出状況		13調査区	全景
	同 上	405号墳組合式木棺検出状況	図版五五	8 調査区	S K 701検出状況
図版三八	10調査区	405号墳組合式木棺検出状況		8 調査区	S K 702検出状況
	同 上	405号墳組合式木棺底板検出状況	図版五六	8 調査区	S K 704検出状況
図版三九	11調査区	406号墳検出状況		S E 102、S D111、S D122、 S D124、S E 203出土遺物	
	9 調査区	S W401検出状況	図版五七	S E 206、S K203出土遺物	
			図版五八	S K203出土遺物	

- 図版五九 S K207、S K209出土遺物
図版六〇 S K213、S K222、S K228、S K230
S K236出土遺物
図版六一 S K237、S D242、S D243、S D248、
S D255、S D270出土遺物
図版六二 S D270、S D282出土遺物
図版六三 S D282、S D283出土遺物
図版六四 S D292、S P2107、S P2129出土遺物
図版六五 S D301木製品
図版六六 S P2145、S D301、S D305、S D307
出土遺物
図版六七 S D307出土遺物
図版六八 S D307、S P303、S P312出土遺物
図版六九 S D307、土器棺墓301、土器棺墓302、
S K404出土遺物
図版七〇 S D412、S D413出土遺物
図版七一 S D413、401号墳、404号墳出土遺物
図版七二 木棺墓401、404号墳出土遺物
図版七三 404号墳木棺材
図版七四 404号墳木棺材細部
図版七五 404号墳木棺材
図版七六 405号墳木棺材
図版七七 S W401、S E502、S K508出土遺物
- 図版七八 S K509出土遺物
図版七九 S K509、S D556出土遺物
図版八〇 S D577出土遺物
図版八一 S D578、S D581、S D582、
S D583出土遺物
図版八二 S D583、S D590、S D596
出土遺物
図版八三 S D596、S D5102、
S D5103、S O501出土遺物
図版八四 N R502、N R601、S K702、
S D712出土遺物
図版八五 第Ⅲ層、第Ⅳ層出土遺物
図版八六 第VI層出土遺物
図版八七 第VI層出土遺物
図版八八 第VI層出土遺物
図版八九 第VI層、第VII層出土遺物
図版九〇 第VII層出土遺物
図版九一 第VII層出土遺物
図版九二 第VII層、第VIII層出土遺物
図版九三 第VIII層出土遺物
図版九四 第VIII層、第IX層出土遺物
図版九五 第VIII層、第IX層、第X層出土

第1章 調査に至る経過

久宝寺遺跡は、1935年(昭和10年)に小字西口・栗林(現八尾市久宝寺5丁目)で行われた道路工事中に、船の残片とともに弥生時代中期～古墳時代の遺物が発見され、遺跡として認識されるようになった。考古学的な調査は1973年(昭和48年)度以降で、遺跡の西部を縦断する近畿自動車道の計画に伴い、(財)大阪文化財センター(現、(財)大阪府文化財センター)による試掘調査が実施されている。この調査では、弥生時代～中世に至る遺構・遺物が広範囲にわたって重層的に検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。昭和57年以降は大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによる近畿自動車道建設に伴う発掘調査、ならびに八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会・(財)東大阪市文化財協会による発掘調査が随所で継続して実施されており、縄文時代晚期～近世に至る遺構・遺物が検出されている。主な調査成果を調査順に例挙すれば、1983年(昭和58年)に(財)大阪文化財センターにより実施された久宝寺南(その2)では、古墳時代初頭後半(庄内式新相)に比定される我国最古の準構造船の発見があり、内海の河内湖南岸に近接した久宝寺遺跡が当該期には「湊津」的な役割を果たした集落を形成していたことを示す資料として注目された。1991年(平成3年)に八尾市北龜井3丁目で当調査研究会が実施した第9次調査(K H91-9)では、古墳時代前期前半(布留式古相)の2棟の住居内から重圓文鏡と素文鏡が出土したほか、近接する地点からは墳丘長35mを測る前方後方墳1基が検出されており、中河内地域における古墳文化受容期の在り方を知る上で貴重な資料を提供した。また、1994年(平成6年)に八尾市神武町で当調査研究会が行った第18次調査(K H94-18)では、古墳時代初頭後半(庄内式新相)に比定される朝鮮半島の南部に瀕源を持つ炉形土器・軟質両耳壺が出土しており、西接する大阪市の加美遺跡第1次調査(K M84-1)の1号方形周溝墓出土の陶質土器(朝鮮三国時代初頭)の存在とともに、遺跡範囲の西部を中心に、渡米系集団の集落が存在した可能性が強くなってきた。この様に、久宝寺遺跡では、特に古墳時代初頭～前期を中心として、広範囲にわたって数多くの集落が形成されたことが知られている。

今回の調査地点である旧国鉄龍華操車場跡地(約24.6ha)は、遺跡範囲の南部を横断する形で展開する広大な敷地で、遺跡総面積の約1/7を占めている。龍華操車場が1986年(昭和61年)に国鉄民営化に先立って廃止されると、同年7月に八尾市から「龍華操車場跡地の基本構想」が発表され、再開発が進められることとなった。再開発はまず駅周辺から着手され、1988年(昭和63



写真1 再開発中の旧国鉄龍華操車場跡地(西から)【平成14年9月】

年)度の八尾市教育委員会による駅舎新設に伴う試掘調査を皮切りとして、駅舎および自由通路を対象とした当調査研究会による1990年(平成2年)度の第4次調査、1996年(平成8年)度の第20次調査、(財)大阪府文化財調査研究センターによる1995年(平成7年)度の95-8・9トレンチの調査が実施された。また、これらの調査と並行して、操車場北側の新線路予定地においては、1995年(平成7年)度に試掘調査(95-1~7トレンチ)が、さらに1995年(平成7年)度~1998年(平成10年)度には、操車場中央地下を南北に縦断する一般府道住吉八尾線の付け替えに伴う発掘調査(96-1・97-1・98-1・2トレンチ)が、それぞれ(財)大阪府文化財調査研究センターにより実施された。1997年(平成9年)度以降は、「八尾都市計画事業大阪龍華都市拠点土地[区画整理事業]」の一環として、公共施設建設地および新設道路部分を中心とした発掘調査の計画が策定され、(財)大阪府文化財調査研究センター及び当調査研究会による発掘調査が継続的に実施されている。これら一連の調査では、縄文時代晚期~近世に至る遺構・遺物が広範囲にわたって検出されている。その中でも特に70基以上におよぶ古墳時代初頭~前期の古墳群の検出は、古墳文化受容期における中河内地域の墓制の在り方を推定するうえで示唆に富む資料を提供する結果となった。

本書で報告する久宝寺遺跡第23次調査(KH97-23)は、平成9年度から平成10年度にかけて久宝寺南駅前線建設に伴って実施した発掘調査である。総調査面積は7720.16m²を測る。発掘調査は八尾市教育委員会による埋蔵文化財調査指示書に基づき実施した。調査は「大阪龍華都市拠点地区における埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」に基づいて、住宅・都市整備公団関西支社(平成11年10月から都市基盤整備公団関西支社)、(財)八尾市文化財調査研究会とによる業務委託契約書の締結後、現地調査に着手した。

現地発掘調査期間は平成9年10月23日~平成10年6月30日である。内業整理業務は平成14年10月1日~平成17年3月28日に実施した。

第2章 地理・歴史的環境

久宝寺遺跡は、大阪府八尾市西部の久宝寺1~6丁目・西久宝寺・南久宝寺1~3丁目・北久宝寺1~3丁目・神武町・龍華町1・2丁目・北龜井町1~3丁目・洪川町1~7丁目および東大阪市大蓮東5丁目・大蓮南2丁目一帯の東西1.7km、南北1.8kmの範囲に展開する縄文時代晚期~近世にかけての複合遺跡である。久宝寺遺跡周辺の遺跡群は、近畿自動車道建設に伴う調査や市単位の発掘調査が数多く実施されており、考古学的な資料の蓄積が多い。周辺に隣接する遺跡としては、北に佐堂遺跡・美園遺跡、東に宮町遺跡・八尾寺内町遺跡・成法寺遺跡・龍華寺跡が長瀬川を挟んで対峙する他、南東に渋川廃寺、南に跡部遺跡・龜井遺跡、南西に竹洞遺跡、西に大阪市の加美遺跡が位置している。また、遺跡範囲内には遺跡名でもある久宝寺寺内町が存在している。

八尾市を包括する中河内地域の地勢は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵・河内台地、西を上町台地、北を淀川に画されている河内平野の南部にあたる。河内平野の形成については、海平面の昇降による侵食面の移動と、旧大和川と淀川による堆積作用との相互作用によるものと考えられている。特に、河内平野南部については、旧大和川水系の平野川・長瀬川・楠根川・玉串川・恩智



1 若江遺跡	14 荘原遺跡	27 危井北遺跡	40 植松南遺跡	53 大堀遺跡
2 若江北遺跡	15 東郷遺跡	28 竹園遺跡	41 太子堂遺跡	54 八尾南遺跡
3 上小阪遺跡	16 京御廟寺	29 危井遺跡	42 富通東遺跡	55 木の本遺跡
4 小若江遺跡	17 穴太廟寺	30 諏訪遺跡	43 瓜破遺跡	56 老原遺跡
5 西郷遺跡	18 宮町遺跡	31 路野遺跡(耕出土地)	44 瓜破庵寺	57 志紀遺跡
6 山賀遺跡	19 佐堂遺跡	32 津川源寺	45 三宅遺跡	58 田井中遺跡
7 西郷墓寺	20 八尾寺内町遺跡	33 成法寺遺跡	46 三宅東遺跡	59 大田遺跡
8 西郷墓寺遺跡	21 久宝寺寺内町遺跡	34 小原合遺跡	47 長吉野山遺跡	60 弓削遺跡
9 衣摺遺跡	22 久宝寺遺跡	35 中田遺跡	48 嵐原遺跡	61 本郷遺跡
10 弓刀遺跡	23 加美遺跡	36 東弓削遺跡	49 城山古墳群	
11 加美北遺跡	24 長楽庵寺	37 矢作遺跡	50 六反古墳群	
12 友井東遺跡	25 平野寺前遺跡	38 電車寺跡	51 織重遺跡	
13 美園遺跡	26 平野橋港都市	39 横谷遺跡	52 別所遺跡	

第1図 久宝寺遺跡周辺の遺跡分布図 (S=1/40000)

川が北西方向に放射状に流下しており、平野部内にみられる自然堤防・扇状地性低地・三角州性低地等の地形形成については、これらの河川の堆積作用によるところが大きい。久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と平野川に挟まれた扇状地性低地に分類される沖積地に展開した遺跡で、現地表面の海拔高は9.5m前後を測る。以下、当遺跡周辺の遺跡を中心に時期ごとに概観してみる。

後水期の大坂平野(河内平野)の発達史については、梶山彦太郎・市原 実両氏による研究により九つの時代に区分されている。それらの研究成果から考察すれば、遺跡周辺で人々の足跡が認められるのは縄文時代晚期で、河内湾の淡水化が進行し河内潟が形成された時期(河内潟の時代)にあたる。周辺遺跡では、新家遺跡・山賀遺跡・亀井遺跡から縄文時代晚期の土器片が出土しているほか、長原遺跡では集落が検出されている。本遺跡を含む中河内地域の沖積低地部においては、当該期の生活面が深層に埋没しているのが一般的であり、一部の調査を除けば、当該期の文化層まで調査深度が至らない場合が大半で、遺跡の全体像の把握が困難な場合が多い。本遺跡内においては、近畿自動車道に伴う久宝寺北(その1)の調査で縄文時代晚期の遺物包含層がT.P.+4.7m前後に存在することが確認されている他、本調査地に近接した位置で(財)大阪府文化財センターにより実施された多目的広場の調査では、縄文時代晚期の土器類が出土している。

弥生時代前期には、水稻耕作の導入に伴って河内潟に注ぐ河川により形成された微高地および自然堤防を中心にして数多くの集落が営まれている。前期の古段階に成立するものとしては若江北遺跡・山賀遺跡・八尾南遺跡がある他、中段階から新段階にかけて成立するものとしては美園遺跡・亀井遺跡・城山遺跡・瓜破遺跡・長原遺跡・跡部遺跡・中田遺跡・田井中遺跡がある。本遺跡内では、前期新段階の集落が久宝寺南(その1・その2)、第23次調査(KH97-23)の8調査区、水処理施設で検出されている。

弥生時代中期には河内潟の陸化に伴って、新たに瓜生堂遺跡・巨摩廃寺遺跡・若江北遺跡・加美遺跡・東郷遺跡・小阪合遺跡・木の本遺跡・東弓削遺跡・弓削遺跡が成立している。また、水稻耕作を中心とした安定基盤を背景として、集落規模の拡大化が計られており、亀井遺跡に象徴される拠点集落の出現、瓜生堂遺跡2号方形周溝墓や加美遺跡Y1号墓に代表される大型墳丘墓の存在は、弥生文化が昇華した証を可視的に示している。本遺跡内の居住域は、中期中葉から後葉(Ⅲ・Ⅳ様式)にかけては遺跡範囲の中央部から西部を中心に検出されている。墓域や生産域については、居住域の北西部や西部が利用されており、特に墓域については西接する加美遺跡を中心に大型墳丘墓が検出されている。一方、当該期を象徴する銅鐸については、跡部遺跡第5次調査(A T89-5)で埋納された扁平紐式流水文銅鐸が検出されている他、亀井遺跡からは扁平式と突線紐式の銅鐸片が出土している。

弥生時代後期になると中期の生活面を河成堆積層が厚く覆っている例が平野部の各遺跡で検出されており、自然環境が不安定であったことが推定されている。前代から続く既存の集落は、環濠集落の解体に連動して等質的な集落が点在する散村的な集落形態に移行を余儀なくされたようである。本遺跡内では後期前半の集落が久宝寺南(その1)、水処理施設・久宝寺第63次調査(KH2005-63)で検出されている程度で、前代に比して集落は減少している。後期後半の集落は、前代に比して増加しており、遺跡範囲東部の第8次調査(KH91-8)、北西部の府教委1991年度調査、南東部の第29次調査(KH99-29)で検出されている。

古墳時代初頭(庄内式)～前期(布留式)においては、前代に比して集落の増加が顕著で、西岩田遺跡・山賀遺跡・瓜牛堂遺跡・佐堂遺跡・友井東遺跡・美園遺跡・小若江北遺跡・久宝寺遺跡・亀井遺跡・加美遺跡・竹渕遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡・成法寺遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡・木の本遺跡・八尾南遺跡・長原遺跡・瓜破遺跡等で検出されている。この時期を通じての集落動向は、前代と同様、大規模な集落に発展することなく、土器型式の1型式ないしは長くても2型式程度の期間に居住域が移動を繰り返す形で推移したことが推定される。当該期の集落数は庄内式古相から中相にかけては漸移的な流れのなかで推移するが、庄内式新相～布留式古相においては爆発的に増加し、布留式古相をピークとして減少する流れが看取される。庄内式新相～布留式古相段階の集落数の急増に連動して、吉備・山陰・播磨・阿波・讃岐・攝津・東海等の各地域からの搬入土器の占める割合が高く、物的交流のほか、移住者等の人的交流も想定されている。久宝寺遺跡では、第18次調査(KH94-18)で朝鮮半島南部にその淵源を持つ炉形土器・軟質陶耳壺が出土しており、さらに西接する加美遺跡1次調査(KM84-1)の1号方形周溝墓からは陶質土器(朝鮮三国時代初頭)が出土していることから、交流が国内に留まらず海外におよんだことが窺われる。これらの要因としては、準構造船に代表される造船技術の進化、航海術の確立はもとより、北方に広がる河内湖を通じて海上交通が容易な地点に久宝寺遺跡が立地し、港津的な役割を果たしたことにはならない。一方、当該期における墳墓については、方形周溝墓を中心とした前代の墓制形態が継承されるものの、布留式古相以降は、古墳文化受容の着実な浸透の中で、庄内式期に見られた等質な造墓形態から脱却して、墳形の多様化、主体部構造の変化、埴輪の使用等の質的变化が進行している。平野部で検出されたものに限定すれば、庄内式期では、加美遺跡・亀井北遺跡・久宝寺遺跡・東郷遺跡・成法寺遺跡・萱振遺跡・八尾南遺跡・布留式期では、加美遺跡・友井東遺跡・久宝寺南遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡・成法寺遺跡等で検出されている他、布留式新相には、中河内地域の首長層がヤマト政権との従属的な関係を結んだ結果として、萱振1号墳・美園古墳・塚ノ本古墳が出現している。久宝寺遺跡内では、第9次調査(KH91-9)、第22次調査(KH97-22)、第23次調査(KH97-23)・第28次調査(KH99-28)、第37次調査(KH2001-37)、多目的広場、水処理施設で庄内式古相～布留式古相の墳墓が70基以上検出されている。

古墳時代中期の集落位置は前代に符合した形で推移している。5世紀代の河内平野南部で集落を形成した集団は、南部の羽曳野丘陵で展開される古市古墳群の造営や、「記紀」にみる治水事業を始めとする大規模な土木工事の推進の一躍を担っていたことは想像に難くない。久宝寺遺跡内においては、旧大和川水系の本流に設置された大規模な堰や敷葉工法による堤のほか、護岸施設としての水制工作物が検出されており、土木技術の向上や鉄製農具の進化と普及が河内平野の開発を推進した要因であったと推定される。これらの土木・治水技術に加えて、当該期における須恵器・韓式系土器を始めとする新出土器の出現や工芸・馬銅等の新来技術の導入については、土器相の変化に表出されるように朝鮮半島を中心とする渡来系集団との関係が留意される。当遺跡においては特に、久宝寺北(その2・3)で韓式系土器が多量に出土している。なお、第24次調査(KH98-24)の6調査区で検出された竪穴住居(S I 31001)からは、南九州系の成川式土器が出土しており、当該期における南九州と畿内との交流関係を考えるうえで重要な資料である。当該期の古墳は、小規模な方墳が主体で平野部においては全て埋没した形で検出されており、長原遺跡・八尾南遺跡・城山遺跡のように群集化するものと、友井東遺跡・巨摩遺跡・亀井遺跡・竹渕遺跡

のような単独墳がある。続く、古墳時代後期の集落は山賀遺跡・友井東遺跡・萱振遺跡・矢作遺跡・中田遺跡・小阪合遺跡・東郷遺跡・久宝寺遺跡・太子堂遺跡・跡部遺跡・竹渕遺跡・長原遺跡で検出されているが、何れも集落規模の小さなものが大半を占めている。当該期の集落の特徴としては、後期全般を通して継続する集落が少ないとや、後期前半に廃絶する集落が比較的多いこと、更には、後期後半段階に集落の増加と分散化が偏在化していることが指摘される。後期古墳の推移は、長原古墳群が古墳造営を停止した後期中葉以降、平野部での築造は激減し、それ以降は生駒山地西麓部に展開する高安古墳群内に造墓位置を変えている。久宝寺遺跡内では、七ツ門古墳(6世紀中葉)が検出されており、長原遺跡内の七ノ坪古墳(5世紀末)とあわせて、平野部における数少ない横穴式石室を持つ古墳として貴重である。当該期の古墳の在り方は、小形方形墳を主体とする従前の墓制形態が、横穴式石室を主体部に持つ円墳へと変化する時期と符号しており、後期中葉以降は一部の例外を除けば、平野部が居住域と生産域、生駒山地西麓部が墓域としての分化が図られている。こうした推移の変化は、大和政権による地域の生産体制の強化が、再編成された在地系・渡米系の有力氏族に委ねられた結果を示すものと理解される。

当該期における遺跡周辺の文献史料としては、政治顧問として百济から日羅を招き阿斗の桑市に館をつくり住まわせる『日本書紀敏達十二年七月(583)』、物部守屋と蘇我馬子の仏教の攝取をめぐる論争、守屋怒って阿都に帰り兵を集め、『日本書紀用明二年四月(587)』等があり、後の『和名類聚抄』(以下『和名抄』)にみる渋川郡の跡部郷に関わる有力豪族の物部連の枝族として阿刀氏との関係が考えられる。一方、郡名である「渋川」については、『日本書紀崇峻天皇即位前紀用明二年七月(587)』の「從 志紀郡。到 洪河家。」が初見であり、郡名としては河内国渋川郡の柏原廣山が兵衛を偽ったため上佐に流される『日本書紀持統三年七月(689)』が初見である。

飛鳥・奈良時代の集落は萱振遺跡・成法寺遺跡・東郷遺跡・久宝寺遺跡・太子堂遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・弓削遺跡・東弓削遺跡・長原遺跡等で検出されている。また、大和と難波津を結ぶ交通の要衝であった中河内地域は、大和飛鳥地域と同様、仏教文化の受容は早く、渡米系氏族集団を極越として多くの氏寺の建立が認められている。久宝寺遺跡を中心とする平野部に限って、『和名抄』による河内国の郡界別に区別すれば、若江郡の西都廃寺(飛鳥時代後期～鎌倉時代)・東郷廃寺(飛鳥時代後期～平安時代前期)・弓削寺(奈良時代後期～鎌倉時代)、渋川郡の渋川廃寺(飛鳥時代前期～室町時代)・龍華寺(奈良時代後期～鎌倉時代)・鞍作廃寺(奈良時代)・志紀郡の五条宮跡(奈良時代後期～鎌倉時代)、丹北郡の瓜破廃寺(奈良時代)がある。

一方、『続日本紀』には奈良時代後半の天平神護元年(765)～宝亀元年(770)の5年間に亘って若江郡南部を中心とした記事が記されている。全て、称德天皇による3回におよぶ行幸に関連した内容で、「弓削行宮」「弓削寺」「由義宮」「由義寺」「龍華寺」が見える他、神護景雲三年(769)十月三十日の条には「詔以_由義宮_為_西京。河内國為_河内職。...」のように若江郡の南部を中心とした一帯に「西の京」の造営が計画されている。翌年の宝亀元年(770)八月四日の天皇崩御により、造都の中止を余儀なくされるが、一時期にあるにせよ「陪都」的な都の造営が計画され歴史の表舞台になったことは特筆される。

平安時代～鎌倉時代の集落は、萱振遺跡・佐堂遺跡・東郷遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・矢作遺跡・老原遺跡・長原遺跡で検出されている。当該期の集落は、条里区画に基づくものや主要街道、寺社周辺で成立したものが多い。八尾市域内の当該期の寺院としては、若江郡に穴太廃寺

(平安時代後半)、金性寺(平安時代後期)、金剛蓮華寺(平安時代前期)がある。式内社としては、若江郡9社(阪合・矢作・御野県主・弓削・都留美鷦・長柄・渋川・栗柄・加津良)、渋川郡2社(跡部・許麻)、志紀郡1社(楠本)がある。このうち、久宝寺遺跡範囲内には許麻神社(久宝寺5丁目)、跡部神社(龜井2丁目)がある。許麻神社は「新撰姓氏錄」の河内国諸藩に記された高句麗系氏族の大泊連に関連するものである。跡部神社は「新撰姓氏錄」の左京神別上に記された阿刀氏に関連するもので、石上朝臣(物部氏)と同祖の饒速日命の末裔とされている。なお、当該時期において久宝寺遺跡を包括する一帯は『石清水文書』延久四年(1072)九月五日「渋川郡漆条橋島里」に見るように、「橋島」と称されていたようである。「橋島」と称された範囲は古長瀬川と古平野川に挟まれた地域をさすものと考えられる。なお、遺跡範囲南西部の北龜井町2丁目には、大和西大寺の仏尊が文永五年(1268)に「十重金戒を講じたとされる祇迦堂跡(千光寺)」がある。

室町時代～戦国時代の河内地域は、南北朝期の動乱、畠山氏の内乱に端を発する応仁の乱から戦国時代末期の織田信長の近畿統一に至る長きに亘って戦乱の渦中であったことに符合して、集落数の減少が顕著である。当該期における集落は、若江遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡・龜井遺跡・久宝寺寺内町遺跡等で検出されているが、その多くが防御を目的として集約された集村形態に変化を余儀なくされたものと考えられる。遺跡範囲南西部の北龜井町2丁目には、初代河内国守護であった畠山基国の子、満家の開基である真觀寺(応永年間1394～1428)、北部には西証寺(現顯證寺)を中心に天文十年(1541)に寺内特権を得て成立した「久宝寺寺内町」が存在している。

近世の集落は前代の集落と重複して推移している。近世の河内地域は、大坂城の城下町として大坂の都市化が進行する一方で、大消費地への生産物の供給や流通を担う役割を果たしたものと考えられる。なかでも、八尾周辺の木綿は「久宝寺木綿」として知られており、江戸時代中期の宝曆六年(1756)の「河内国渋川郡久宝寺村当子年植附書上帳控」によれば、村内耕地のうち綿作が約7割を占めていたことが窺える。このように、宝永元年(1704)の大和川付け替え以降は旧川筋の新田開発や中河内特有の「半田(はんだ)」「搔き揚げ田」「島畑」と呼ばれる田畠混在の耕地形態の利用により綿作はさらに急速な発展を遂げ、明治の10年代に衰退するまで地場産品としての役割を果たしたようである。

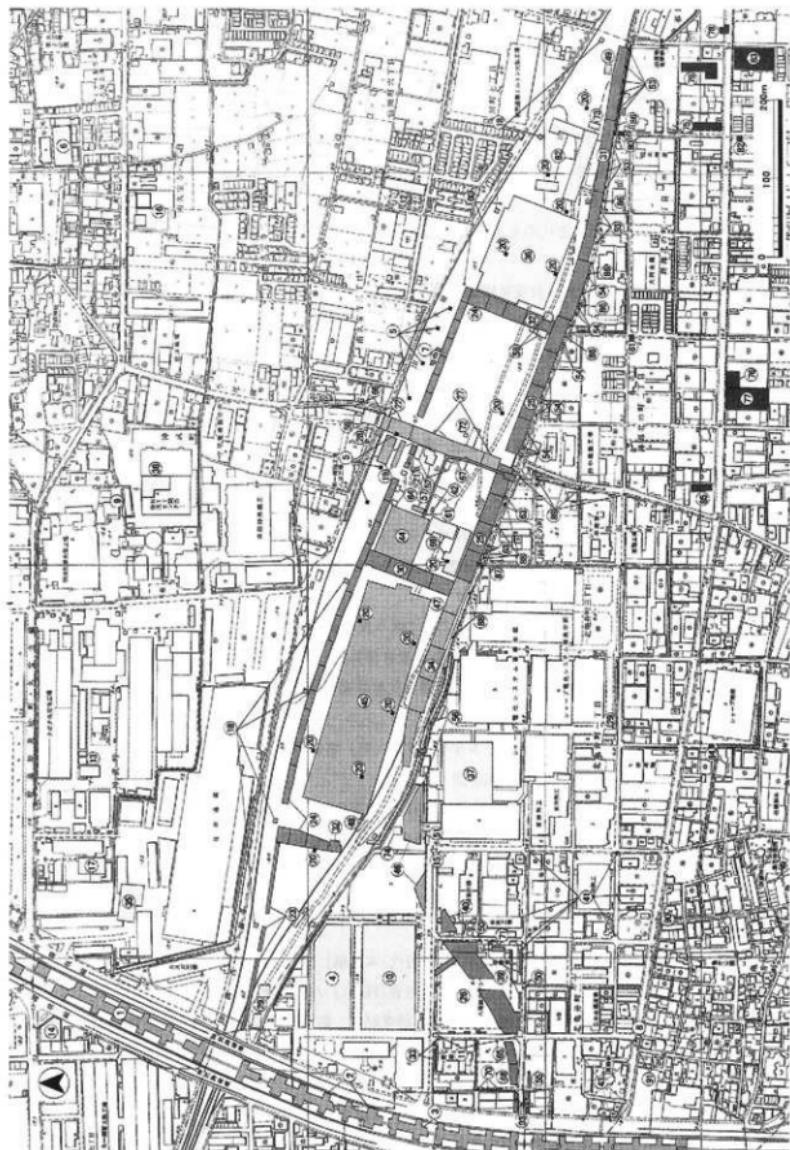
註記

- 註1 大乗佛教の戒律に定める10種の重大ないましめ。
- 註2 八尾市歴史民俗資料館 2002『河内木綿関係資料集1 河内の紡績りと木綿生産』
- 註3 大藏永常 天保4年(1833)『綿圃要務』
- 註4 大野 嘉 1989「島畑の考古学的調査－大阪府池島遺跡の事例－」『郵政考古紀要15』郵政考古学会
本遺構については、大野氏に従って「島畑」を使用した。

参考文献

- ・赤木克視・村上年生他 1987『河内平野の動態Ⅰ 近畿自動車道天理～吹田建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—プロローグ編—』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・梶山彦太郎・市原 真 1986『大阪平野のおいたち』青木書店
- ・(財)大阪市文化財協会 1983『長原遺跡発掘調査Ⅲ』
- ・金光正裕他 1987『久宝寺北(その1)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・松岡良憲他 1987『久宝寺南(その1)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・一瀬和夫他 1987『久宝寺南(その2)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・福永信雄 1997『河内潟東・南辺の弥生時代開始期における集落形態について』『宗教と考古学』金闇 惣先生の古稀をお祝いする会(株)勉誠社
- ・田代克己・今村道雄他 1981『瓜生堂遺跡Ⅲ 瓜生堂遺跡調査会
- ・寺川史郎・尾谷雅彦・他 1980『亀井・城山』(財)大阪文化財センター
- ・田中清美 1986 「加美遺跡の検討」「古代を考える43」古代を考える会
- ・田中清美 1986 「大阪府大阪市加美遺跡の検討－弥生時代中期後半の大型墳丘墓を中心にして－」『日本考古学年報 1984年度版』日本考古学協会
- ・安井良三・成海佳子 1991「跡部遺跡発掘調査報告－大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鐸－」(財)八尾市文化財調査研究会報告31』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1997「I 久宝寺遺跡(第8次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告55』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・小林義孝・西川寿勝 1992『久宝寺遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- ・原田昌則他 2003「久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書－大阪龍華都市拠点地区龍華東西線4工区に伴う－」(財)八尾市文化財調査研究会報告74』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1995 「久宝寺遺跡出土の朝鮮半島系土器について」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第31回資料)』
- ・成海佳子 1992「久宝寺遺跡の調査概要」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第25回)資料』大阪府教育委員会
- ・原田昌則 2001「久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書－大阪龍華都市拠点地区区画整理2号線に伴う－」(財)八尾市文化財調査研究会報告68』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則・吉田珠己・岡田清一・古川晴久・榎口 薫 1999「8.久宝寺遺跡第23調査(K H97-23)」『平成10年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則・岡田清一 2004「I 久宝寺遺跡第28調査(K H99-28)」(財)八尾市文化財調査研究会報告77』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則・金穂満夫 2004「III久宝寺遺跡第37調査(K H2001-37)」(財)八尾市文化財調査研究会報告77』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 2001「中河内地域における定型化する古墳以前の墓制について」『実証の地域史－村川行弘先生頌寿記念論集』村川行弘先生頌寿記念会
- ・西村 歩・南条直子他 2004「久宝寺遺跡・龍華地区発掘調査報告書V」(財)大阪府文化財センター調査報告書 第103集』(財)大阪府文化財センター
- ・後川恵太郎 2003「久宝寺遺跡墳墓群の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会(第46回)資料』大阪府教育委員会、(財)大阪府文化財センター
- ・金光正裕・亀井 聰・菊井佳弥 2005「久宝寺遺跡 発掘調査成果－2001～2004年度のまとめ」(財)大阪府文化財センター

- ・山川隆一 1994「古墳時代初頭前後の中河内地域—II 大和川流域に立地する遺跡群の枠組みについて—」『弥生文化博物館研究報告第3集』大阪府立弥生文化博物館
- ・広瀬雅信他 1992『壹振遺跡 大阪府文化財調査報告書 第39輯』大阪府教育委員会
- ・渡辺昌宏他 1985『美國』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・井藤 徹他 1978『長原』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・本田奈津子 1996『占墳時代の合掌型壙—久宝寺遺跡・龍華地区検出例をもとに—』『大阪文化財研究第10号』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・小山田宏一 2001「第二章 古代の土木技術 四、渡來人と治水技術」「開館記念特別展 古代の土木技術」大阪府立狭山池博物館
- ・原田昌則他 2001「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書—大阪龍華都市拠点地区龍華東西線3工区の掘削工事に伴う」(財)八尾市文化財調査研究会報告69』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・梅木謙一 2003「3近畿の西部瀬戸内系土器—複合口縁壺を中心に— 五、桜井市勝山池(勝山古墳)出土の南九州系土器の性状」「初期の古墳と大和の考古学」学生社
- ・井藤 徹他 1978『長原』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・後藤信義・本田奈都子 1996『八尾市龟井在住 久宝寺遺跡・龍華地区(その1)発掘調査報告書—JR久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う—』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第6集』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・後藤信義 1998『久宝寺遺跡七ツ門古墳現地検討会資料』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・赤木克視他 2001「久宝寺遺跡・龍華地区発掘調査報告書Ⅲ」「(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第60集』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・高井健司 1987「城下マンション(仮称)建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(N G 85-23)略報」「昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会
- ・櫻井久之 2001「長原遺跡の小方墳」「大阪府埋蔵文化財研究会(第43回)資料」大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・亀井輝一郎 1976「大和川と物部氏」「日本書紀研究第九輯」培養房
- ・坂本太郎他 1965『日本書紀下』(株)岩波書店
- ・森田康夫 1980「八尾編年史<古代・中世>」「八尾市民文化双書No.1」八尾市立図書館
- ・坪田真一・金親満夫 2004「淡川廃寺第2・3次調査」「(財)八尾市文化財調査研究会報告79」「(財)八尾市文化財調査研究会
- ・足利龍亮 1986「由義京の宮城および京城考」「長岡京古文化論叢」中山修一先生古稀記念事業会(株)同朋舎出版
- ・山本 博 1971「竈田越」学生社
- ・吉岡 哲 1988「考古編 第1～5章」「八尾市史(前近代)本文編」八尾市役所
- ・安井良三他 1991「大阪府八尾市寺院古文書調査報告書(日録)」「八尾市教育委員会
- ・棚橋利光 2000「中世八尾における律宗の広がり」「研究紀要 第11号」八尾市立歴史民俗資料館
- ・櫻井敏雄・大草一憲 1988「寺内町の基本計画に関する研究—久宝寺寺内町と八尾寺内町を中心として—」八尾市教育委員会
- ・岡田清一 2004「久宝寺寺内町遺跡 第1次調査—「八尾市まちなみセンター」建設工事に伴う発掘調査報告書—」「(財)八尾市文化財調査研究会報告80」「(財)八尾市文化財調査研究会



第2図 調査地周辺の発掘調査位置図 (S=1/6000)

第1表 調査地周辺の発掘調査一覧表

番号	調査名(施設名)	調査主体	所在地	調査期間	文 部 省	
					文	部
1	久宝寺南(その2)	市教委 大文七	神武町 S67/7/5~ S69/6/30	赤木克紀・一瀬和夫 1987「久宝寺南(その2)」大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター	久宝寺南(その2)	大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター
2	龜井北(その1)	*	大阪市平野 S59/3/1~ S61/3/31	小野久雄・飯尾丈史 1985.3「龜井北(その1)」大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター	龜井北(その1)	大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター
3	龜井北(その2)	*	人阪右宮野 区御堂4 S59/3/10~ S61/1/16	美・花之・山上 弘 1986「龜井北(その2)」大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター	龜井北(その2)	大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター
4	久宝寺1次(KH84-1)	八文研	北龜井3-1 S59/4/2~ 5/26	黒川昌義 1993「II久宝寺跡第1次調査(KH84-1)」「八尾市埋蔵文化財免 報調査報告(財)八尾市文化財調査研究会」「八尾市埋蔵文化財免 報調査報告(財)八尾市文化財調査研究会」	II久宝寺跡第1次調査(KH84-1)	八尾市埋蔵文化財免 報調査報告(財)八尾市文化財調査研究会
5	久宝寺遺跡(63-259)	市教委	龜井・渋川 S63/8/30~ 11/25~12/1	近江俊秀 1989「久宝寺遺跡(63-259)の調査」「八尾市内遺跡昭和63年度免 報調査報告書」昭和63年度公共事業・八尾市文化財報告20号	久宝寺遺跡(63-259)	八尾市教育委員会
6	久宝寺3次(KH88-3)	八文研	久宝寺4 S68/12/5~ 12/28	西村公助 1989「久宝寺3次調査(第3回調査)」「八尾市埋蔵文化財免 報調査報告書」昭和68年年度公共事業・八尾市文化財報告21号	久宝寺3次調査(第3回調査)	八尾市教育委員会
7	久宝寺4次(KH90-4)	*	北龜井2 H2/4/2~ 6/12	坪田真一 1993「I久宝寺遺跡第4次調査(KH90-4)」「八尾市埋蔵文化財免 報調査報告書(財)八尾市文化財調査研究会41回」「八尾市文化財調査研究会 報告32号」	I久宝寺遺跡第4次調査(KH90-4)	八尾市埋蔵文化財免 報調査報告書(財)八尾市文化財調査研究会
8	久宝寺5次(KH90-5)	*	龜井・渋川 H2/4/15~ 4/22	高萩千秋 1994「II久宝寺遺跡(KH90-5)」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会 報告33号」	II久宝寺遺跡(KH90-5)	八尾市埋蔵文化財免 報調査報告書(財)八尾市文化財調査研究会
9	久宝寺6次(KH90-6)	*	神武町17-20 H2/9/3~ 10/12	原三昌明 1993「III久宝寺遺跡第6次調査(KH90-6)」「八尾市埋蔵文化財免 報調査報告書(財)八尾市埋蔵文化財調査研究会」「八尾市埋蔵文化財免 報調査報告書(財)八尾市文化財調査研究会」	III久宝寺遺跡第6次調査(KH90-6)	八尾市埋蔵文化財免 報調査報告書(財)八尾市文化財調査研究会
10	久宝寺9次(KH91-9)	*	北龜井3-1 1-72 12/3	成海佳子 1992「III久宝寺遺跡第9次調査(KH91-9)」「平成3年度(財)八尾 市埋蔵文化財調査研究会事業報告書(財)八尾市埋蔵文化財免 報調査報告書」	III久宝寺遺跡第9次調査(KH91-9)	八尾市埋蔵文化財免 報調査報告書(財)八尾市文化財調査研究会
11	久宝寺10次(KH91-10)	*	北龜井2-1 3 H3/10/2~ 10/28	原田昌穂 1994「III久宝寺遺跡第10次調査(KH91-10)」「八尾市埋蔵文化財免 報調査報告書(財)八尾市文化財調査研究会34回」「八尾市文化財調査研究会 報告34号」	III久宝寺遺跡第10次調査(KH91-10)	八尾市埋蔵文化財免 報調査報告書(財)八尾市文化財調査研究会
12	久宝寺11次(KH91-11)	*	渋川町6-1 34-35 H3/10/7~ 10/18	西村公助 1992「III久宝寺遺跡第11次調査(KH91-11)」「財)八尾市埋蔵文化財調 査研究会報告書」	III久宝寺遺跡第11次調査(KH91-11)	八尾市埋蔵文化財調査 研究会報告書
13	久宝寺13次(KH91-13)	*	神武町2-1 35 H3/12/16~ 4/1/25	西村公助 1992「II.17.久宝寺遺跡第13次調査(KH91-13)」「平成3年度(財)八尾 市埋蔵文化財調査研究会事業報告書」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会 報告35号」	II.17.久宝寺遺跡第13次調査(KH91-13)	八尾市埋蔵文化財調査 研究会報告書
14	久宝寺14次(KH92-14)	*	神武町190-1 H4/5/26~ 8/10	坪田真一 1995「III.10.久宝寺遺跡第14次調査(KH92-14)」「平成3年度(財)八尾市埋 蔵文化財調査研究会事業報告書(財)八尾市埋蔵文化財調査研究会 報告36号」	III.10.久宝寺遺跡第14次調査(KH92-14)	八尾市埋蔵文化財調査 研究会報告書
15	久宝寺16次(KH93-16)	*	北龜井3 H5/5/3~ 6/8	高萩千秋 1994「III.久宝寺遺跡第16次調査(KH93-16)」「財)八尾市埋蔵文化財調 査研究会報告書42回」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会	III.久宝寺遺跡第16次調査(KH93-16)	八尾市埋蔵文化財調査 研究会報告書
16	久宝寺17次(KH93-17)	*	久宝寺1-40 H5/7/1~ 7/30	岡田清一 1997「II.久宝寺遺跡(第17次調査)」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会 報告55号」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会	II.久宝寺遺跡(第17次調査)	八尾市埋蔵文化財調査研究会 報告55号
17	久宝寺18次(KH94-18)	*	神武町143 -146根 H6/9/1~ 10/12	坪田真一 1998「III.久宝寺遺跡(第18次調査)」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会 報告56号」	III.久宝寺遺跡(第18次調査)	八尾市埋蔵文化財調査研究会 報告56号
18	久宝寺(95.1~7)	人文研	北龜井・渋川 H17/5/2~ 12/20	原田真一・他 1993「III.久宝寺遺跡(第19次調査)」「財)八尾市埋蔵文化財調 査研究センター・報告書3、第5集」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究センター	III.久宝寺遺跡(第19次調査)	八尾市埋蔵文化財調査研究センター 報告書3、第5集
19	久宝寺(96.8~9)	*	龜井 H7/2/28~ 12/20	森藤信哉・他 1993「III.久宝寺遺跡(第20次調査)」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究センター・報告書4」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究センター・報告書40号」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究センター・報告書41号」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究センター・報告書42号」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会	III.久宝寺遺跡(第20次調査)	八尾市埋蔵文化財調査研究センター 報告書4、40号
20	久宝寺(95-565)	市教委	渋川・龜井 H8/1/9~ 7/12	原田真一 1998「III.久宝寺遺跡(第21次調査)」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会 報告57号」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会」	III.久宝寺遺跡(第21次調査)	八尾市埋蔵文化財調査研究会 報告57号
21	久宝寺20次(KH96-20)	八文研	渋川 H8/9/24~ 11/14	坪田真一 2000「III.久宝寺遺跡(第22次調査)」「財)八尾市埋蔵文化財調 査研究会報告66号」	III.久宝寺遺跡(第22次調査)	八尾市埋蔵文化財調査研究会 報告66号
22	久宝寺(96.1~7-1)	大文研	北龜井 H8/1/1~ H10/3/31	後藤千鶴・他 1998.3「III.久宝寺遺跡(第23次調査)」「財)八尾市埋蔵文化財調 査研究センター・報告書2」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究センター 報告書27号」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会報告68号」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会 報告68号」	III.久宝寺遺跡(第23次調査)	八尾市埋蔵文化財調査研究会 報告68号
23	久宝寺22次(KH97-22)	八文研	龜井 H9/10/22~ 11/1/13	原田昌穂 2001「III.久宝寺遺跡(第24次調査)」「財)八尾市埋蔵文化財調 査研究会事業報告書69号」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会	III.久宝寺遺跡(第24次調査)	八尾市埋蔵文化財調査研究会 事業報告書69号
24	久宝寺23次(KH97-23)	*	龜井・渋川 H9/10/23~ 11/6/20	本書I	III.久宝寺遺跡(第23次調査)	八尾市埋蔵文化財調査研究会 事業報告68号
25	久宝寺24次(KH98-24)	*	龜井・渋川 H10/2/10~ 11/2/20	原田昌穂 2001「III.久宝寺遺跡(第25次調査)」「財)八尾市埋蔵文化財調 査研究会事業報告70号」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会	III.久宝寺遺跡(第24次調査)	八尾市埋蔵文化財調査研究会 事業報告70号
26	久宝寺25次(KH98-25)	*	北龜井3 H11/1/19~ 7/15	坪田真一・原田昌穂 2001「III.久宝寺遺跡(第26次調査)」「財)八尾市埋蔵文化財調 査研究会事業報告71号」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会	III.久宝寺遺跡(第25次調査)	八尾市埋蔵文化財調査研究会 事業報告71号
27	久宝寺(98.1~98-2)	大文研	渋川 H11/1/14~ 11/1/24	赤木克徳 2001「III.久宝寺遺跡(第27次調査)」「財)八尾市埋蔵文化財調 査研究会事業報告72号」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会	III.久宝寺遺跡(第26次調査)	八尾市埋蔵文化財調査研究会 事業報告72号
28	久宝寺26次(KH99-26)	八文研	神武町93-1 H11/3/23~ 8/20	岡三博一・橋口 一 2002「III.久宝寺遺跡(第28次調査)」「財)八尾市埋蔵文化財調 査研究会報告70号」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会	III.久宝寺遺跡(第27次調査)	八尾市埋蔵文化財調査研究会 報告70号
29	久宝寺27次(KH99-27)	*	北龜井3-1 1-72 7/21	西谷公助 2000「III.久宝寺遺跡(第29次調査)」「財)八尾市埋蔵文化財調 査研究会事業報告74号」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会	III.久宝寺遺跡(第28次調査)	八尾市埋蔵文化財調査研究会 事業報告74号
30	久宝寺28次(KH99-28)	*	龜井 H11/2/1~ 12/2/1	原山昌樹・赤木克徳 2004「III.久宝寺遺跡(第30次調査)」「財)八宝寺遺跡(財)八尾 市埋蔵文化財調査研究会報告77号」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会	III.久宝寺遺跡(第29次調査)	八尾市埋蔵文化財調査研究会 報告77号
31	久宝寺29次(KH99-29)	*	渋川 H11/9/1~ 11/1/30	原田長助・他 2003「III.久宝寺遺跡(第31次調査)」「財)八尾市埋蔵文化財調 査研究会事業報告74号」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会	III.久宝寺遺跡(第30次調査)	八尾市埋蔵文化財調査研究会 報告74号
32	久宝寺30次(KH99-30)	*	龜井・渋川 H12/1/20~ 3/7	本書II	III.久宝寺遺跡(第31次調査)	八尾市埋蔵文化財調査研究会 報告75号
33	久宝寺31次(KH99-31)	*	北龜井3 3/30	坪田昌一 2006「III.久宝寺遺跡(第32次調査)」「財)八尾市埋蔵文化財調 査研究会報告88号」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会	III.久宝寺遺跡(第32次調査)	八尾市埋蔵文化財調査研究会 報告88号
34	久宝寺(竪穴東西棟)	大文研	龜井 H11/2/29~ 12/2/29	西谷一・片桐茂雄 2004「III.久宝寺遺跡(第33次調査)」「財)八尾市埋蔵文化財調 査研究会報告89号」「財)八尾市埋蔵文化財調査研究会	III.久宝寺遺跡(第33次調査)	八尾市埋蔵文化財調査研究会 報告89号

順番	調査名(略号)	調査主体	所在地	調査期間	文 章 解 説
35	久宝寺32次(KH99-32)	八文研 他	神武町168 6/8	H12/3/13~ H12/3/28	森木めぐみ 2000 「15.久宝寺遺跡第32次調査 (K H99-32)」「平成11年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会 成田玉子・鶴口 真一・金城義典 2001 「久宝寺遺跡第32次調査 (K H99-33)」「平成12年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
36	久宝寺33次(KH2000-33)	*	洪川	H12/3/13~ H13/2/28	森木めぐみ 2001 「15.久宝寺遺跡第34次調査 (K H2000-34)」「平成12年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
37	久宝寺34次(KH2000-34)	*	龜井3-41	H12/7/18~ H1/25	森木めぐみ 2001 「15.久宝寺遺跡第34次調査 (K H2000-34)」「平成12年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
38	久宝寺35次(KH2000-35)	*	神武町1番 79	H12/10/16 ~11/14	森木めぐみ 2001 「16.久宝寺遺跡第35次調査 (K H2000-35)」「平成12年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
39	久宝寺36次(KH2000-36)	*	北龜井町	H13/2/25~ 3/30	原庄昌子・金城義典 2004 「17.久宝寺遺跡第36次調査 (K H2000-36)」「久宝寺遺跡 (財)八尾市文化財調査研究会報告77」(財)八尾市文化財調査研究会 原田昌司・金城義典 2004 「18.久宝寺遺跡 (第37次調査)」「久宝寺遺跡 (財)八尾市文化財調査研究会報告77」(財)八尾市文化財調査研究会
40	久宝寺37次(KH2001-37)	*	龜井	H13/9/13~ 11/16	高萩千秋 2003 「IX 久宝寺遺跡第38次調査 (K H2001-38)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告75」(財)八尾市文化財調査研究会
41	久宝寺38次(KH2001-38)	*	北龜井町2 -3	H14/1/9~ 10/10	高萩千秋 2003 「IX 久宝寺遺跡第38次調査 (K H2001-38)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告75」(財)八尾市文化財調査研究会
42	久宝寺39次(KH2001-39)	*	龜井	H14/2/19~ 9/26	本書IV
43	久宝寺40次(KH2001-40)	*	北龜井2	H14/2/19~ 7/29	森木めぐみ・坪田真一 2003 「X III 久宝寺遺跡第40次調査 (K H2001-40)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告75」(財)八尾市文化財調査研究会
44	多目的広場	人文研七	龜井	H13/2/25~ H14/2/28	西村 伸・南条洋子 2003 「久宝寺遺跡-蘿草地区発掘調査報告書V」(財)大阪府文化財センター 大阪府文化財センター調査報告書 第103号」(財)大阪府文化財センター
45	水処理施設(その1~3)	*	龜井	H13/4/20~ H16/2/27	未報告
46	竜華東西線(その2)	*	龜井	H14/1/22~ 8/31	西村 伸・奥村茂輝 2004 「久宝寺遺跡-蘿草地区発掘調査報告書VI」(財)大阪府文化財センター 大阪府文化財センター調査報告書 第118号」(財)大阪府文化財センター
47	小阪合発進立杭(02-2)	大府文七	龜井	H15/3/1~ 9/30	2003 平成14年度 年報」(財)大阪府文化財センター
48	長倉立杭	*	龜井	H13/4/20~ H14/5/29	2003 平成13年度 年報」(財)大阪府文化財センター
49	小阪合立杭	*	洪川	H13/4/20~ H14/5/29	*
50	久宝寺41次(KH2002-41)	八文精	龜井町2 -1・2、洪川 -12/20	H14/7/29~ 8/19	西村公路 2003 「X IV 久宝寺遺跡第41次調査 (K H2002-41)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告75」(財)八尾市文化財調査研究会
51	久宝寺42次(KH2002-42)	*	龜井町3- 41	H14/9/30~ 10/24	鶴口 真一 2003 「19.久宝寺遺跡第42次調査 (K H2002-42)」「平成14年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
52	久宝寺43次(KH2002-43)	*	洪川	H14/10/1~ 11/8	坪田真一・金堀尚夫 2003 「1久宝寺遺跡第43次調査 (K H2002-43)」「久宝寺遺跡 (財)八尾市文化財調査研究会報告83」(財)八尾市文化財調査研究会
53	久宝寺44次(KH2002-44)	*	洪川町	H14/11/26~ -12/13	高田清一 2003 「X V 久宝寺遺跡第44次調査」「(財)八尾市文化財調査研究会報告76」(財)八尾市文化財調査研究会
54	久宝寺45次(KH2002-45)	*	跡部北の町 1・2、洪川 -12/20	H14/11/27~ -12/20	成瀬博子 2003 「V 久宝寺遺跡第45次調査」「(財)八尾市文化財調査研究会報告76」(財)八尾市文化財調査研究会
55	久宝寺46次(KH2002-46)	*	龜井・北龜 井3-2	H15/1/28~ 3/10	坪田真一 2006 「VI.久宝寺遺跡第46次調査 (K H2002-46)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告88」(財)八尾市文化財調査研究会
56	久宝寺47次(KH2002-47)	*	北龜井2- 3	H15/2/28~ 7/2	成瀬博子 2004 「V.久宝寺遺跡第47次調査 (K H2002-47)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告78」(財)八尾市文化財調査研究会
57	駅前広場防水工事(02-3)	大府文七	龜井	H15/3/3~ 4/30	金堀正祐 2003 「久宝寺遺跡-蘿草地区発掘調査報告書V」(財)大阪府文化財センター センター調査報告書 第102号」(財)大阪府文化財センター
58	久宝寺48次(KH2002-48)	八文精	洪川	H15/3/10~ 4/7	坪田真一 2005 「VI.久宝寺遺跡第48次調査」「久宝寺遺跡 (財)八尾市文化財調査研究会報告83」(財)八尾市文化財調査研究会
59	久宝寺49次(KH2003-49)	*	神戸斯	H15/6/11~ 9/1-4	坪田真一・高萩千秋 2005 「久宝寺遺跡第49次調査」「久宝寺遺跡 (財)八尾市文化財調査研究会報告83」(財)八尾市文化財調査研究会
60	久宝寺50次(KH2003-50)	*	洪川町	H15/6/3~ 6/5	本書IV
61	久宝寺51次(KH2003-51)	*	龜井	H15/6/10~ 7/31	本書IV
62	久宝寺52次(KH2003-52)	*	洪川	H15/9/8~ H16/4/13	鶴口 真一 2004 「13.久宝寺遺跡第52次調査 (K H2003-52)」「平成15年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
63	久宝寺53次(KH2003-53)	*	跡部北の町 2・3、龜井 10/9	H15/10/3~ 12/3	成瀬惠子 2005 「VI.久宝寺遺跡第53次調査」「久宝寺遺跡 (財)八尾市文化財調査研究会報告83」(財)八尾市文化財調査研究会
64	久宝寺54次(KH2003-54)	*	洪川	H15/11/2~ -12/16	成瀬恵子 2005 「V.久宝寺遺跡第54次調査」「久宝寺遺跡 (財)八尾市文化財調査研究会報告83」(財)八尾市文化財調査研究会
65	久宝寺55次(KH2003-55)	*	北龜井3	H16/1/19~ 12/20	坪田真一 2006 「VI.久宝寺遺跡第55次調査 (K H2003-55)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告83」(財)八尾市文化財調査研究会
66	久宝寺56次(KH2004-56)	*	神戸斯93- 1・4	H16/7/1~ 9/3	原田昌司 2005 「VI.久宝寺遺跡第56次調査」「久宝寺遺跡 (財)八尾市文化財調査研究会報告83」(財)八尾市文化財調査研究会
67	久宝寺57次(KH2004-57)	*	蘿草町2	H16/7/5~ 7/7	鶴口 真一 2006 「VI.久宝寺遺跡第57次調査」「久宝寺遺跡 (財)八尾市文化財調査研究会報告83」(財)八尾市文化財調査研究会
68	久宝寺58次(KH2004-58)	*	北龜井3	H16/5/31~ 9/30	坪田真一 2006 「VI.久宝寺遺跡第58次調査 (K H2004-58)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告83」(財)八尾市文化財調査研究会
69	久宝寺59次(KH2004-59)	*	龜井	H16/8/5~ 11/30	西村公助 2005 「VI.久宝寺遺跡第59次調査 (K H2004-59)」「平成16年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会

I 久宝寺遺跡第23次調査(K H97-23)

順番	調査名(地名)	調査主体	所在地	調査期間	文 獻	報
70	久宝寺60次(K H2004-60)	八文研	北堀井3	H16/10/7~ 10/21	北川利哉 2006 「久宝寺遺跡第60次調査(K H2004-60)」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告書〔附〕八尾市文化財調査研究会	
71	久宝寺61次(K H2004-61)	+	北堀井3	H16/11/9~ 12/15	北川利哉 2006 「久宝寺遺跡第61次調査(K H2004-61)」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告書〔附〕八尾市文化財調査研究会	
72	久宝寺62次(K H2004-62)	+	施事町1	H17/1/20~ 1/25	北川利哉 2006 「久宝寺遺跡第62次調査(K H2004-62)」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告書〔附〕八尾市文化財調査研究会	
73	久宝寺63次(K H2005-63)	+	施事町1	H17/1/20~ 1/25	本書V	
74	久宝寺65次(K H2005-65)	+	施事町2	H17/7/27~ 10/	本書VI	
75	跡部(S56調査)	市教委	春日町1- 57	S56/11/9~ 11/19	高木真光 1983.3 「第6章『跡部遺跡発掘調査概要報告』」〔附〕八尾市埋蔵文化財発掘調査報告〔附〕八尾市教育委員会	
76	跡部1次(A T82-1)	八文研	跡部町1- 3	S57/10/1~ 10/5	西村公助 1983.11 「跡部遺跡(1回)和57年度における埋蔵文化財発掘調査」その成果と概要 〔附〕八尾市教育委員会	
77	跡部4次(A T88-4)	+	跡部町1- 4-1	S62/10/1~ 10/22	西村公助 1988.11 「19 跡部遺跡(第4次調査)」〔附〕八尾市文化財調査研究会報告書〔附〕63年度 〔財〕八尾市文化財調査研究会報告書25	
78	跡部5次(A T89-5)	+	春日町1- 45-1	H1/10/17~ 11/30	安井良三他 1991 「跡部遺跡発掘調査報告」 大阪府八尾古事町1丁目出土ノ開示 (附) 八尾市文化財調査研究会報告書31	
79	跡部7次(A T92-7)	+	春日町1- 47-8	H4/7/7~ 8/10	原田昌弘 1993 「跡部遺跡(A T92-7) 第7次調査」〔附〕八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書 〔附〕八尾市文化財調査研究会報告書39	
80	跡部9次(A T92-9)	+	春日町1- 18/3	H4/10/7~ 10/13	原田昌弘 1993 「跡部遺跡(A T92-9) 第9次調査」〔附〕八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書 〔附〕八尾市文化財調査研究会報告書39	
81	跡部14次(A T93-14)	+	跡部北の町 1丁目	H5/11/29~ 12/10	原田昌弘 1994 「跡部遺跡第14次調査(A T93-14)」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告書42 〔附〕八尾市文化財調査研究会	
82	跡部17次(A T94-17)	+	太子堂1	H6/9/16~ 11/18	成瀬信子 1997 「跡部遺跡第17次調査(A T94-17)」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告書48 〔附〕八尾市文化財調査研究会	
83	跡部23次(A T96-23)	+	春日町4- 4	H9/2/21~ 3/31	原山聰司 2004 「跡部遺跡第23次調査(A T96-23)」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告書61 〔附〕八尾市文化財調査研究会報告書	
84	跡部28次(A T98-28)	+	跡部町4-1	H10/6/29~ 7/6	原山聰司 2004 「跡部遺跡第28次調査(A T98-28)」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告書65 〔附〕八尾市文化財調査研究会	
85	跡部	府教委	跡部北の町	H13/10/9~ 13/13/29	小林義重 2002 「跡部遺跡第33次調査(A T2002-33)」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告書75 〔附〕八尾市文化財調査研究会	
86	跡部33次(A T2002-33)	八文研	跡部北の町 1・2・3、春日 町1	9/9	原山聰司 2002 「跡部遺跡第33次調査(A T2002-33)」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告書75 〔附〕八尾市文化財調査研究会	
87	跡部34次(A T2002-34)	+	跡部北の町	H14/9/2~ 9/11	坪井真一 2003 「跡部遺跡第34次調査(A T2002-34)」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告書75 〔附〕八尾市文化財調査研究会	
88	跡部35次(A T2002-35)	+	跡部北の町	H14/12/9~ 15/1/16	合田和夫 2003 「跡部遺跡第35次調査(A T2002-35)」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告書75 〔附〕八尾市文化財調査研究会	
89	跡部36次(A T2003-36)	+	跡部北の町	H15/1/17~ 11/15	成瀬信子 2003 「跡部遺跡第36次調査(A T2003-36)」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告書82 〔附〕八尾市文化財調査研究会	
90	龟井4次(K M99-4)	+	龟井町1- 2	H6/2/17~ 2/21	吉川謙久 1998 「V龟井遺跡 第4次調査(K M99-4)」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告書40 〔附〕八尾市文化財調査研究会	
91	龟井9次(K M99-9)	+	龟井町4	H11/12/6~ 12/20	成瀬信子 2001 「V龟井遺跡(第9次調査)」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告書67 〔附〕八尾市文化財調査研究会	
92	龟井10次(K M99-10)	+	龟井町1- 2	H12/3/6~ 3/31	成瀬信子 2001 「V龟井遺跡(第10次調査)」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告書67 〔附〕八尾市文化財調査研究会	
93	龟井(K K01-2.01-1, 03-1)	大市協	大阪市平野 区御典4	H14/2~3 H15/3~H 15/7~8	辻 美紀 2004 「龟井北遺跡発掘調査報告」〔財〕大阪府文化財協会	

凡例
 ・大阪府教育委員会〔府教委〕・八尾市教育委員会〔市教委〕・(財)大阪文化財センター〔大文セ〕
 ・(財)大阪府文化財調査研究センター〔大文研セ〕・(財)大阪府文化財センター〔大府文セ〕
 ・(財)八尾市文化財調査研究会〔八文研〕・(財)大阪市文化財協会〔大市協〕

第3章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、旧国鉄の龍華操車場跡地で計画された「八尾都市計画事業大阪龍華都市拠点土地区画整理事業」に伴うものである。平成9年度以降、上記の計画に伴う基盤整備事業の一環として、主に道路部分を中心とした発掘調査が継続して実施されている。本書で報告する久宝寺遺跡第23次調査(KH97-23)は、実施計画の初年度にあたる平成9年度～平成10年度に久宝寺南駅前線道路築造工事に先立って実施した調査である。

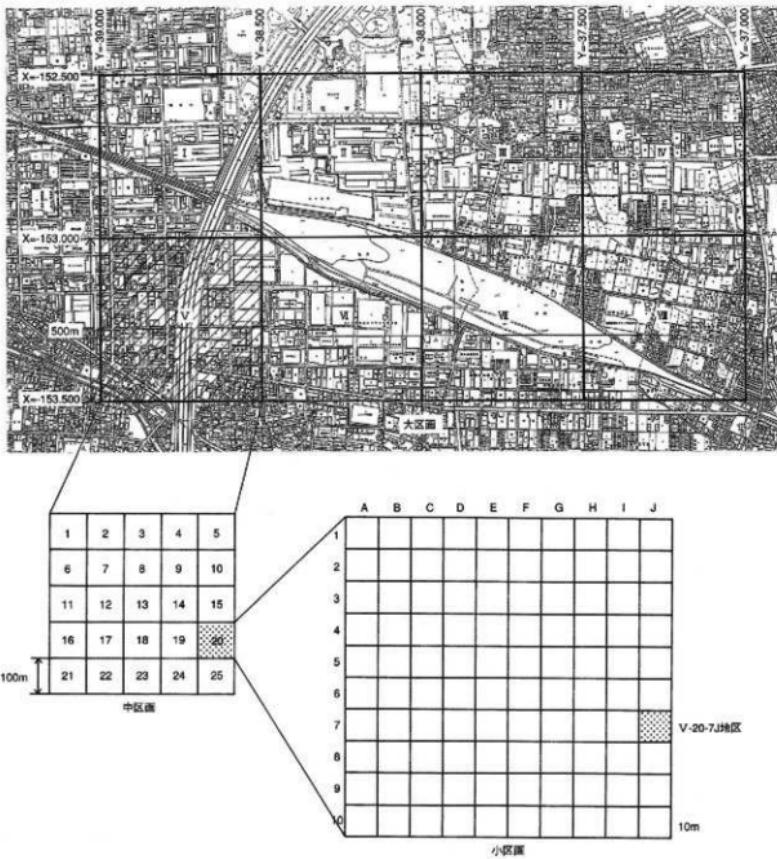
調査地点は、旧国鉄龍華操車場跡地内のJR大和路線に沿った北部に位置している。東西端が南北方向、その他は東西方向の広範囲に設定された調査区で総数は26箇所(1～26調査区)を数える。そのうち1～3調査区は、旧国鉄龍華操車場跡地内の西部に南北方向に設定された調査区で南北長70mを測る。4～22調査区は、3調査区の東約30m地点から東西方向に長く伸びる調査区で、途中の既往調査部分を含めて東西長約700mを測る。24～26調査区は、23調査区の南部から南北方向に伸びる調査区で南北長75mを測る。総調査面積は7720.16m²を測る。各調査区の規模・調査期間等は第2表にまとめた。

調査では、八尾市教育委員会による埋蔵文化財調査指示書に示された試掘調査により策定された数量表に基づき調査深度を決定した。各調査区の調査深度は1～7調査区が機械掘削2.2m、人力掘削0.6m、8～13調査区が機械掘削1.6～2.3m、人力掘削1.9～2.4m、14～16調査区が機械掘削1.45～1.6m、人力掘削0.4m、17～26調査区が機械掘削1.0～1.5m、人力掘削0.9～1.4mである。各調査区は鋼矢板打設により調査区を囲繞する方法をとり、調査終了後に鋼矢板を転用するかたちで調査を進め、先行した調査区の成果により調査深度を一部変更する方法を取った。なお、各調査区の四方には土層観察用のセクション(幅0.5m)を設定している。

調査区全域の地区割については、第3図に示した旧国鉄龍華操車場跡地周辺を含む東西2km、南北1kmにわたって、国土座標第VI系〔日本測地系〕(原点-東経136°00'、北緯36°00'・福井県越前岬付近)を基準として設定した大区画・中区画・小区画を使用した。この地区割基準は、龍華操車場跡地内において平成9年度以降に継続する発掘調査に対応する為に、本調査研究会が独自に設定したものである。大区画は500m四方で全体を8区(I～VIII)に区分し、北西隅の区画をIとし南東隅をVIIIと呼称した。中区画は大区画を100m単位に25区(1～25)に区分し、北西隅の区画を1とし南東隅を25と呼称した。小区画は中区画を10m単位に区画し、地区の呼称については、東西方向はアルファベット(西からA～J)、南北方向は算用数字(北から1～10)で示し、1A地区～10J地区とした。以上の区分法を使用して、個々の地区表記においては、第3図の凡例で示したような表示方法を取った。なお、小区画内の地点表示については、国土座標値を入れる方法を取った。



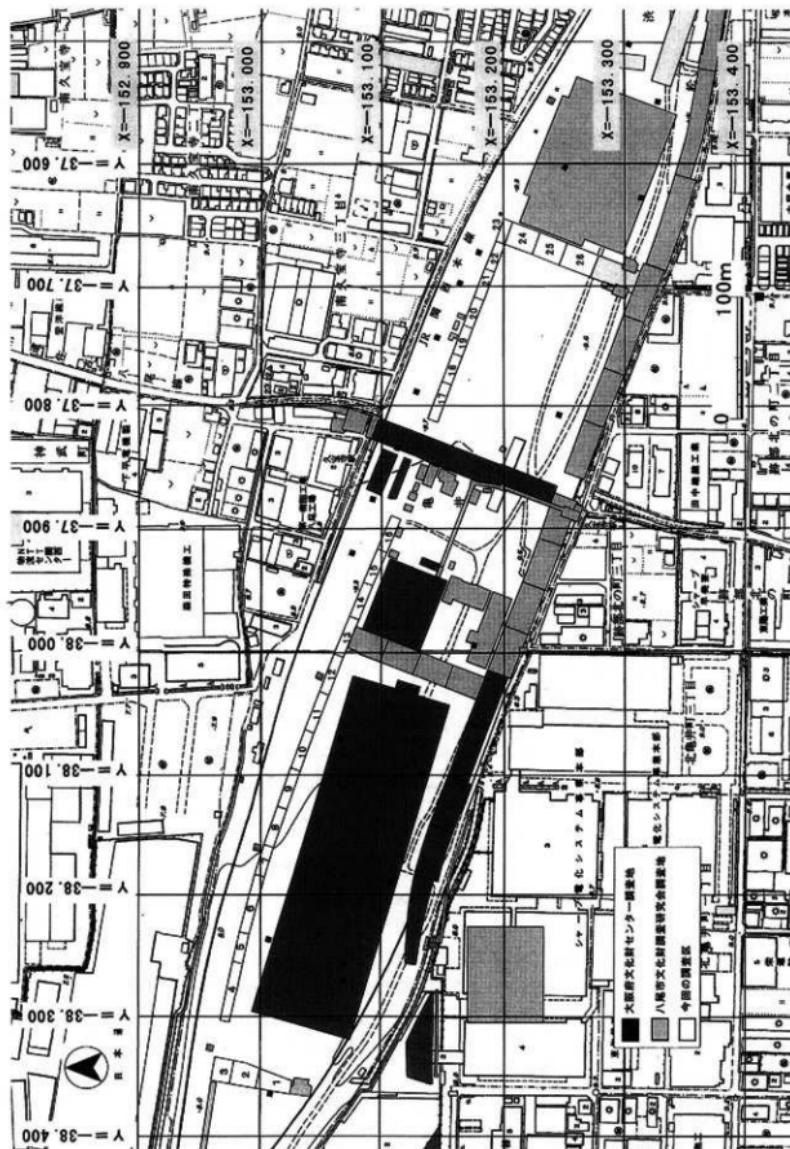
写真2 調査風景[左上方がJR久宝寺駅](西から)



第3図 調査区地区割模式図

調査面の呼称については、人力による調査で検出された面を上部より「第1面」とした。なお、17調査区では近世初頭以降に構築された島畑が確認されており、島畑に付随する水田を構築する際に大規模な削平を受けた箇所が認められた。このような地点では、調査面と時期との整合を困難にしており、同一面で時期幅のある遺構を検出する結果となった。

遺構番号については、報告書作成段階に各調査区の調査面を統一した後、遺構毎に1調査区から順番に通し番号を付けた。遺構名は、遺構略号の後に面番号を付与し、3~4桁の遺構番号と合わせて表記した。[凡例 S D101・S D1101]。



第4図 調査区設定図(1/4000)

第2表 調査区一覧表

地区名	東西幅(m)	南北幅(m)	面積(m ²)	調査期間	担当者
1調査区	11~17	29	386	平成10年2月16日~3月6日	岡田
2調査区	16.5~19.5	22	392	平成10年3月16日~6月5日	タ
3調査区	15.6	18.8	293	平成10年1月20日~2月13日	岡田
4調査区	49.6	7.6~8.4	407	平成10年1月5日~2月10日	古田・橋口
5調査区	24.8	8.4	207	平成10年2月17日~3月25日	吉田
6調査区	49.6	8.4	417	平成10年1月7日~3月13日	タ
7調査区	25.2	8.4	212	平成10年3月17日~4月27日	橋口
8調査区	33.2	8.4	279	平成9年10月31日~平成10年1月22日	タ
9調査区	33.2	8.4	279	平成10年2月27日~5月13日	岡田
10調査区	33.2	8.4	279	平成9年10月27日~平成10年1月19日	タ
11調査区	33.2	8.4	279	平成10年2月9日~5月19日	吉田
12調査区	33.2	8.4	279	平成9年10月27日~平成10年1月19日	タ
13調査区	34	8.4	286	平成10年3月24日~6月5日	橋口
14調査区	30	8.4	252	平成9年12月24日~平成10年1月27日	原田
15調査区	30	8.4	252	平成10年3月11日~3月31日	橋口
16調査区	30	8.4	252	平成10年1月7日~2月27日	タ
17調査区	32.4	8.4	272	平成10年3月13日~4月17日	原田
18調査区	24.8	8.4	208	平成9年10月30日~平成10年2月16日	占川
19調査区	24.8	8.4	208	平成10年3月4日~4月8日	タ
20調査区	24.8	8.4	208	平成9年12月15日~平成10年1月20日	タ
21調査区	24.8	8.4	208	平成10年2月13日~3月13日	タ
22調査区	24.8	8.4	208	平成9年10月23日~12月12日	タ
23調査区	18.8	8.4	158	平成10年1月13日~3月19日	橋口
24調査区	18.8	23.6	444	平成10年4月18日~6月1日	原田
25調査区	18.8	24	451	平成10年1月28日~3月13日	タ
26調査区	18.8	27.2	511	平成10年3月26日~5月28日	吉川

現地調査での面ごとの平面図の作成は、各調査区あたり2回のクレーン使用による航空写真測量(1/20・1/100)と平板測量(1/50・1/100)を併用した。また、調査区周囲の地層断面図は1/20とし、主な構造の平・断面図については1/10・1/20に統一した。方位は座標北を採用した。高さの基準は東京標準潮位(T.P.)を適用した。なお、花粉、樹種鑑定、年輪年代については自然科學分析を依頼しており、成果については第4章に示した。調査の結果、弥生時代前期~近世に至る遺構面を7面(第1~7面)検出した。遺物は弥生時代前期~近世に比定される土器・土製品・石器・木製品が出土しており、総数はコンテナ箱(40×60×20cm)約150箱である。

第2節 基本層序

本調査における層序については、調査対象範囲が東西で約700mにおよぶ広大なものである他、各調査地における機械・人力掘削の数量の違いから調査区全域において同条件での観察はできなかった。調査地全体を通しての地層を1~3調査区では西壁、4~23調査区では北壁、24調査区~26調査区では東壁を中心に20層に分類し、基本層序(第0層~第10層)とした。

なお、記述したように調査深度の違いにより、第Ⅳ層～第IX層を対象とした14～26調査区と、第VII層～第Ⅸ層を対象とした4～13調査区、第X層～Ⅺ層を対象とした1～3調査区がある。基本層序の番号呼称として第0層～第Ⅹ層を使用するほか、個々の地層名は算用数字で示した。

第0層：龍華操車場造成時の客土である。層厚0.9～1.6mを測る。上面の標高は26調査区南端でT.P. +9.6m、1調査区南端でT.P. +8.2mを測る。

第I層：龍華操車場造成直前（昭和10年代前半）の作土で、17～26調査区で確認した。色調は7.5YR4/3褐色～N5/0灰色で、層相は砂質シルトである。層厚0.1～0.2mを測る。上面の標高は24調査区でT.P. +8.6m、19調査区でT.P. +8.3mで西に行くほど低くなっている。

第II層：17・22～26調査区で確認した。近世の作土層である。5Y5/2灰オリーブ～10Y4/2オリーブ灰色の色調で一部、グライ化のため緑灰色を呈する部分がある。層相はシルト～シルト質粘土で、酸化鉄・マンガン斑が顕著である。層厚は0.05～0.3mを測る。

第III層：17～25調査区で確認した。2.5Y6/2灰黄色～10YR4/1褐灰色の色調で、上部は酸化鉄・マンガン斑が顕著で土壤化が進行している。層相は砂質シルトが優勢である。比較的安定しており、層厚が最大で0.5mを測るもので1～3層に分層が可能である。上面が第1面で、一部を除けば近世～近代の生産域に関連した遺構が検出されている。遺物は奈良時代～平安時代を中心とした土器類が少量出土している。

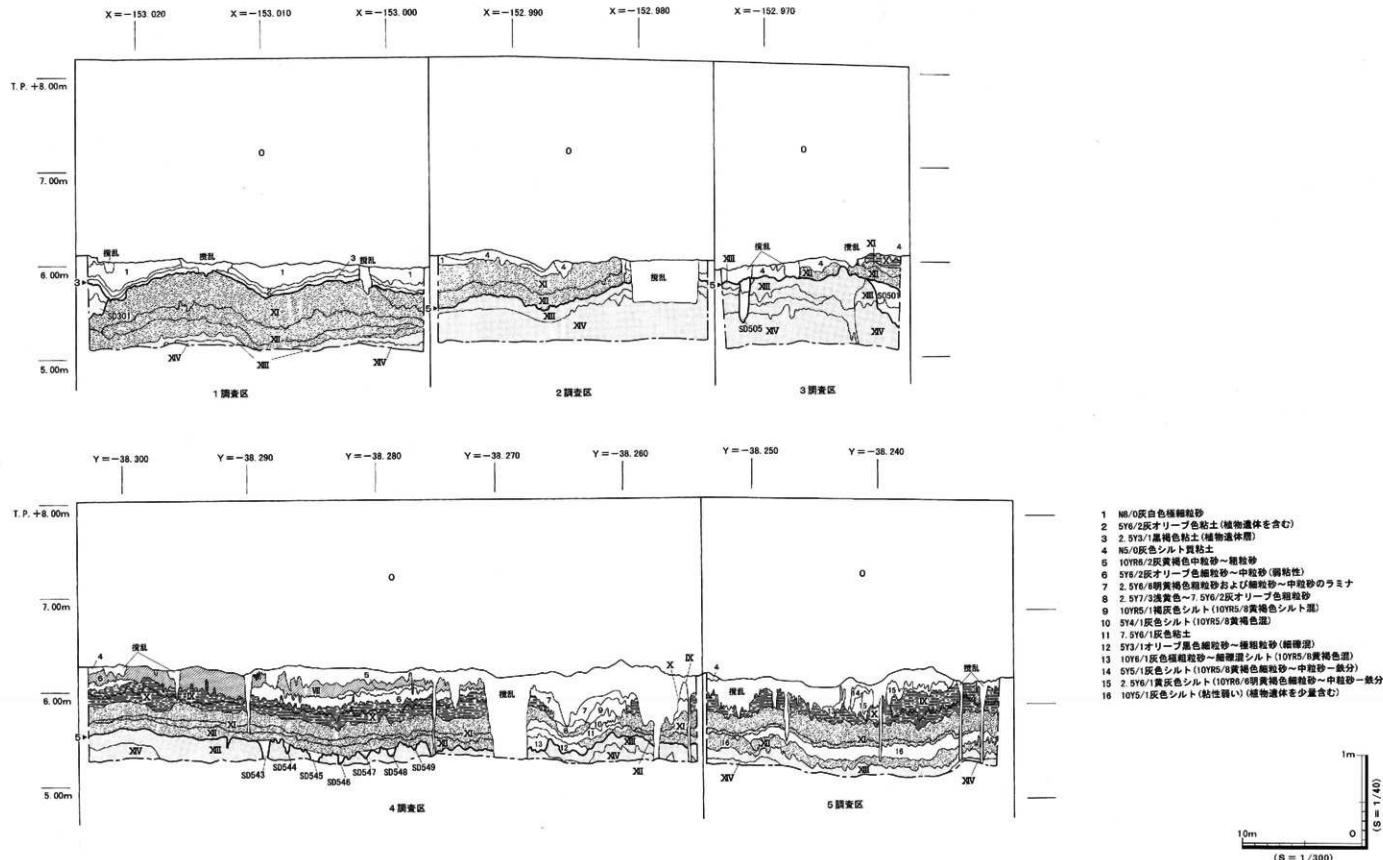
第IV層：14～23調査区で確認した。10YR5/1褐灰色～2.5Y6/2灰黄色の色調で、層相はシルト～粘土質シルトである。酸化鉄分・マンガン斑の沈着が顕著である。層厚は0.05～0.45mを測る。上面の標高は西に行くほど低くなっている、東西端の高低差は約0.6mを測る。遺物は古墳時代後期～平安時代に至る遺物を極少含む。上面が奈良時代～平安時代前半を中心とする遺構を検出した第2面である。

第V層：14～18調査区で確認した。10YR4/1褐灰色～N6/0灰色の色調で、層相は砂質シルト～粘土である。2～3層に分層が可能である。層厚0.1～0.3mを測る。古墳時代後期～飛鳥時代前半の遺物を含む。

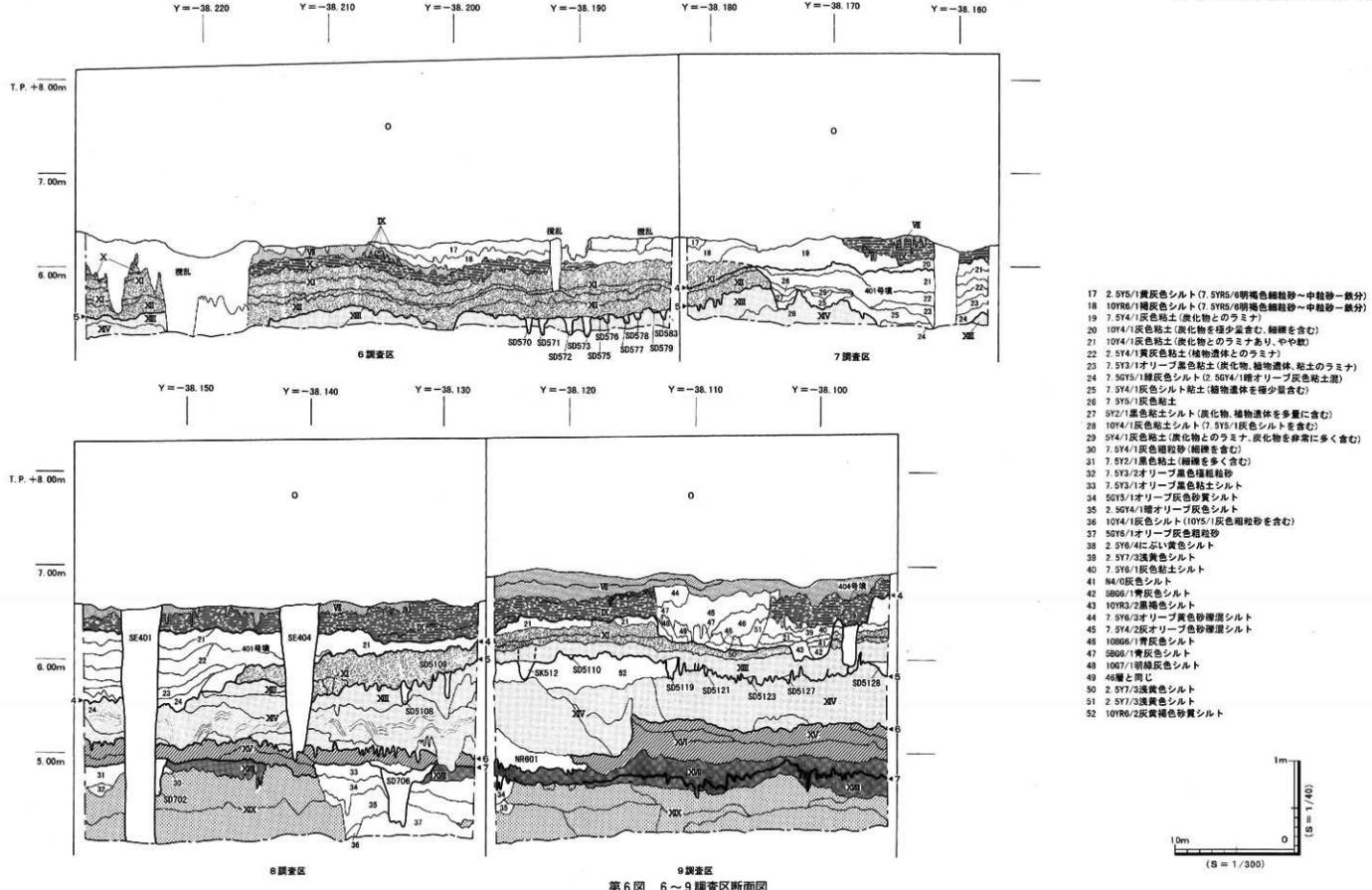
第VI層：17～26調査区で確認した。7.5YR5/6明褐色～10YR5/2灰黄褐色の色調で、層相はシルト～シルト質粘土である。層厚は0.05～0.35m。上面の標高は26調査区の南端でT.P. +7.8m、17調査区でT.P. +7.3mを測る。東部と西部で高低差があるため西部に位置する17・18・20・21調査区では上面で第3面（飛鳥時代～奈良時代前半）を検出したが、東部に位置する24・25調査区では、上面で第2面（古墳時代中期後半～近世）の遺構を検出している。古墳時代前期～飛鳥時代前半に比定される土器類が出土している。

第VII層：4～18調査区で確認したが、一部本層を欠く調査区がある。2.5Y5/1暗灰黄色～N6/0灰色の色調で、層相は4・6・7調査区では細粒砂～粗粒砂が優勢であるが8・9・12・14～16・18調査区では粘土質シルト～粘土が主体となる。層厚は0.05～0.35mを測る。

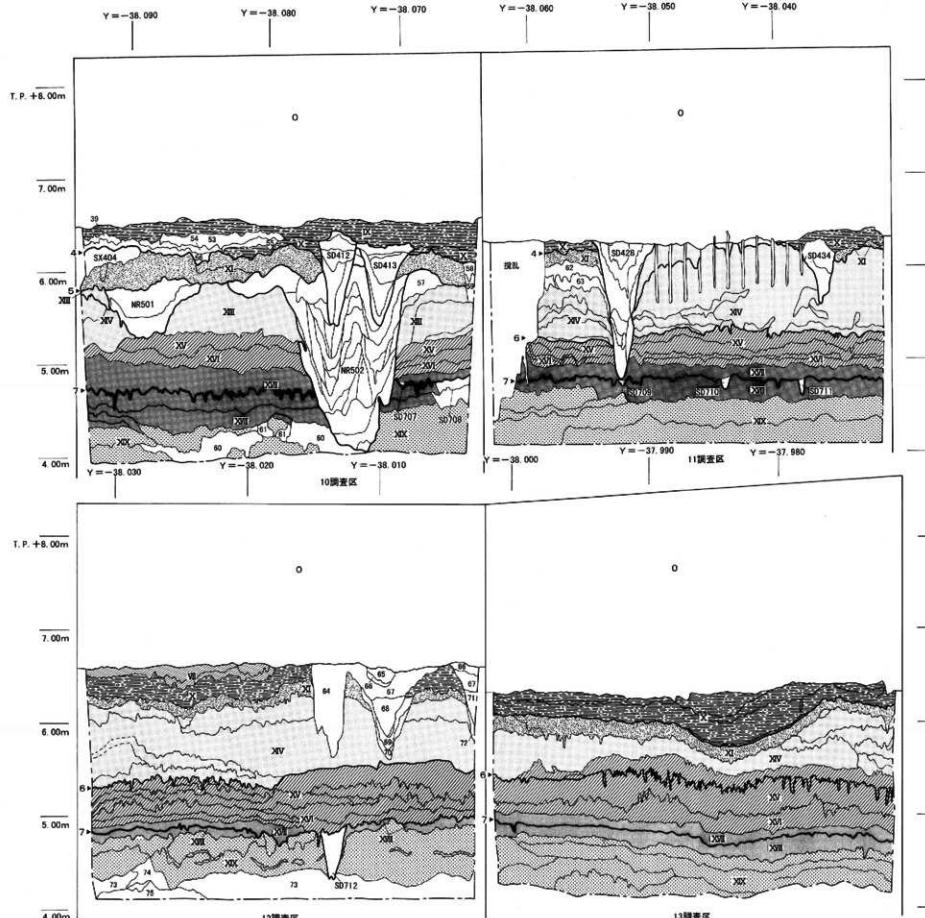
第VIII層：17～26調査区で確認した。河川堆積層である。2.5Y6/3にぶい黄色～5Y5/1灰色の色調で、層相は中粒砂～粗粒砂が優勢であるが、20～22調査区では上層に粘土質シルトが堆積している。層厚は25調査区付近が最大で0.7m以上を測る。遺物は古墳時代前期後半（布留式新相）～古墳時代後期前期の土器類が出土している。



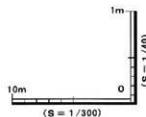
第5図 1~5調査区断面図



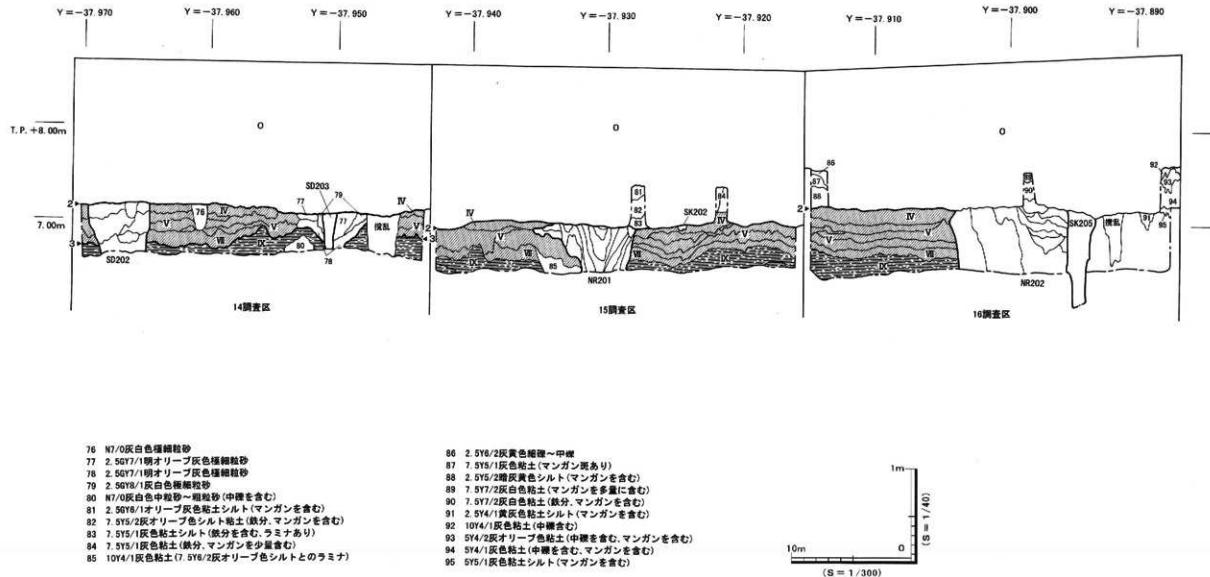
第6図 6~9調査区断面図



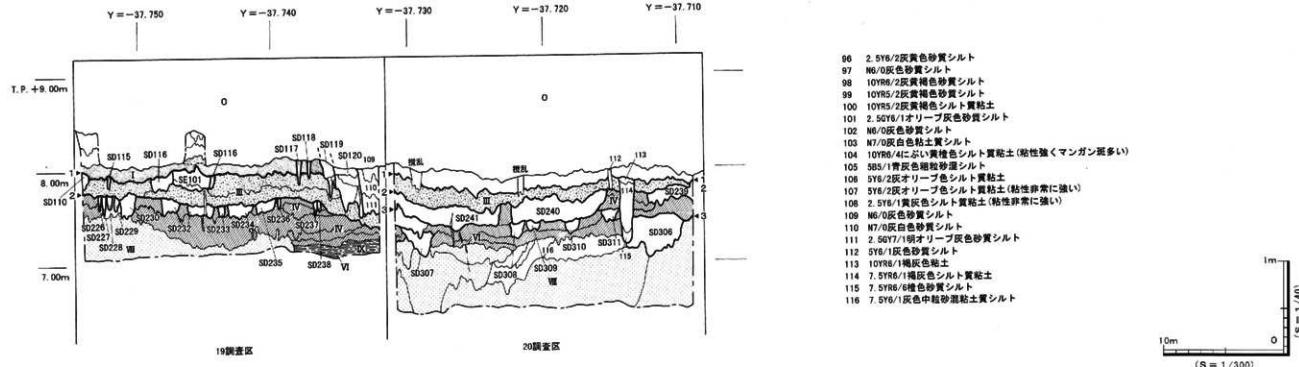
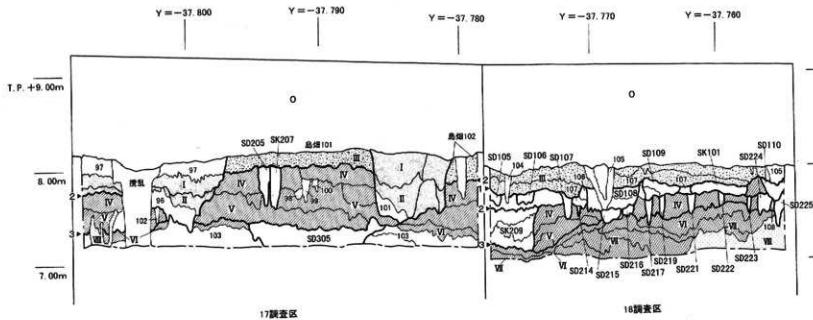
- 53 10YR6/1綠灰皮色(グリライ化)～10YR6/8明黃褐色細粒粘土
 54 7.5YR6/9橙色砂質シルト
 55 7.5YR3/1墨褐色砂質シルト
 56 GO層と同じ
 57 10YR6/1明黃褐色細粒粘土～シルト
 58 10YR6/1灰白色シルト
 59 NP83/1青灰色シルト
 60 N3/2暗灰色シルト質粘土
 61 5P87/1暗青灰色シルト
 62 2.5Y4/1黃灰色細粒砂～中粒砂混泥質シルト
 63 2.5Y4/1黃灰色細粒砂～中粒砂混泥質シルト
 64 5Y6/1黃灰色中粒砂(5Y5/1灰シルトブロック、鉄分を含む)
 65 2.5Y4/1一ノ井層細粒粘質シルト(腐泥性)
 66 10YR6/2にない青灰色細粒粘質シルト(腐泥性、鉄分を含む)
 67 2.5Y4/1灰白色シルト(斑点状に鉄分を含む)
 68 5Y5/1灰色細粒砂シルト(植物遺体を含む)
 69 2.5Y4/1墨褐色細粒砂シルト
 70 5Y5/1墨褐色細粒砂シルト
 71 10YR6/1灰白色シルト(植物遺体、鉄分を含む)
 72 5Y5/1墨褐色細粒砂シルト(植物遺体を含む)
 73 5Y6/1(灰色の)礫混細粒粘土(植物遺体を含む)
 74 5Y5/1シルト(腐泥性)
 75 10Y4/1灰色シルト(植物遺体を多量に含む)(腐泥性弱い)



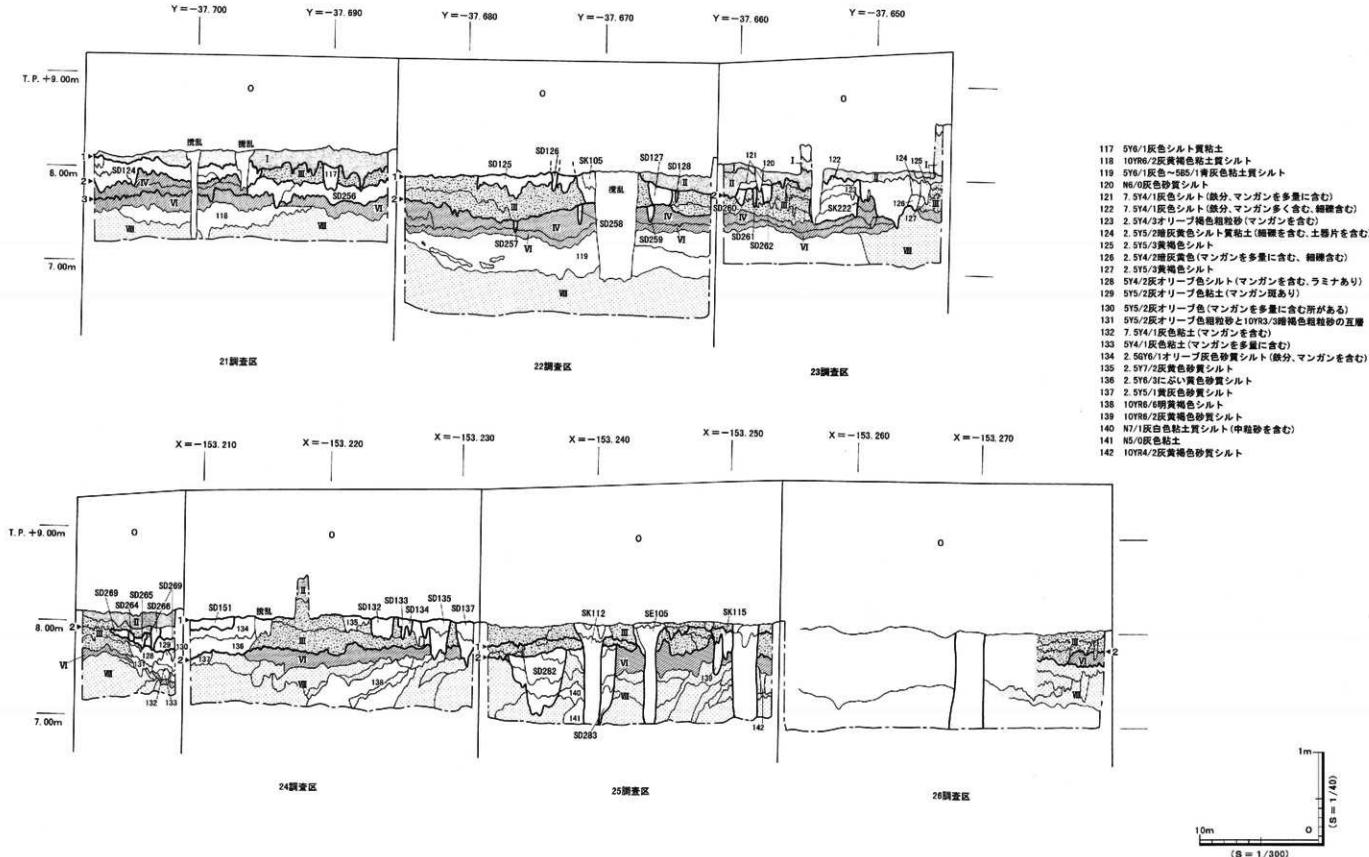
第7図 10～13調査区断面図



第8図 14~16調査区断面図



第9図 17~20調査区断面図



第10図 21~26調査区断面図

- 第Ⅸ層：4～10調査区で確認した。2.5Y5/1黄灰色～10GY6/1明緑灰色の色調で、層相はシルト～粘土質シルト。層厚は0.1～0.45mを測る。
- 第X層：3～6・10～13調査区で確認した。10YR5/1褐灰色～N3/0暗灰色の色調で、層相はシルト～粘土である。層厚は0.1～0.6mを測る。
- 第XI層：1～13調査区で確認した。色調は5Y4/2灰オリーブ～10Y5/1灰色である。層相はシルト～シルト質粘土で上部は土壤化している。遺物は古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される土器類を極少量含む。上面が第4面で弥生時代後期後半(畿内第V様式)～古墳時代前期前半(布留式古相)の遺構が検出されている。
- 第 XII層：1～7調査区で検出した。2.5Y4/1黄灰色シルト～10YR4/1褐灰色で、層相はシルト～極細粒砂。層厚は0.1～0.3mを測る。遺物は弥生時代後期後半(畿内第V様式)～古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される遺物が出土している。
- 第 XIII層：1～10調査区で確認した。色調は5GY6/1オリーブ灰色で、上部は土壤化しており暗色帯を形成している。層相はシルト～粘土質シルトを主体とする。層厚0.1～0.35m。遺物は弥生時代後期後半(畿内第V様式)に比定される遺物が出土している。上面が第5面で弥生時代後期後半(畿内第V様式)～古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される遺構を検出している。
- 第 XIV層：1～13調査区の広範囲で確認した。氾濫性堆積土である。色調は10Y5/1灰色～5Y7/1灰白色で、層相はシルト～極粗粒砂である。層厚は0.4～1.25mで9調査区西部付近が最も厚い。遺物は弥生時代後期前半(畿内第V様式)～後期後半に至る土器類が少量出土している。なお、10調査区では第X層を切るかたちでN R501、N R502が存在している。
- 第 XV層：8～13調査区で確認した。7.5GY4/1紺灰色～5Y4/1灰色で、層相はシルト質粘土～粘土である。粘性の高いもので、最上部は凹凸が著しい。上面が第6面検出面で、11～13調査区では、湿地状地形に展開する自然河川や足跡群が検出されている。時期的には弥生時代後期前半が考えられる。遺物は弥生時代前期(畿内第I様式～中段階)と弥生時代後期前半(畿内第V様式)に比定される土器類が極少量出土している。
- 第 XVI層：9～13調査区で確認した。2.5GY6/1オリーブ灰色～N3/0暗灰色粘土。層厚0.1～0.3mを測る。遺物は弥生時代中期前半(畿内第II様式)の土器類が極少量出土している。
- 第 XVII層：8～13調査区で確認した。5Y3/1オリーブ黒色～N2/0黒色を中心とする暗色帯を形成するもので、層相はシルト～粘土である。層厚は0.05～0.25mを測る。遺物は弥生時代前期(畿内第I様式)の土器片が極少量出土している。
- 第 XVIII層：8～13調査区で検出した。2.5GY5/1オリーブ灰色の色調で、層相はシルト質粘土である。層厚は0.1～0.25m。上面が弥生時代前期(畿内第I様式)以降の遺構を検出した第7面である。
- 第 XIX層：8～13調査区で確認した。下部はT.P.+4.00mに達している。色調は5Y6/2灰オリーブ～N8/0灰白色で、上面は土壤化しており黒色を呈している。層相としては上部では極細粒砂混シルトが優勢であるが、下部は洪水砂層の五層が中心となる。層厚は0.7mを測る。

第3節 検出遺構と出土遺物

1) 各調査区の概要

・第1面〔近世～近代〕(第11～20図、図版三～七・五六)

調査地東部の17～22調査区、24～26調査区で検出した。検出面は現地表下1.1～1.7m(T.P.+8.1～7.8m)付近に存在する第Ⅲ層上面である。検出した遺構は、江戸時代初頭～近代に比定される水田・島畑に関連した生産遺構が大半を占めるが、島畑に付随する水田部分では島畑構築時の削平が深くに達しているため、水田の下部層では古墳時代中期後半以降の遺構が検出されている。検出した遺構には、井戸10基(S E 101～S E 110)、土坑17基(S K 101～S K 117)、溝93条(S D 101～S D 193)、小穴22個(S P 101～S P 122)、島畑2基(島畑101・島畑102)、道路状遺構2条(道路状遺構101・道路状遺構102)、樋管1箇所(樋管101)がある。

井戸 (S E)

S E 101 (写真3)

19調査区中央部北のVII-8-7F地区で検出した農耕用の井戸である。S D 116を切っている。掘方の北側が側溝により、削平を受けているが検出部分で東西幅1.45m、南北幅1.6mの長方形を呈している。掘方の中央からやや南よりで円形の井戸側の抜き取り跡を確認した。検出面から1.05mの深さまで、井戸側が存在していたようである。埋土は粗粒砂混シルト質粘土～シルトを主体とする10層に分層が可能で、最下部は湧水層である粗砂層に達している。遺物は土師器の小破片と基石1点の他、拳大の石等が少量出土している。井戸の構築時期は江戸時代中期以降が推定される。



写真3 S E 101検出状況(北から)

S E 102 (写真4、第12・13図、図版五六)

21調査区中央部のVII-9-9A地区で検出した農耕用井戸である。北部がS D 124により削平を受けている。円形の掘方で径1.2m前後を測る。検出面から1.58m迄は井戸側が抜き取られており、それ以下で桶井戸側を検出した。桶井戸側は、径0.64m、高さ約1.0mを測るもので、17枚の板材を円形に組んでおり、同様の桶井戸側が下部にもう一段あるのが確認できた。この時点での掘削深度が検出レベルから2.7m前後に達しており、掘方周辺の土が崩壊してきたので、安全面を考慮して調査を打ち切った。なお、井戸側内から井戸側用瓦が出土していることから、桶井戸側の上部に瓦井戸側を重ねた構造の井戸で、河内一浩氏分類(河内1995)のⅢ類にあたる。埋土は粗粒砂混シルトを主体とする5層から成る。

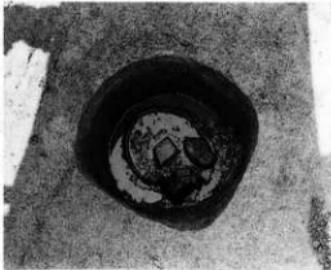
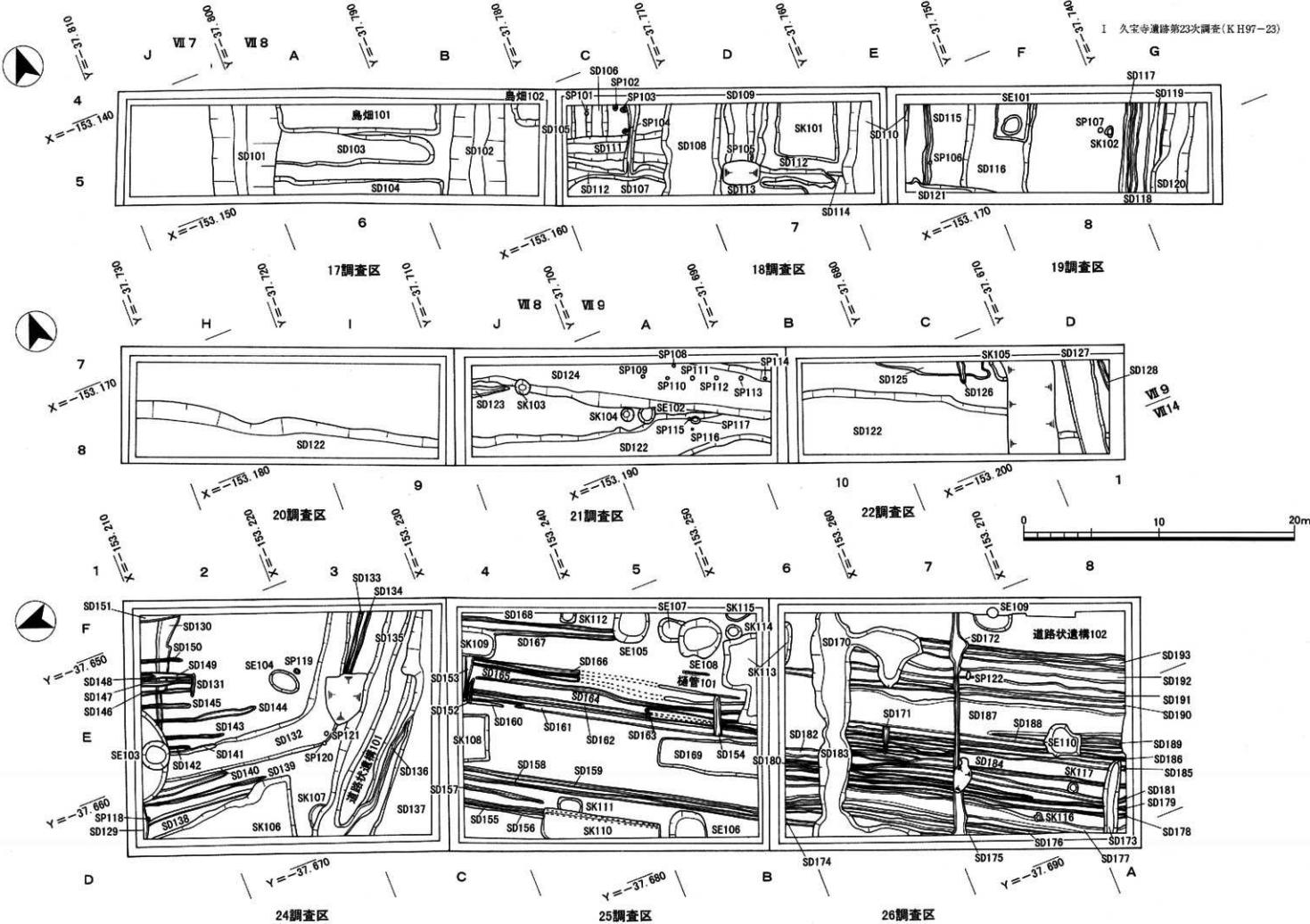


写真4 S E 102検出状況(西から)

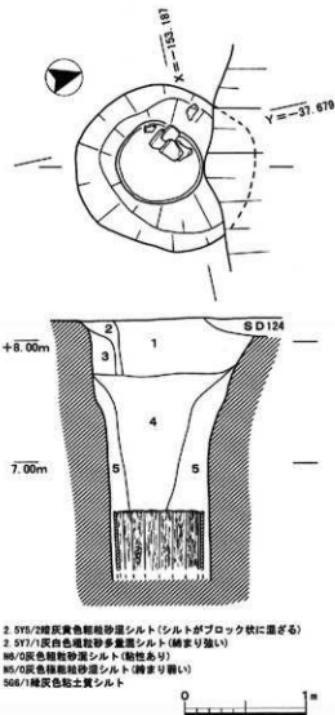


第11図第1面 (17調査区~22調査区、24調査区~26調査区)

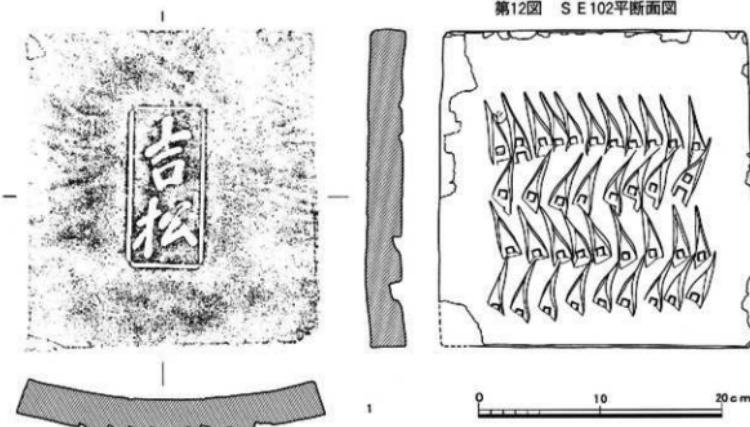
遺物は、S E 102の埋土内および桶井戸側内部から井戸側用瓦と丸瓦の破片出土している。井戸側用瓦1点(1)を図化した。1は一段目の桶井戸側内から出土した。反りの浅い井戸側用瓦で完形品である。法量は、縦幅26.0cm、横上幅23.2cm、横下幅25.5cm、厚さ3.0cmを測る。凹面の中央部に長方形枠に「吉松」銘のスタンプが施されている。凸面にはくさび状に連結して押圧された文様が4段にわたって施されている。井戸の構築時期は江戸時代中期以降が推定される。なお、井戸側用瓦に記された「吉松」銘については、施主ないしは瓦工人、井戸職人の屋号と考えられるが他に類例を聞かない。

S E 103

24調査区北部のⅦ-14-1E地区で検出した。S E 205の南端部を切る素掘りの井戸である。上面形状は円形で短径1.95m、長径2.0m、深さ1.05mを測る。埋土は5層に分層が可能で、井戸中央部の2層が井戸側内部の堆積土層と考えられる。遺物は近世末期以降の肥前系磁器碗のほか、井戸側用の瓦が出土しており、本来は上部に瓦井戸側を有した井戸であったと推定される。井戸の構築時期は江戸時代以降が推定される。



第12図 S E 102平断面図



第13図 S E 102出土遺物実測図



写真5 S E 106検出状況(西から)

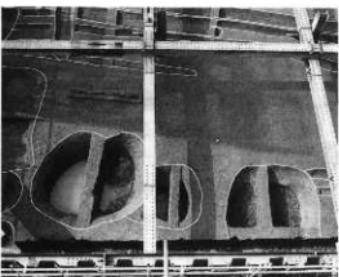


写真6 S E 105、S E 107、S E 108検出状況(東から)

S E 104

24調査区中央部のⅦ-14-2 E地区で検出した。南北方向に長い梢円形を呈する素掘り井戸である。規模は短径1.6m、長径2.15m、深さ0.92mを測る。埋土は10BG5/1青灰色砂質シルトである。遺物は土師器、須恵器の小破片が極少量出土したが時期を明確にし得たものはない。

S E 105（写真5）

25調査区東部のⅦ-14-5 D地区で検出した。東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.65m、南北幅2.1m、深さ0.68mを測る。埋土は砂質シルト～粗粒砂を主体とする3層から成る。井戸側等は検出されていない。遺物は江戸時代に比定される国産陶磁器の小破片が少量出土している。構築時期は江戸時代中期以降が推定される。

S E 106（写真5）

25調査区南西部のⅦ-14-5 C地区で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部分からみて円形状の掘方を有するものと推定される。検出部分で東西幅2.0m、南北幅2.75m、深さ0.8m以上を測る。埋土は2.5GY7/1明オリーブ灰色中粒砂～粗粒砂と5B6/1青灰色砂質シルトの互層である。井戸側等は検出されていない。遺物は井戸側用瓦、肥前系磁器碗の小破片が出土している。構築時期は江戸時代中期以降が推定される。

S E 107（写真6）

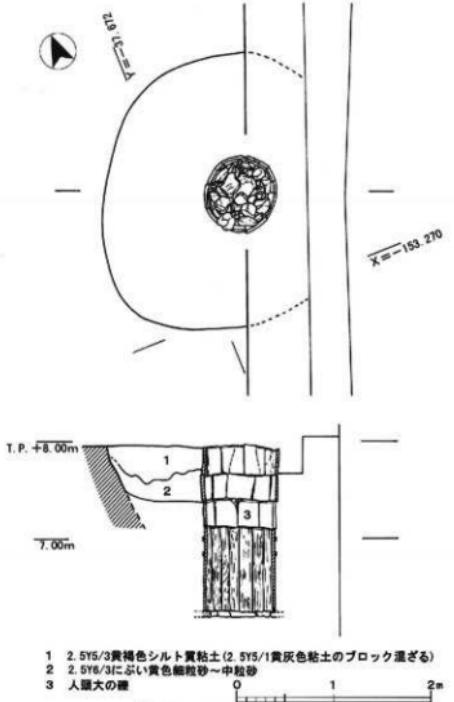
25調査区南東部のⅦ-14-5 D地区で検出した。円形の掘方を有する素掘り井戸で、南部はS E 108に切られている。検出部分で東西幅1.85m、南北幅1.68m、深さ0.68mを測る。埋土は極細粒砂から粘土質シルトを主体とする7層から成る。遺物は肥前系磁器碗、瓦片等の小破片が少量出土している。構築時期は江戸時代中期以降が推定される。

S E 108（写真6）

25調査区南東部のⅦ-14-5 D地区で検出した。北端でS E 107の南部を切るもので、掘方は不整円形を呈する。短径2.95m、長径3.18m、深さ1.18mを測る。最下層の東部で井戸側の一部と推定される板材が検出されている。埋土は逆台形を呈する断面形状に沿って、粘土質シルトを主体とする6層が堆積している。遺物は肥前系、京焼等の磁器碗の他、井戸側用瓦等が少量出土している。構築時期は江戸時代中期以降が推定される。

S E 109 (写真7・8、第14図)

26調査区南東部のⅧ-14-7C地区で検出した。下部の木組み井戸側と上部の桶井戸側と瓦井戸側から成る農耕用井戸で、河内一浩氏分類のII類にあたる。掘方は隅丸方形を呈するが東半分が調査区外に至るため、全容は不明である。規模は、検出部分で東西幅1.5m、南北幅3.0mを測る。掘方のはば中央あたりで、直径1.5mを測る瓦井戸側を検出した。井戸側用の瓦(縦27cm、横26.5cm、厚さ2.9cm)を9枚を使用して円形に組んだものを3段に積んでいる。瓦井戸側の下には、桶井戸側が確認できた。桶井戸側に使用された桶は長さ約1.0m、幅0.15m、厚さ0.03mを測る板材を19枚で円形に組むもので、径0.7mを測る。桶の外側には、竹製の簾が2段に巻かれていた。桶井戸側の下部で桶井戸側を受けるために円形に作られたカガミと呼ばれる木組井戸側の上部を確認した。この部分で、人力掘削開始面から2m近くに達しており、安全面を考慮してこれ以下の掘削を打ち切った。井戸側内には、井戸を廃棄する時に投げ込まれたとみられる拳大へ人頭大の石で検出面から掘削最終面まで充填されていた。遺物は、石材の他、土師器、国産陶磁器、鉄釘などが出土している。構築時期は江戸時代中期以降が推定される。



1 2.5m/3黄褐色シルト質粘土 (2.5m)/1黄灰色粘土のブロック混ざる)
2 2.5m/3にびい黄色細粒砂～中粒砂
3 人頭大の礫
0 1 2m

第14図 S E 109平面図



写真7 S E 109検出状況(南から)



写真8 S E 109断ち割り状況(南から)

S E 110

26調査区南部Ⅶ-14-7・8 B地区で検出した。S D186・S D188・S D189を切っている。S E 110の掘方は、平面形状が不定形をしており、長径3.0m、短径2.5m、深さ1.45mを測る。断面形状は、「U」字形をしている。埋土は2.5Y6/3黄褐色の粗粒砂を多く含んだ粘土質シルトである。遺物は土師器の小破片が少量出土している。

土坑（S K）

S K 101

18調査区東部のⅧ-8-6・7 D・E地区で検出した。北部が調査区外に至り全容は不明であるが、検出部分で隅丸方形を呈する。検出部分で東西幅4.5m、南北幅4.2m、深さ0.2mを測る。埋土は、2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土の単一層である。遺物は奈良時代の土師器、須恵器片の他、鎌倉時代の瓦器梶の小破片が出土している。

S K 102

19調査区中央部のⅧ-8-7 F・G地区で検出した。楕円形の掘方を呈し短径0.6m、長径0.85m、深さ0.2mを測る。埋土は、10Y7/1灰白色シルト質粘土の単一層である。遺物は土師器の小破片が出土している。

S K 103（写真9）

21調査区東部のⅧ-8-9 J地区で検出した。S D124を切っている。円形を呈するもので、径1.2mを測る。断面が「U」の字状を呈しており、深さ1.0mを測る。埋土は7.5Y6/1灰色～10G6/1緑灰色粗粒砂混シルトである。遺物は土師器の小破片が極少量出土している。

S K 104

21調査区中央部のⅧ-9-9 A地区で検出した。S D124とS D122に挟まれた位置にある。円形を呈するもので径1.0m、深さ0.7mを測る。埋土は、S K103と同じである。遺物は出土していない。

S K 105

22調査区北部のⅧ-9-10 C地区で検出した。東部が搅乱を受け、北部が調査区外に至るため全体の規模は不明である。検出部分で東西幅0.9m、南北幅1.45m、深さ0.16mを測る。構築面は第Ⅲ層よりも上面である。埋土はグライ化した7.5Y6/2灰オリーブ色砂質シルトの単一層である。遺物は奈良時代～近世にかけての土師器、国産陶磁器、屋瓦等の小破片が出土している。

S K 106

24調査区西北部のⅧ-14-1・2 D地区で検出した。西部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅4.4m、南北幅11.0m、深さ0.35mを測る。埋土は砂質シルトを主体とする4層に分層が可能で、最上層はグライ化による緑灰色系の色調を呈している。遺物は江戸時代後半以降の国産陶磁器(肥前系・唐津焼・京焼)碗のほか、古墳時代中期以降の土師器、須恵器等

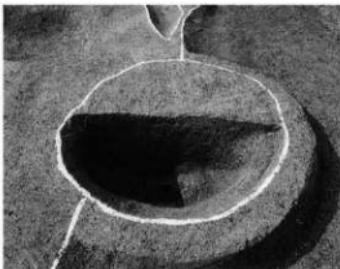


写真9 S K 103検出状況(東から)

の遺物が混在して出土している。

S K 107

24調査区西部のⅧ-14-2 D地区で検出した。南部はS D 135に切られているため、全容は不明であるが残存部分からみて円形状の掘方を呈したものと推定される。検出部分で東西幅2.0m、南北幅0.6m、深さ0.18mを測る。埋土は10GY6/1緑灰色砂質シルトの単一層である。遺物は土師器、須恵器、陶器類の小破片が極少量出土している。

S K 108 (写真10)

25調査区北部のⅧ-14-3・4 D地区で検出した。北側が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分での掘方形状は方形で、東西幅3.4m、南北幅1.6m、深さ0.52mを測る。埋土は8層に分層が可能で、上部においては短期間の埋め戻しが想定される瓦層で構成される堆積が見られた。遺物は土師器、須恵器の小破片が少量出土している。上部の形状や埋土の状況からみて、土取りを目的とした掘削痕の可能性がある。

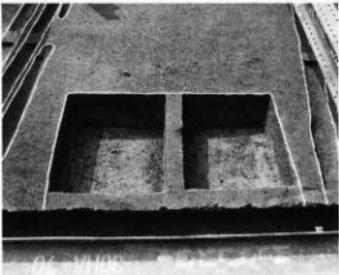


写真10 S K 108検出状況(北から)

S K 109

25調査区北東部のⅧ-14-4 D・E地区で検出した。北部が調査区外に至る他、西部でS D 153、南東部でS D 167を切っている。検出部分で東西幅2.1m、南北幅2.4m、深さ0.1m前後を測る。埋土は10GY6/1緑灰色砂質シルトの単一層である。遺物は須恵器および平瓦片が少量出土している。

S K 110

25調査区西部のⅧ-14-4 C地区で検出した。東端はS D 155の上部を切っている。西端は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で南北方向に長い溝状を呈する。検出部分で東西幅1.5m、南北幅8.9m、深さ0.05~0.15mを測る。埋土は10GY6/1緑灰色砂質シルト。遺物は奈良時代~近代に至る土師器、須恵器、瓦器、国産陶磁器片が少量出土している。

S K 111

25調査区西部のⅧ-14-4 C地区で検出した。西部がS K 110に切られている。検出部分で隅丸方形を呈するもので、規模は東西幅1.1m、南北幅1.95m、深さ0.1mを測る。埋土は10GY6/1緑灰色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

S K 112

25調査区東部のⅧ-14-4 D・E地区で検出した。東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.6m、南北幅1.1m、深さ0.4mを測る。埋土は砂質シルトを主体とする3層から成る。遺物は出土していない。

S K 113

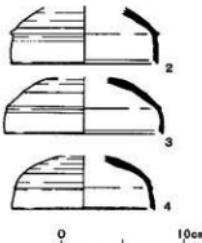
25調査区南東部から26調査区北東部のⅧ-14-5・6 C・D地区で検出した。不定形を呈する規模の大きい遺構であるが、調査区の境にあたるため不明な点が多い。検出部分で東西幅6.7m、南北幅5.0m、深さ0.65mを測る。埋土は13層に分層される。遺物は土師器土釜や須恵器の小片の他、肥前系磁器碗の小破片が少量出土している。

S K 114

25調査区南東部のⅦ-14-5・6 D地区で検出した。円形の掘方を有するもので、東西径1.15m、南北径1.1m、深さ0.2mを測る。埋土は上層のN7/0灰白色砂質シルトと下層の10YR5/2灰黄色極細粒砂の2層から成る。遺物は出土していない。

S K 115 (第15図)

25調査区南東隅のⅦ-14-6 D地区で検出した。S K 114の東に隣接している。調査区の東部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.4m、南北幅1.9m、深さ0.26mを測る。埋土は上層が灰を含む10YR5/1褐色砂質シルト、下層がN7/0灰白色砂質シルトの2層から成る。遺物は上層から、5世紀後半を中心とする土師器、須恵器の小破片が少量出土している。須恵器杯蓋3点(2~4)を図化した。3点共に残存率は1/4程度である。2は突出度の大きい稜から口縁部が垂直方向に伸びるもので、口縁端部の内側に明瞭な段を形成している。3・4は突出度が小さい稜から内湾気味ないしは斜方向に口縁部が伸びるもので、共に口縁端部内面に小さな段を形成している。色調は2が灰白色、3・4が灰青色である。焼成は3点共に堅緻である。2が田辺昭三氏編年(田辺1996)のT K23型式(5世紀後半)、3・4がT K47型式(5世紀末)に比定される。



第15図 S K 115出土遺物実測図

S K 116

26調査区南西部のⅦ-14-7 B地区で検出した。不整方形を呈するもので、東西幅0.60m、南北幅0.50m、深さ0.20mを測る。埋土は10Y6/1灰色シルト質粘土の單一層である。遺物は古墳時代後期~近世に比定される土師器、須恵器、瓦器、国産陶磁器片が少量出土している。

S K 117

26調査区南西部のⅦ-14-7 B地区で検出した。方形を呈するもので、東西幅0.80m、南北幅0.70m、深さ0.08mを測る。埋土は10Y6/1灰色シルト質粘土の單一層である。遺物は出土していない。S K 116・S K 117共に深さ等に問題を残すものの、S E 110に近接した位置にあたるため、はね釣瓶の主柱が設置されていた遺構の可能性がある。

溝 (S D)

S D 101

17調査区西部のⅧ-7-5 J、Ⅷ-8-5 A地区で検出した。島畠101の西側を南北方向に区画し、S D 103、S D 104を切っている。検出部分で検出長6.7m、幅5.3m、深さ0.7mを測る。断面の形状は、島畠101に接する東側が斜上方にほぼ直線的に伸びるのに対して、西部は緩やかな傾斜面を有する。埋土は最上部の客土を除けば、近代の耕作土が水平堆積しており、以下はこれらに影響されてグライ化が顕著な砂質シルトを主体とする6層から成る。遺物は古墳時代から近世に比定される土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、崖丸等の小破片が出土している。

S D 102

17調査区東部のⅧ-8-5・6 B地区で検出した。島畠101と島畠102を区画して南北方向に伸

びる。検出部分で検出長6.7m、幅5.2m、深さ0.55mを測る。断面形状は、底部は水平な面を呈するが、西肩部分にはテラス状を呈する部分がある。埋土は最上部が客土である点はSD101と共通しているが、SD101で見られた耕作土は無く、以下はグライ化が顯著な砂質シルトを主体とする7層が堆積している。遺物は古墳時代～近世に比定される土師器、須恵器、陶器等の小破片が少量出土している。

SD103

17調査区中央部のⅧ-8-5・6 A・B地区で検出した。島畠101の南を区画して、東西方向に伸びるもので、西端がSD101に切られている。検出長12.2m、幅2.5～2.8m、深さ0.15m前後を測る。埋土は砂質シルトを主体とする7層から成る。遺物は古墳時代～近世に比定される土師器、須恵器、陶磁器、屋瓦等の小破片が少量出土している。

SD104

17調査区南部のⅧ-8-5 A、6 A・B地区で検出した。SD103の南に1.0m前後の間隔を有して並行して伸びるもので、西肩がSD101に切られている他、南肩は調査区外に至るため詳細は不明である。検出部分で検出長12.5m、幅0.9～1.1m、深さ0.18mを測る。埋土は10BG4/1暗青灰色砂質シルトの單一層である。遺物は古墳時代～近世に比定される土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、屋瓦等の小破片が出土している。

SD105

18調査区北西部のⅧ-8-6 C地区で検出した。南～北に伸びており、南端はSD111に切られている。検出部分で幅0.8m、検出長2.5m、深さ0.2mを測る。埋土は、SD111と同じである。遺物は、奈良時代とみられる土師器の小破片が少量出土している。

SD106

18調査区北西部のⅧ-8-6 C地区で検出した。SD105の東に並行して伸びるもので、検出部分で検出長2.4m、幅1.5m、深さ0.25mを測る。断面の形状は、「U」の字状をしている。埋土は、SD111と同じである。遺物は奈良時代とみられる土師器、須恵器の小破片が少量出土している。

SD107

18調査区西部のⅧ-8-6 C地区で検出した。南～北に伸びるもので、検出長3.2m、幅3.4m、深さ0.2mを測る。埋土はSD111と同じである。遺物は奈良時代～平安時代とみられる土師器、須恵器の小破片が出土している。

SD108

18調査区中央部のⅧ-8-6・7 C・D地区で検出した。南～北に伸びている。幅の広い溝でSD111、SD112を切っている。検出長6.8m、幅4.5m、深さ0.25mを測る。埋土は5Y6/2灰オリーブ色シルト質粘土である。遺物は奈良時代～平安時代の土師器、須恵器の小破片が出土している。

SD109

18調査区中央部のⅧ-8-6・7 D地区で検出した。SD108と同じ方向に伸びている。検出部分で幅2.6～3.4m、深さ0.2mを測る。埋土はSD108と同じである。遺物は奈良時代の土師器、須恵器が出土している。

SD110

18調査区東端から19調査区の北西隅のⅧ-8-6・7 E地区で検出した。南～北に伸びており、

検出部分で幅4.5m、深さ0.2mを測る。埋土は2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土の單一層である。遺物は土師器、須恵器の小破片が少量出土している。

S D111 (第16図、図版五六)

18調査区西部のⅧ-8-6 C地区で検出した。東-西に伸びており、S D107・S D108に切られている。検出部分で検出長7.0m、幅約0.2m、深さ0.2mを測る。埋土は10YR5/1褐灰色シルト質粘土である。遺物は奈良時代～平安時代にかけての土師器、須恵器の小破片が少量出土している。軒丸瓦1点(5)を図化した。5は軒丸瓦の小破片である。瓦当面の破損が著しく遺存状況は良くない。18調査区から東へ約600m地点付近に存在した渋川廃寺の創建瓦と推定される。豊浦寺式軒丸瓦に分類されるもので、完形ならば素介文弁蓮華文を主文とし、中房に連子を1+5に配する。弁端は尖形を呈しており、弁端から隆起して短く伸びる細線で外区と繋がっている。弁間に珠文が配されている。圓線は幅広で隆起が高く、そこから外区端迄7mm前後は平坦な平縁を形成している。焼成はやや不良で、色調は灰白色～橙色を呈する。胎土には1mm大の長石・石英の他、0.1mm程度の角閃石を含む。飛鳥時代前半(7世紀前半)が推定される。



第16図 S D111出土遺物実測図

S D112

18調査区東部のⅧ-8-6・7 C D地区で検出した。S D108に切られ、S D107と合流している。検出長20.2m、幅0.5～2.0mを測る。埋土は2層から成り、上層が10YR5/1褐灰色シルト質粘土、下層が2.5Y6/1灰色粘土である。遺物は出土していない。

S D113

18調査区南部のⅧ-8-7 D地区で検出した。東-西に伸びるもので、南端は調査区外のため不明である。西端はS D108によって切られている。検出長6.5m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。埋土は2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土である。遺物は須恵器の小破片が少量出土している。

S D114

18調査区南東部のⅧ-8-7 D地区で検出した。東-西に伸びる細長い溝で東端はS D110に切られている。検出長1.3m、幅0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は、S D113と同じである。遺物は出土していない。

S D115

19調査区西部のⅧ-8-7 E地区で検出した。S D110と同じ方向に伸びている。南端は、S D121によって切られている。検出部分で検出長6.0m、幅0.4～0.6m、深さ0.7mを測る。埋土は5Y6/2灰オリーブ色シルト質粘土である。遺物は土師器、須恵器、国産陶磁器の小破片が出土している。

S D116

19調査区西～中央部のⅧ-8-7 E・F地区で検出した。南-北に伸びている幅広の溝で、南端はS D121に切られている。検出部分で検出長6.6m、幅5.1m前後、深さ0.2mを測る。埋土は、5Y7/4浅黄色シルト質粘土である。遺物は土師器、須恵器の小破片が多く出土している。

S D117～S D120

19調査区東部で検出した。いずれも南北方向に伸びる。各溝の法量は、下記の一覧表にまとめた。遺物は古墳時代後期～近世の土師器、須恵器、瓦器、国産陶磁器、屋瓦片が出土している。

第3表 SD117~SD120法量表(単位m)

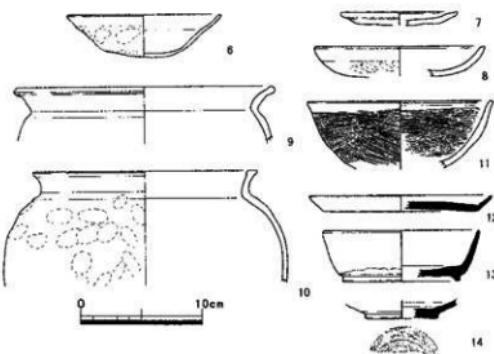
遺構名	地 区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
SD117	VII-8-7G, 8GF	5.60	0.50	0.10	10Y7/1灰白色シルト質粘土	土師器・須恵器瓦器
SD118	タ	5.60	0.60	0.03	タ	土師器・須恵器・屋瓦
SD119	VII-8-7G	5.60	1.20	0.50	タ	土師器・須恵器・国産陶器・屋瓦
SD120	タ	5.60	2.70	0.50	5G6/1緑灰色粗粒砂混粘土質シルト	土師器・須恵器・陶器・屋瓦

SD121

19調査区南西部のVII-8-7E地区で検出した。東-西に伸びるもので、SD115・SD116を切る他、南肩が調査区外に至るため不明である。検出部分で検出長7.0m、幅0.4~1.0m、深さ0.3mを測る。埋土は5G6/1緑灰色粗粒砂混粘土質シルトの單一層である。遺物は土師器の小破片が極少量出土している。

SD122(第17図、図版五六)

20~22調査区の南部を東-西に伸びる溝で、21調査区でSD124、22調査区でSD127に切られている。21調査区で南肩が検出された以外は、調査区外に至るため詳細は不明である。検出部分で検出長74.2m、幅3.0~5.0m、深さ0.4mを測る。断面形状は、浅い皿形をしている。埋土はグライ化が顕著な2.5Y6/1灰黄色シルト質粘土を主体にしている。遺物は奈良時代~平安時代後半に比定される土師器・須恵器・瓦器・屋瓦等の小破片が少量出土している。9点(6~14)を図化した。内訳は土師器碗1点(6)・小皿1点(7)・中皿1点(8)・壺2点(9・10)・須恵器皿1点(12)・杯身1点(13)・碗1点(14)、瓦器碗1点(11)である。6は土師器碗である。残存率は1/2程度である。口径12.5cm、器高3.4cmを測る。体部外面は指頭圧痕が顕著である。10世紀後半の所産か。7は「て」の字状口縁の土師器小皿。8は土師器中皿の小破片。復元口径14.1cmを測る。7・8共に水簸された精良な胎土が使用されている。11世紀後半~12世紀前半の所産。9・10は土師器壺である。口縁端部が丸く終る9と水平な面を呈する10がある。共に10世紀末の所産。11は大和型の瓦器碗で高台部を欠く。復元口径15.5cmを測る。体部内外面のヘラミガキは緻密で、外面は4分割に行われている。川越俊一氏編年(川越1982)の第1段階B型式ないしはC型式に比定される。時期は11世紀後半。12は須恵器皿で復元口径15.0cmを測る。13は須恵器杯身の小破片で復元口径12.7cmを測る。12-13共に8世紀後半の所産である。14は須恵器碗で裏面には、線刻による文字が記されているが、字の部分の下半分が欠損しているため全文は明確でない。出土遺物には、時期差のあるものが混在しているが7・8・11の遺物から勘案して、遺構の帰属時期は11世紀後半~12世紀前半が推定される。



第17図 SD122出土遺物実測図

S D123

21調査区西北部のⅧ-8-9J地区で検出した。東-西に伸びている。検出部分で検出長2.8m、幅0.85m、深さ0.3mを測る。埋土は5Y6/2灰オリーブ色粘質シルトと7.5Y6/2灰オリーブ色シルト質粘土である。断面形状は皿形をしている。遺物は出土していない。

S D124 (第18図、図版五六)

21調査区北部のⅧ-8-8・9J、Ⅷ-9-9A・B地区で検出した。東-西に伸びるもので、東端でS D122を切っている。検出部分で検出長22.6m、最大幅3.7m、深さ0.23mを測る。埋土は、2.5GY6/1オリーブ灰色粗粒砂混シルトと10YR6/2灰黄褐色粗粒砂混シルトの2層から成る。断面形状は、浅い皿形をしている。古墳時代後半～近世に至る雑多な遺物が出土している。十能1点(15)を圓化した。15は小片のため全容は不明であるが十能と推定される。断面逆台形を呈する把手の部分が完存しており、長さ7.7cm、厚さ2.5cmを測る。色調は赤褐色。胎土は精良である。なお、煤などの火を受けた痕跡は認められない。時期は江戸時代中期が推定される。

S D125

22調査区北部のⅧ-9-9-10C地区で検出した。一部、S D126によって切られている。調査区外に伸びるため、全体の規模は不明である。検出部分で最大幅1.35m、深さ0.18mを測る。埋土は、N6/0灰色シルト質粘土である。遺物は平安時代中頃以降の「て」の字状口縁の土師器皿、須恵器の小破片が少量出土している。

S D126

22調査区北部のⅧ-9-10C地区で検出した。南-北に伸びるもので、S D125を切っている。検出部分で検出長1.70m、幅0.6m、深さ0.19mを測る。埋土はN6/0灰色シルト質粘土である。遺物は時期不明の土師器の小破片が出土している。

S D127

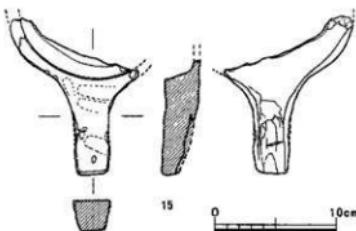
22調査区東部のⅧ-9-10D地区で検出した。南-北に伸びるもので、南部でS D122を切っている。北側溝近くで、杭が2本打たれているがS D127に伴うものかは不明である。検出部分で幅1.8~2.3m、深さ0.2mを測る。埋土は7.5Y7/1灰白色粘土の單一層である。遺物は古墳時代後期～近世にかけての土師器(甕)、須恵器、瓦器、備前焼、国産陶磁器、屋瓦が大量に出土している。

S D128

22調査区北東隅のⅧ-9-10D地区で検出した。S D127と方向を同じくする。検出部分で検出長2.4m、幅0.65m、深さ0.12mを測る。埋土は2.5Y6/1灰黄色シルト質粘土である。遺物は出土していない。

S D129

24調査区北西隅のⅧ-14-1D地区で検出した。東-西に伸びるものと推定されるが、北部が



第18図 S D124出土遺物実測図

調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で検出長2.7m、幅0.5m、深さ0.12mを測る。埋土は5GY6/1オリーブ灰色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

S D 130

24調査区北部のⅧ-14-1・2 E・F地区で検出した。東-西に伸びるもので、S D 144～S D 151に切られている。検出長8.8m、幅0.35～1.4m、深さ0.07mを測る。埋土はN6/0灰色砂質シルトの単一層である。遺物は古墳時代後期～奈良時代に比定される土師器片が極少量出土している。

S D 131

24調査区北部のⅧ-14-2 E地区で検出した。東-西に伸びるもので、北部はS D 146～S D 149を切っている。全長1.78m、幅0.25m、深さ0.06mを測る。埋土はN6/0灰色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

S D 132

24調査区Ⅷ-14-1～3 D・E地区の北部から中央部に向かって南-北に伸びた後、屈曲して流路を東西方向に持つものである。北部でS E 103・S D 141、中央部でS P 120・S P 121に切られている。検出長21.6m、幅1.7～2.8m、深さ0.2mを測る。埋土は上層の2.5GY8/1灰白色砂質シルトと下層の2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルトの2層から成る。遺物は古墳時代中期～奈良時代に比定される土師器壺、須恵器壺等の小片が少量出土しているが時期を明確にし得るものは無い。

S D 133

24調査区南東部のⅧ-14-3 E地区で検出した。S D 132東部の南肩に並行して伸びる小溝である。検出長4.7m、幅0.2～0.3m、深さ0.1mを測る。埋土はN6/0灰色砂質シルトの単一層である。遺物は古墳時代中期～奈良時代に比定される土師器の小片が極少量出土している。

S D 134

24調査区南東部のⅧ-14-3 E地区で検出した。S D 133の南側に並行して伸びる。検出長4.85m、幅0.18～0.25m、深さ0.05mを測る。埋土はN6/1灰色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

S D 135

24調査区南西部のⅧ-14-2 D地区から南東部のⅧ-14-3 E地区にかけて直線的に伸びる道路状遺構101の北側に沿っている。検出長17.5m、幅1.0～1.7m、深さ0.4mを測る。埋土は砂質シルトを主体とする3層から成る。遺物は江戸時代後期の肥前系碗、平瓦の小片のほか、古墳時代中期～後期前半に比定される土師器、須恵器類の小片が出土している。

S D 136

24調査区南西部のⅧ-14-2・3 D地区で検出した道路状遺構101の南側に並行して伸びるもので、S D 137の途中から分流してS D 135と合流している。検出長9.7m、幅0.4～0.5m、深さ0.2mを測る。埋土は遺物を含む上層の10BG5/1青灰色砂質シルトと下層の2.5GY6/1オリーブ灰色砂質シルトの2層から成る。遺物は古墳時代中期～奈良時代に比定される土師器、須恵器の他、江戸時代後期以降に比定される国産陶磁器(肥前系、備前焼、京焼)、屋瓦類がコンテナ1箱程度出土している。なお、合流地点の東約2.5m付近で本溝を縦断する位置に杭列が検出されており、この部分に水量を管理するための小規模な堰が設けられていたようである。本遺構は、S D 137からS D 135への取水を目的として設けられた溝と推定される。

S D 137

24調査区南端のⅧ-14-3 C・D・E地区で検出した。S D 136および道路状遺構101の南に並行して伸びるものである。検出長17.2m、幅1.2~4.6m、深さ0.35mを測る。埋土は砂質シルトを主体とする5層から成るが、北端部分は人為的に埋められた箇所がある。遺物は近世後半以降の国産陶磁器(肥前系、唐津焼、備前焼、信楽焼、京焼、美濃焼)、屋瓦類、砥石の他、古墳時代中期後半~後期前半の土師器、須恵器類の小破片がコンテナ箱に約半分程度出土している。

S D 138~S D 151

S D 138~S D 151の溝14条は24調査区の北部で検出された小溝で、概ね、北東~南西に直線的に伸びている。規模は幅0.15~0.58m、深さ0.03~0.14mを測る。断面形状が「U」字形を呈し、比較的浅いものが大半を占めていることから牛馬耕に伴う犁溝の可能性が高い。遺構の構築時期は、近世末期以降のものであろう。溝の法量、規模等の詳細は第4表で示した。

第4表 S D 138~S D 151法量表(単位m)

遺構名	地 区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 138	Ⅷ-14-1·2D	7.80	0.48	0.07	N6/0灰色砂質シルト	
S D 139	〃	9.25	0.40	0.05	〃	
S D 140	〃	6.50	0.55	0.09	〃	土師器・須恵器
S D 141	Ⅷ-14-1·2E	3.50	0.30	0.14	〃	土師器・須恵器
S D 142	Ⅷ-14-1E	1.65	0.20	0.05	〃	
S D 143	Ⅷ-14-1·2E	6.00	0.38	0.08	〃	土師器
S D 144	〃	8.30	0.40	0.04	〃	土師器・須恵器・石材
S D 145	〃	3.65	0.40	0.06	〃	
S D 146	〃	3.70	0.35	0.08	〃	土師器・須恵器
S D 147	〃	3.78	0.38	0.07	〃	土師器・須恵器・製塩上器
S D 148	Ⅷ-14-1E	0.90	0.15	0.03	〃	
S D 149	Ⅷ-14-1·2E	3.75	0.40	0.05	〃	
S D 150	〃	3.05	0.20	0.05	〃	
S D 151	Ⅷ-14-2F	3.00	0.58	0.08	25GY6/1オリーブ灰色砂質シルト	

S D 152~S D 169

25調査区で検出した溝群で総数18条(S D 152~S D 169)を数える。いずれも直線的に伸びるもので、そのうち、北西~南東に伸びるのが3条(S D 152~S D 154)、北東~南西に伸びるのが15条(S D 155~S D 169)である。南北方向に伸びる溝のうち、幅広のS D 169を除けば幅0.2~0.4m、深さ0.05~0.2m程度の小溝で、所謂、牛馬による犁溝と考えられる。これら的小溝は、断面「U」字形を呈しており、溝幅に比して深さがあるのが特徴である。埋土は砂質シルトを主体としている。遺物は古墳時代中期~中世に比定される土器類が出土しているが、いずれも小片化したものが大半を占めている。時期的には、江戸時代後期以降のものであろう。溝の法量、規模等の詳細は第5表で示した。

第5表 S D 152~S D 169法量表(単位m)

遺構名	地 区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 152	Ⅷ-14-4D	1.96	0.26	0.07	10GY6/1緑灰色砂質シルト	
S D 153	〃	3.33	0.61	0.06	〃	
S D 154	Ⅷ-14-5C·D	3.04	0.60	0.06	2.5GY7/1明オリーブ砂質シルト	土師器・須恵器
S D 155	Ⅷ-14-3·4C	5.88	0.29	0.06	N7/0灰白色砂質シルトと10YR 5/4にぶい黄褐色砂質シルト	土師器

遺構名	地 区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D156	W-14-3-C	14.8	0.32	0.07	N7/0灰白色砂質シルトと 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト	土師器・須恵器・瓦・甕 磁器・層瓦
S D157	W-14-3C-DAC	5.95	0.33	0.16	※	土師器・須恵器
S D158	W-14-3D4C5C	22.4	0.45	0.16	※	土師器・須恵器・瓦器
S D159	*	22.4	0.42	0.07	※	土師器・須恵器・瓦器・陶器
S D160	W-14-4D	2.56	0.26	0.06	※	土師器・須恵器
S D161	W-14-4D5C-D	21.4	0.54	0.16	※	土師器・須恵器・瓦器
S D162	*	21.5	0.38	0.14	※	土師器・須恵器・瓦器・ 屋瓦
S D163	W-14-5-C	7.06	0.31	0.04	※	
S D164	W-14-4D5C-D	19.8	0.36	0.07	※	土師器・須恵器・瓦器
S D165	*	19.8	0.40	0.11	※	土師器・須恵器・屋瓦
S D166	*	19.8	0.42	0.04	※	土師器・須恵器
S D167	W-14-4D-E5D	9.95	0.38	0.06	※	七輪器・陶器
S D168	*	11.3	0.26	0.05	10GY6/1緑灰色砂質シルト	
S D169	W-14-5-C	7.45	2.43	0.21	10GY6/3にぶい黄褐色砂質 シルト	土師器・須恵器・瓦器・ 陶器

S D170～S D193

26調査区で検出した溝群で総数24条(S D170～S D193)を数える。S D170を除けば幅0.40～1.40mを測る。S D170以外では概ね直線的に伸びるもので、北西～南東に伸びる20条(S D174～S D193)と北東～南西に伸びるもの4条(S D170～S D173)があり、切り合い関係から北東～南西方向に伸びるもののが新しい。北西～南東に伸びる小溝群は北接する25調査区で検出された溝群と方向、規模が共通しており牛馬耕による犁溝が推定される。溝の法量、規模等の詳細は第6表で示した。

第6表 S D170～S D193法量表(単位m)

遺構名	地 区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D170	W-14-6B～DJD	16.64	7.90	0.15	5Y6/2明オリーブ灰褐色粘 土質シルト	土師器・須恵器・磁器
S D171	W-14-6C	2.05	0.40	0.10	※	
S D172	W-14-7B-C	16.48	1.40	0.13	※	
S D173	W-14-8B	4.83	1.00	0.30	※	土師器・須恵器・瓦器・陶器
S D174	W-14-5-B	12.22	0.40	0.08	10YR6/1褐灰色シルト質粘土	土師器・須恵器
S D175	W-14-5C5B-C7B	15.86	0.50	0.05	※	土師器・須恵器・瓦器・屋瓦
S D176	*	19.72	0.40	0.05	10YR6/1褐灰色シルト質粘土	土師器・須恵器・磁器・屋瓦
S D177	W-14-6B-C7B	24.94	1.30	0.08	※	土師器・須恵器・陶器・ 屋瓦
S D178	*	24.72	0.40	0.04	※	土師器・須恵器・瓦器
S D179	*	25.26	0.40	0.04	10Y6/1灰色細粒砂泥質シルト	土師器・須恵器・瓦器
S D180	W-14-6B-C7B	17.06	0.45	0.03	※	土師器・須恵器・瓦器
S D181	W-14-6B-C7B	25.06	0.55	0.45	※	土師器・須恵器・瓦器
S D182	*	24.98	0.70	0.70	※	土師器・須恵器・瓦器
S D183	W-14-6C	5.00	0.40	0.50	※	
S D184	W-14-67C	7.70	0.40	1.85	※	土師器・須恵器・瓦器
S D185	W-14-6C7B-C8B	20.34	0.65	0.55	10Y6/1灰色細粒砂泥質シルト 2.5Y6/1黃灰色シルト質粘土	土師器・須恵器・瓦器・屋瓦
S D186	*	20.31	0.40	0.45	※	土師器・須恵器

遺構名	地 区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 187	Ⅷ-14-6C,7B-C	24.52	2.60	0.19	5Y6/2灰オリーブ色粗粒砂混粘土質シルト 2.5GY7/1明オリーブ灰色粗粒砂混粘土質シルト	土師器・須恵器・瓦器・陶磁器
S D 188	Ⅷ-14-7B-C,8B	9.78	0.40	0.05	タ	
S D 189	Ⅷ-14-8B	3.00	0.42	0.40	タ	
S D 190	Ⅷ-14-6-7C,8B-C	24.72	0.60	0.10	5Y6/2灰オリーブ色粗粒砂混粘土質シルト 10YR7/1灰白色粗粒砂混粘土質シルト	土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・匣瓦
S D 191	タ	20.12	0.70	0.10	5Y6/2灰オリーブ色粗粒砂混粘土質シルト	土師器・須恵器・瓦器・陶磁器
S D 192	Ⅷ-14-6-8C	18.80	1.25	0.15	5Y6/2灰オリーブ色粗粒砂混粘土質シルト 5Y6/1灰色粗粒砂混粘土質シルト	土師器・須恵器・瓦器・陶磁器
S D 193	Ⅷ-14-7-8C	14.00	0.75	0.13	10Y6/1灰色粗粒砂混粘土質シルト	土師器・須恵器

小穴 (S P)

S P 101～S P 107

S P 101～S P 107は18・19調査区で検出した小穴である。18調査区の北西部分でわずかに密集する部分がある以外は、散発的に検出されたものが大半である。平面形状では、円形、楕円形がある。規模は幅0.28～0.52m、深さ0.16mを測る。なお、19調査区で検出したS P 106、S P 107は共にS E 101の中央部から6.5mの間隔があるため、S E 101のはね釣瓶を構成した主柱の可能性がある。小穴の法量、規模等の詳細は第7表で示した。

第7表 S P 101～S P 107法量表 (単位m)

遺構名	地 区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 101	Ⅷ-8-6C	楕円形	0.28	0.18	0.11	10YR5/1褐色灰色シルト質粘土	
S P 102	タ	円形	0.32	0.30	0.12	2.5GY6/1オリーブ灰色粘土	土師器・須恵器
S P 103	タ	楕円形	0.52	0.40	0.19	タ	
S P 104	タ	円形	0.40	0.40	0.18	10YR5/1褐色灰色シルト質粘土	
S P 105	Ⅸ-8-7D	タ	0.30	0.30	0.20	10YR5/1褐色灰色シルト質粘土	
S P 106	Ⅸ-8-7E	タ	0.30	0.30	0.06	10Y7/2灰白色シルト質粘土	
S P 107	Ⅸ-8-7F	楕円形	0.30	0.50	0.07	10Y6/1灰色シルト質粘土	

S P 108～S P 117

S P 108～S P 117は21調査区の東部で検出した。平面形は円形、楕円形で規模は幅0.20～0.60m、深さ0.31mを測る。なお、S P 109～S P 114は東西方向に1.8mの間隔を持ち列状に並ぶもので、何らかの建物ないしは、農耕に関連した遺構であった可能性が高い。小穴の法量、規模等の詳細は第8表で示した。

第8表 S P 108～S P 117法量表 (単位m)

遺構名	地 区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 108	Ⅷ-9-9A	円形	0.60	0.50	0.70	2.5GY6/1オリーブ灰色粗粒砂混シルト	
S P 109	タ	タ	0.50	0.40	0.20	タ	
S P 110	タ	タ	0.50	0.40	0.30	タ	
S P 111	タ	楕円形	0.70	0.50	0.35	タ	
S P 112	タ	円形	0.60	0.50	0.29	タ	
S P 113	Ⅷ-9-9B	タ	0.60	0.50	0.28	タ	
S P 114	タ	タ	0.50	0.30	0.26	タ	
S P 115	Ⅷ-9-9A	円形	0.20	0.20	0.20	10Y6/1灰色粘質シルト	

遺構名	地 区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P116	VII-9-9A	円形	0.23	0.23	0.30	10Y6/1灰色粘質シルト	土師器
S P117	タ	楕円形	0.53	0.78	0.25	タ	土師器

S P118～S P121

24調査区中央部のVII-14-2 D地区で検出した。S P120・S P121が近接する以外は散発的に検出されている。上面の形状では、北西隅のVII-14-1 D地区で検出した北半分が削平を受けているS P118を除けば、円形のS P120・S P121と東部のVII-14-1 D地区で検出した楕円形のS P119がある。規模は径0.3～0.5m、深さ0.12～0.25mを測る。埋土はS P118が2.5Y5/1黄灰色砂質シルト、S P120・S P121が10BG6/1青灰色砂質シルト、S P119の上層が10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト、下層が10Y6/1褐灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。性格的には、農耕に関連したものと考えられるが、S E103の西側で検出されたS P118やS E104に近接する形で検出されたS P119については、井戸に付随したはね釣瓶を構成する主柱が設置されていた小穴である可能性が高い。

S P122

6調査区中央部のVII-14-7 C地区で検出した。S D191を切っている。楕円形の掘方で規模は長径0.6m、短径0.3m、深さ0.22mを測る。埋土は5B6/1青灰色粗粒混粘質シルトと10Y6/1灰色粘土質シルトの2層である。一部、柱根が残っていた。遺物は出土していない。なお、東側にS E109が近接していることから、S E109に伴うはね釣瓶を構成した主柱の可能性が高い。

島畑（島畠）

島畠101

17調査区中央部北端のVII-8-5 A・B地区で検出した。東西方向に伸びるもので、東をS D102、南をS D103、西をS D101に区画されており、北部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅11.5m、南北幅1.8m、高さ0.7m前後を測る。島畠は、第Ⅲ層上面から周辺を溝状に掘削することにより、周辺との高低差をつけるもので、溝掘削時の排出土を約0.2m程度第Ⅲ層上面に盛り上げて島畠部分を構築している。

島畠102

17調査区北東隅のVII-8-6 B地区で検出した。西がS D102に区画されているほか、東部および北部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.65m、南北幅1.2m、高さ0.6mを測る。構築方法は島畠101と同様である。

道路状遺構（道路状遺構）

道路状遺構101

24調査区南西部のVII-14-2 D地区から南東部のVII-14-3 E地区にかけて直線的に伸びるもので、北にS D135、南にS D136・S D137が付随している。検出長16.9m、幅0.4～1.5mを測る。

道路状遺構102

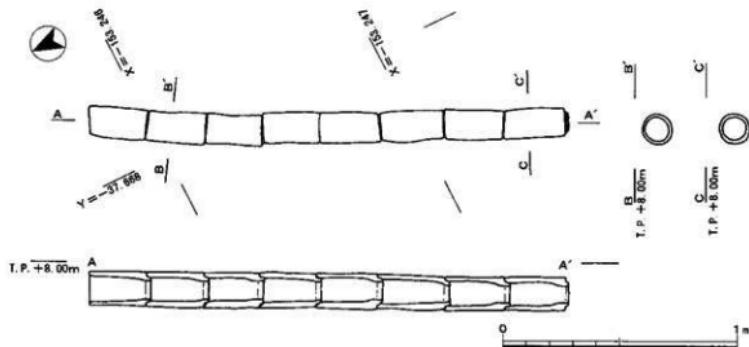
26調査区東部のVII-14-6 D、7・8 C・D地区を南北方向に伸びている。道路状遺構102を挟んで、西側に溝群がはしり、東側にS E109が位置している。検出部分で最大幅3.2mを測る。25

調査区においても、第2面で方向を同じくする道路状遺構201が検出されている。道路部分の地質は5Y6/2灰オリーブ色～2.5Y6/4に近い黄色極細粒砂混砂質シルトで層中に土器の小破片が多く含まれている。

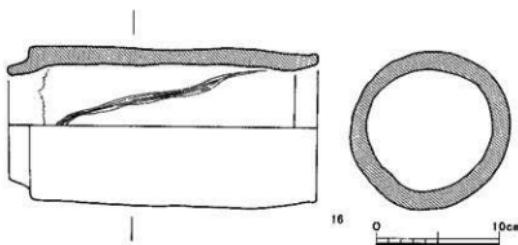
樋管（通管）

樋管101（第19・20図）

25調査区南東部のⅧ-14-5 D区で検出した。全長4.05mを測る。筒形の形状で、片方に接続部分を持つ瓦質土管を南北方向に8管を埋置するものである。東側にS E 107・S E 108が近接しており、南部にはS K 113があることからこれらの構造との有機的な関わりが想定される。樋管101を構成する瓦質土管1点(16)を図化した。16は筒形の形状で片方に玉縁状の接続部分を持つ瓦質土管で、長さ25.0cm、最大径13.0cm、接続部径9.2cmを測る。内面は吊り紐痕と粗い布目痕、外面は丁寧なナデ調整が行なわれており、基本的には丸瓦の製作技法と同様である。色調は淡灰色。焼成は良好である。時期的には近世初頭以降のものと推定される。



第19図 樋管101平面図



第20図 樋管101瓦質土管実測図

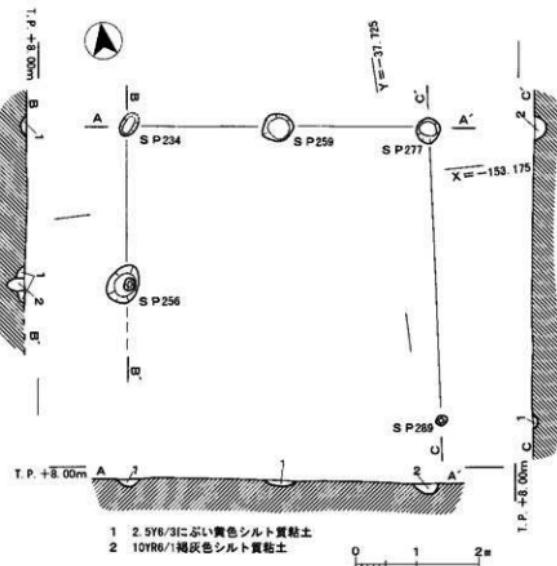
・第2面〔古墳時代中期後半～近世〕(第21～82図、図版八～二二・五六～六四)

調査地東部の14調査区～26調査区で検出した。第IV層上面(T.P.+7.8～7.2m)で検出した遺構面である。時期的には、古墳時代中期後半～近世におよぶ遺構が検出されているが、その大半は奈良時代～平安時代前半の居住域に関連した遺構で占められている。検出した遺構には、掘立柱建物3棟(S B201～S B203)、井戸9基(S E201～S E209)、土坑43基(S K201～S K243)、溝107条(S D201～S D2107)、小穴159個(S P201～S P2159)、自然河川2条(N R201・N R202)、道路状遺構1条(道路状遺構201)、地震跡3箇所(砂脈群201～砂脈群203)がある。

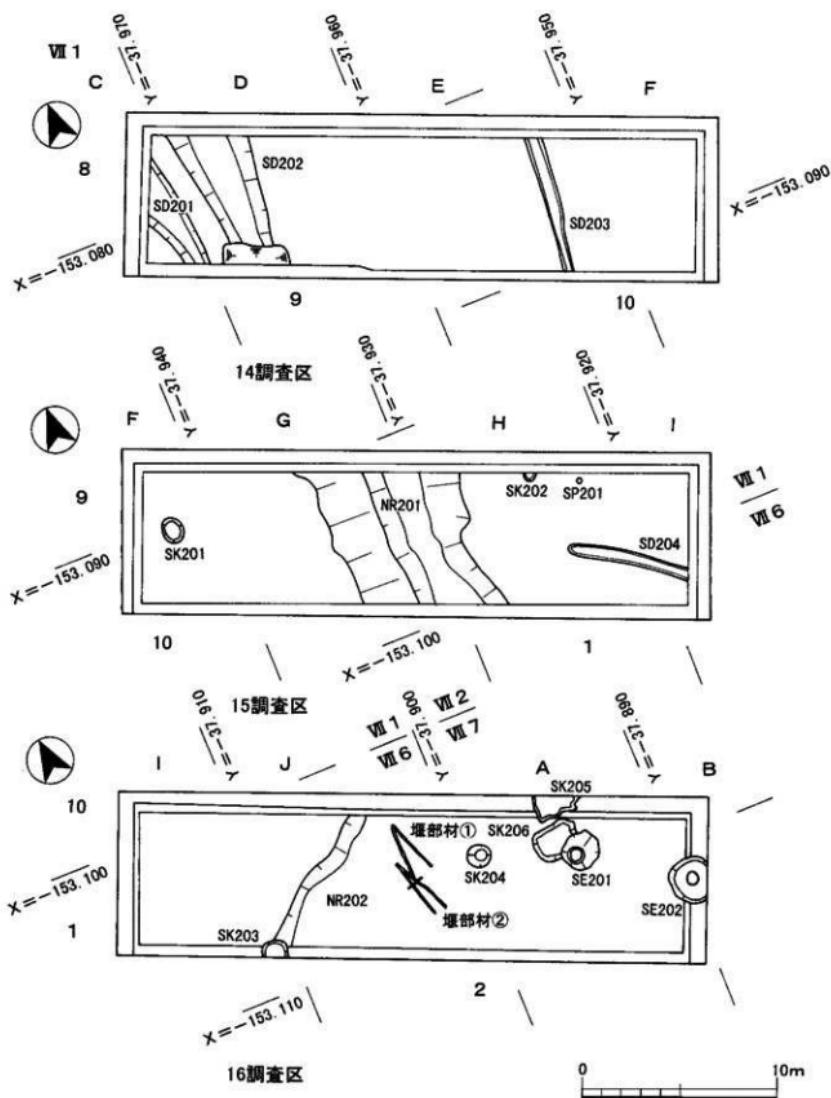
掘立柱建物 (S B)

S B201 (第21図)

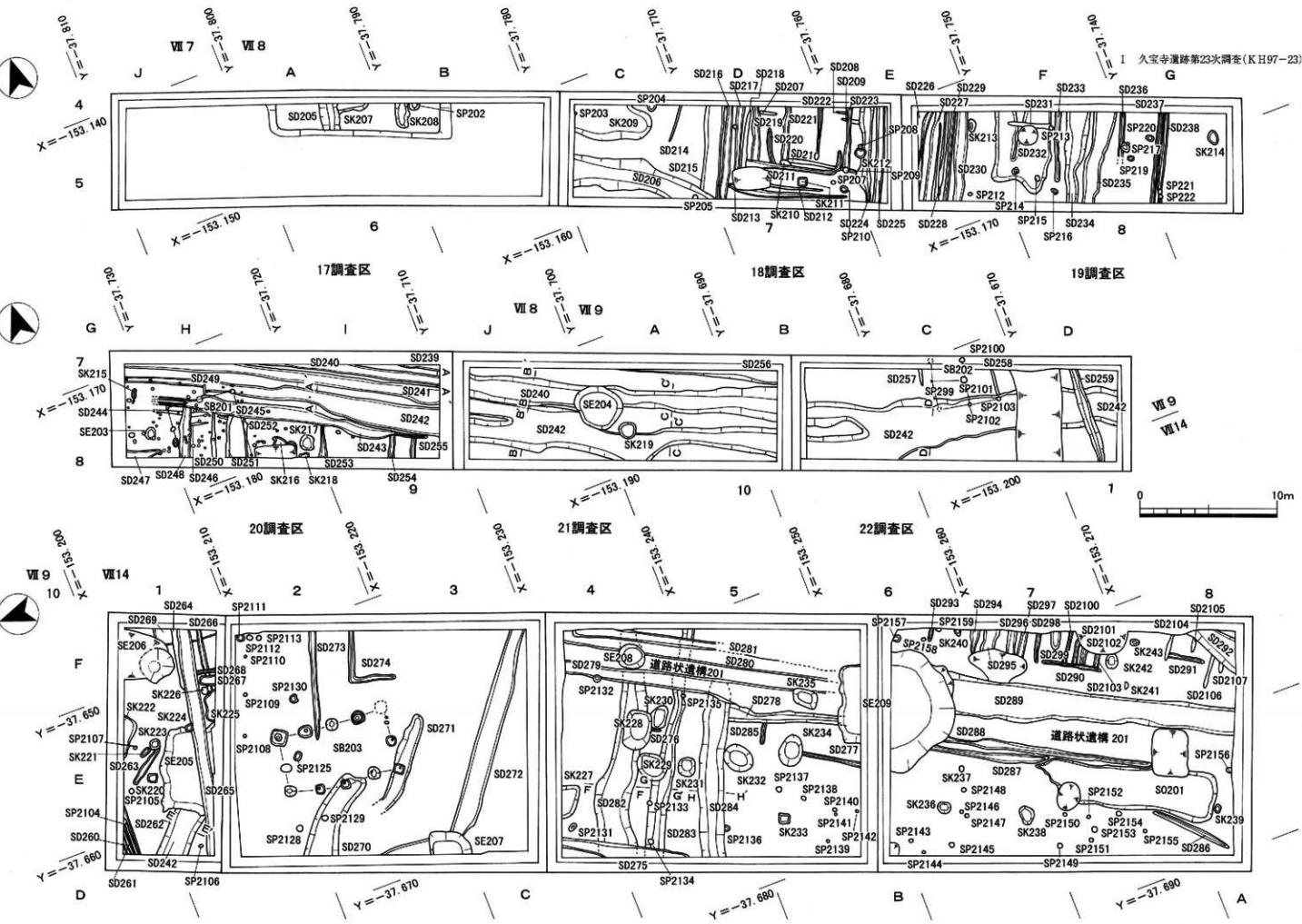
20調査区西部のⅧ-8-8H地区で検出した。S E203の東に位置する。掘立柱建物を構成する柱穴は、S P234・S P256・S P259・S P277・S P289で、一部欠落する他、南西部は調査区外のため全容は不明である。検出部分で東西2間(4.8m)×南北2間(4.9m)を測る。主軸はN-9°-Eである。柱間は東西2.4m、南北2.65mを測る。柱穴の上面形状は円形ないしは椭円形で幅0.16～0.62m、深さ0.05～0.12mを測る。埋土はにぶい黄色ないしは褐灰色シルト質粘土の単一層である。遺物はS P234・S P256・S P259から土器部、須恵器の小破片が極少量出土している。なお、S B201の周辺からは多数の小穴が確認されており、掘立柱建物の複数回におよぶ建て替えが想定されるが、S B201以外に明確にできたものはない。周辺から検出された小穴からは奈良～平安時代後半に比定される遺物が出土しており、比較的長期間にわたって居住域として利用されていたようである。本遺構については、西側で検出したS E203と同時期に併存したと考えた場合、構築時期は奈良時代後半が推定される。



第21図 S B201平面断面図



第22図 第2面平面図(14調査区～16調査区)



25調査区

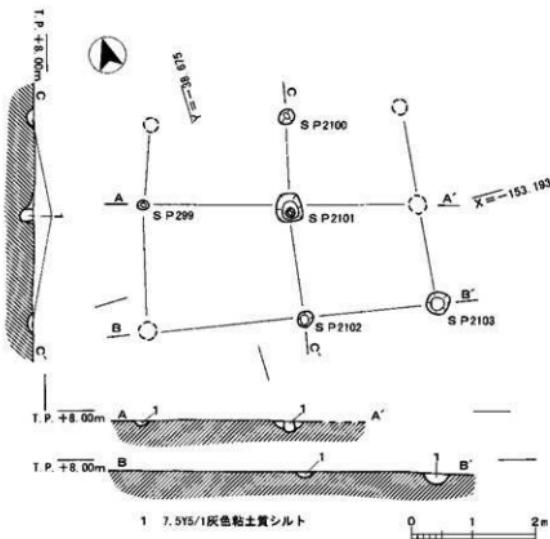
S B 202 (第24・
76図、図版一四)

22調査区北部のⅧ-9-10C地区で検出した。掘立柱建物を構成する柱穴はS P 299~S P 2103で、南西隅の柱穴が欠落している他、北部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西2間(約4.5m)×南北2間(3.3m)を測る。主軸方向はN-13°-Eである。柱間は東西方向が2.2m前後を測るが、南北方向

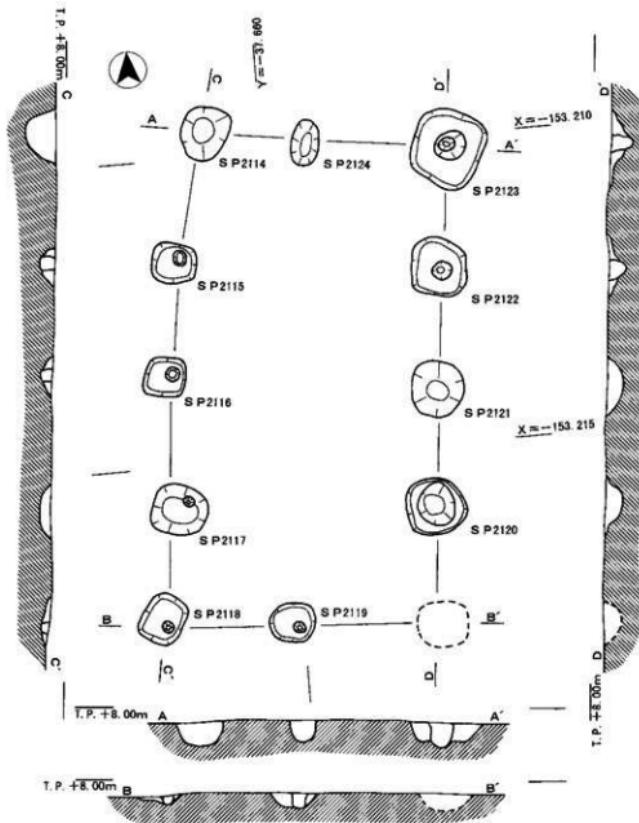
向はS P 2100とS P 2101間が1.3m、S P 2101とS P 2102間が2.0mであるため、北側に庇部分が付く建物の可能性がある。柱穴の掘方形状は、円形ないしは方形である。規模は幅0.2~0.5m、深さ0.2~0.25mを測り、中央部分に柱穴を残すものが多い。S P 2100からは、長さ0.2m、幅0.1mを測る柱根と、最大幅0.19m、厚さ0.05mを測る礎石(第76図136)が検出されている。埋土は7.5Y5/1灰色粘土質シルト。遺物はS P 2101から土師器片、須恵器杯身(8世紀前半)、S P 2103から須恵器蓋(8世紀前半)が出土している。S B 202に近接してS D 257・S D 258が検出されており、S D 258については位置的にやや問題があるものの、本建物に関連した遺構であった可能性がある。なお、南部はS D 242と重複するが、時期的にはS D 242の機能が停止した後のものである。これらを勘案して建物の構築時期は奈良時代前中期が推定される。各柱穴の詳細は第17表参照。

S B 203 (第25・78図、図版一四)

24調査区の中央部から北部のⅧ-14-1・2D-E地区で検出した。掘立柱建物を構成する柱穴はS P 2114~S P 2124で、東西2間(約4.0m)×南北4間(約8.0m)の規模を有する。主軸方位はN-8°-Eで床面積は約32m²を測る。柱穴掘方の上面形状は、不整円形ないしは隅丸方形である。規模は幅0.4~1.1m、深さ0.15~0.4mを測る。その内、柱痕位置が確認出来たのは、S P 2115~S P 2119、S P 2122・S P 2123の7箇所で、径0.2~0.4m程度のものである。柱痕部分および掘方部分の埋土は、シルト質粘土が堆積している。遺物はS P 2124・S P 2127を除く各柱穴から土師器、須恵器、製塙土器の小片が極少量出土している。そのうち、S P 2114からは、奈良時代後期に比定される土師器杯A点(第78図138)が出土している。北接する23調査区では、



第24図 S B 202平面図



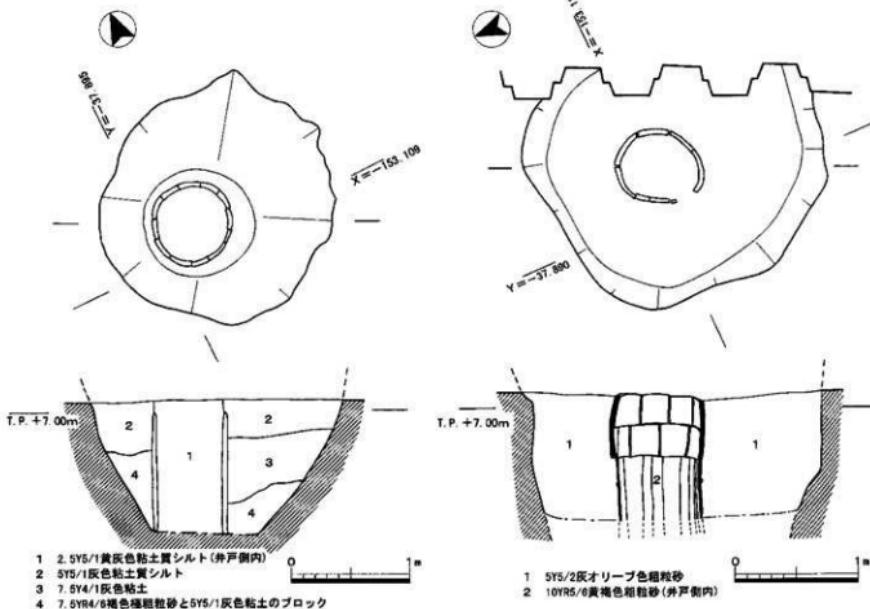
第25図 S B 203平面図

同時期の井戸(S E 206)が検出されており、この建物に付随した遺構と考えられる。

井戸 (S E)

S E 201 (第26図)

16調査区北東部のVII-7-1A地区で検出した農耕用の井戸である。構築面が人力掘削開始面より上層であるため上部構造が不明であるが、検出部分からみて桶を井戸側にした井戸と推定される。検出部分での掘方の平面形は円形を呈し、長径2.1m、短径2.0mを測る。掘方の断面は逆台形を呈し、深さは0.85mを測る。井戸側は掘方の中央やや南西の所で検出された。径0.6m、長さ1.0mを測る桶が使用されており、上部にも井戸側の抜き取り痕跡があるため、本来は2段に



第26図 S E 201平面図

第27図 S E 202平面図

組まれていたものと推定される。掘方内の埋土は3層(2~4層)で2層が5Y5/1灰色粘土質シルト、3層が7.5Y4/1灰色粘土、4層が7.5YR4/6褐色極粗粒砂である。井戸側内の埋土は、1層2.5Y5/1灰灰色粘土質シルトである。遺物は掘方および井戸側内から、古墳時代後期~中世に比定される土師器、須恵器類の小片が出土しているが、全て遊離した夾雜遺物である。構築時期は江戸時代中期以降が推定される。

S E 202 (第27図)

16調査区の東部のⅦ-7-2A・B地区で検出した。桶井戸側と瓦井戸側からなる農業用井戸で、河内一浩氏分類のⅢ類にあたる。構築面は人力掘削開始面より上層である。東側が調査区外に至るために全容は不明であるが、検出部分からみて掘方がほぼ円形を呈するものと推定される。検出部分で東西幅1.9m、南北幅2.2mを測る。深さは、両肩がほぼ垂直に約1.0m下がる所までは確認できたが、それ以下については掘方部分の崩壊が激しく調査を断念した。井戸側は掘方のほぼ中央の所に設置されており、上部に井戸側用瓦が2段(径0.74m)、下部に桶井戸側が1段(径0.7m)使用されている。掘方内の埋土は、1層5Y5/2灰オリーブ色粗粒砂である。井戸側内の埋土は、2層10YR5/6黄褐色粗粒砂である。遺物は掘方および井戸側内から、古墳時代後期から近世に比定される土師器、須恵器片の他、井戸側用瓦が出土している。構築時期はS E 201と同様、江戸時代中期以降が推定される。

S E 203 (第28・29図、図版一五・五六)

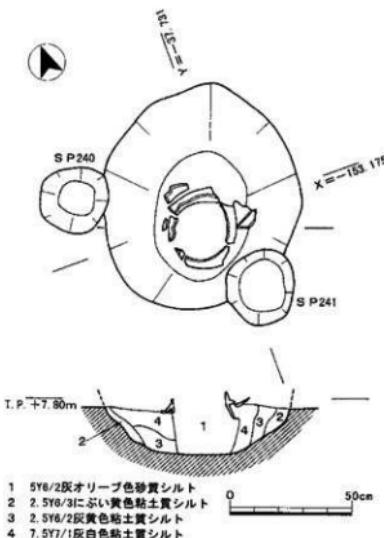
20調査区南西部のⅦ-8-8 G地区で検出した。東側にS B 201が存在している。羽釜を井戸側とする井戸でS P 240・S P 241に一部が切られている。平面形は南北方向に長い梢円形で、長辺0.94m、短辺0.8m、深さ0.26mを測る。奈良時代に比定される羽釜(18)の鉢部分を倒立させて井戸側とするが、部分的でそれ以下は素堀りの状況を呈している。また、井戸側を安定させるために羽釜の鉢部の下に土師器杯(17)が置かれていた。埋土は掘方内が2~4層、井戸側内が1層である。井戸側内部から遺物は出土していない。2点(17・18)を図化した。17は土師器杯Aである。約1/6が残存している。口径17.8cm、器高3.9cmを測る。色調は赤橙色である。奈良時代後半に比定される。18は井戸側を構成した土師器羽釜で、水平方向に伸びる鉢が付く。口縁部は完存しており、口径26.8cm、鉢径31.0cmを測る。体部外面には縱方向のハケを多用している。8世紀代のものか。

S E 204

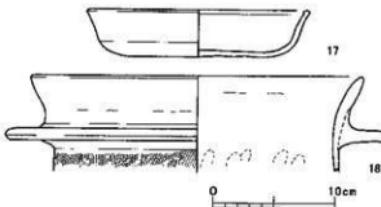
21調査区中央部のⅦ-8-9 J、Ⅶ-9-9 A地区で検出した。2面としているが、本来の構築面は1面である。円形の掘方で、長辺3.5m、短辺3.5m、深さ1.2mを測る。埋土は粘土質シルトを主体としており、9層前後に分かれ。北側ほどやや複雑な堆積をしている。遺物は古墳時代後期~江戸時代に比定される土師器、須恵器、瓦質上器、肥前系磁器、井戸側用瓦等の小破片が少量出土している。井戸側は検出されていないが、井戸側用瓦が出土していることから廃絶時に抜き取られたのであろう。構築時期はS E 201と同様、江戸時代中期以降が推定される。

S E 205 (第30・31図、図版一五)

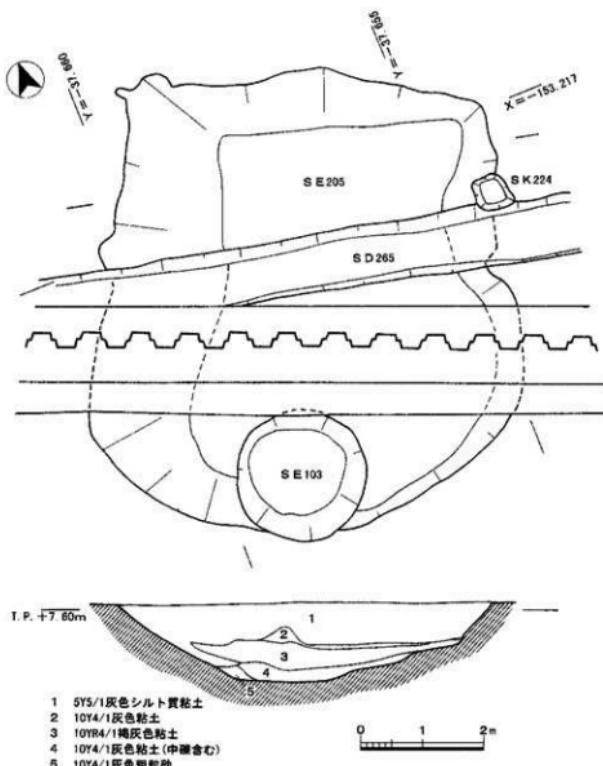
23調査区の中南部から24調査区北部のⅦ-14-1 D・E地区で検出した。大規模な素堀り井戸である。S D 242を切りS K 224・S D 265に切られている。掘方の平面形は不整長方形を呈し、東西長6.0m、南北長8.2mを測る。断面は逆台形を呈し、深さは0.75mを測る。埋土は5層に分層が可能で、最下部層の粗粒砂を除けば粘土~シルト質粘土が堆積している。出土遺物としては、室町時代中期~後期に比定される土師器、須恵器等の細片が極少量出土している。2点(19-20)を図化した。19は須恵器鉢の小破片である。復元口径26.2cmを測る。東播系のもので14世紀後半



第28図 S E 203平面断面図



第29図 S E 203出土遺物実測図



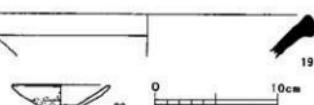
第30図 S E 205平面面図

のものと推定される。20は土師器小皿の小破片である。

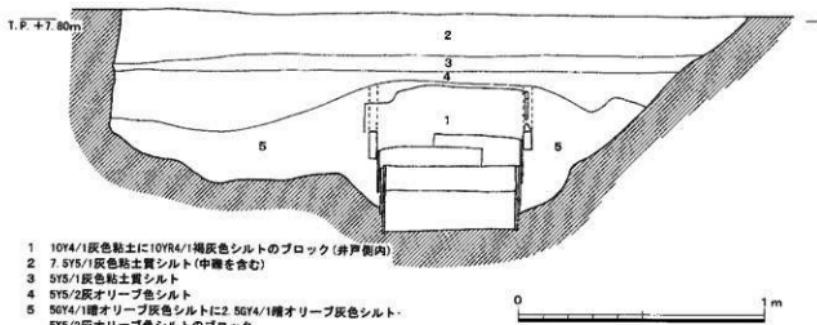
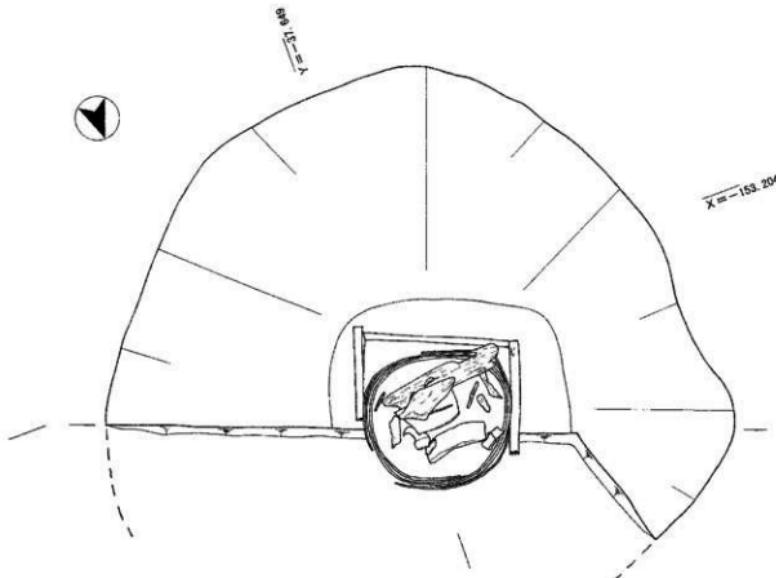
約1/3が残存している。復元口径8.0cm、器高2.1cm、底径1.5cmを測る。色調は灰白色である。16世紀代の所産と推定される。20からみて遺構の廃絶時期は室町時代後期が考えられる。

S E 206 (第32・33図、図版一六・五七)

23調査区の北西部、VII-14-1 E・F地区で検出した。井戸側の下部に曲物、上部に方形木組を持つ井戸である。中央部分より北部の大半が近・現代の掘削により搅乱を受けており全容は不明であるが、検出部分からみて円形の掘方を呈するものと考えられる。検出部分で東西幅2.5m、南北幅2.6m、深さ0.9mを測る。井戸側は掘方のやや西よりに設置されており、上部についても搅乱によって破壊されていたが、下部は遺存していた。



第31図 S E 205出土遺物実測図

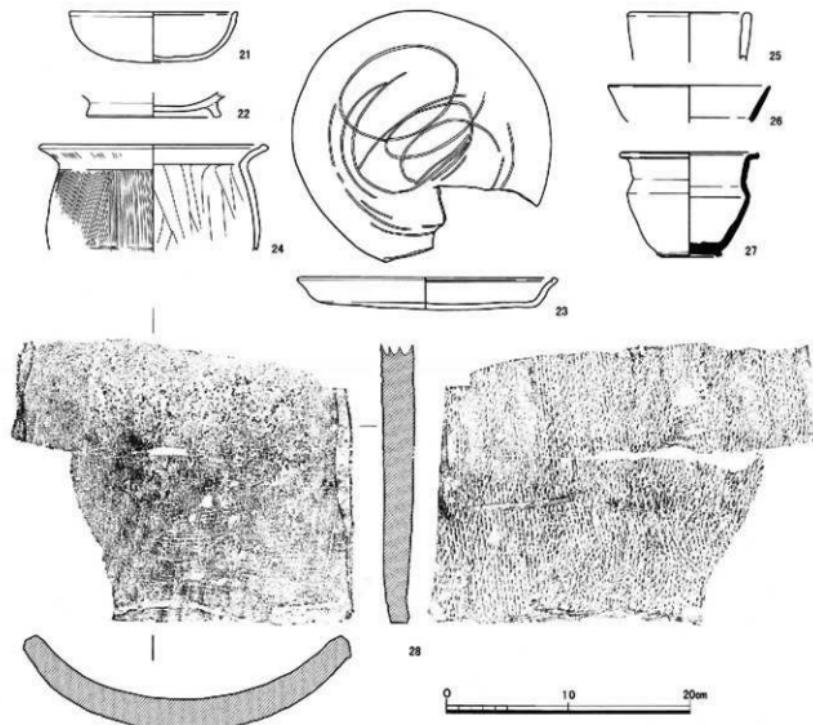


第32図 S E 206平面断面図

井戸側の下部を構成する曲物井戸側は、径0.55~0.58m、高さ0.18mを測る曲物を4段に重ねている。上部の方形木組み側は、遺存状態が不良で詳細は不明であるが、規模は一辺0.66mで高さは0.2m以上を測るものと推測される。井戸側内の埋土は、10YR4/1褐色シルトのブロックを含む10Y4/1灰色粘土である。掘方内の埋土はシルトを主体とする4層(2~5層)が堆積している。遺

I 久宝寺遺跡第23次調査(KH97-23)

物は、井戸側内から奈良時代後半を中心とする土師器杯、須恵器椀、須恵器壺、平瓦などが出土している。8点(21~28)を図化した。そのうち井戸側内出土のものは(21・23・27・28)である。内訳は、土師器椀1点(21)、土師器杯1点(22)、土師器皿1点(23)、土師器壺1点(24)、製塙土器1点(25)、須恵器杯1点(26)、須恵器壺1点(27)、平瓦1点(28)である。21は土師器椀Aで口縁部の一部を欠く以外は完存している。口径13.7cm、器高4.2cmを測る。22は土師器杯Bの高台部と推定される。高台径11.1cm、高台高1.2cmを測る。外面に煤の付着が認められる。23は土師器皿Aで一部を欠く以外は完存している。口径21.2cm、器高2.5cmを測る。見込みに蝶施暗文が施されている。奈良時代後半。24は土師器壺Aである。復元口径18.0cmを測る。全体に丁寧な作りで口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は綫方向のハケ、体部内面はヘラケズリが行われている。外面に煤、内面に炭化物の付着を認める。色調は褐色灰色で胎土は精良である。奈良時代後半。25は製塙土器である。色調は灰黄色で胎土中に1mm大の長石・チャートが多量に含まれている。26は須恵器杯の小破片である。27は須恵器壺Hである。稜角をなす肩部から大きく外反する口径部が付く



第33図 S E 206出土遺物実測図

もので高台は小さく張り出している。ほぼ全容を知り得るもので、口径11.2cm、器高8.5cm、体部最大径10.0cmを測る。奈良時代後半のものである。28は平瓦片で1/2程度が残存している。一枚作りによるもので凹面の反りが大きい。上幅で25.0cmを測る。凹面は細い布目、凸面には縦方向の縄目タタキがみられる。凹面に厚く煤が付着しており、瓦としての機能を停止後に別途に転用して使用されたものと推定される。遺構の廃絶時期は奈良時代後半である。

S E 207

24調査区の南西部のⅧ-14-2・3 D地区で検出した農耕用の素掘り井戸である。S D 272を切るほか、西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.9m、南北幅3.3m、深さ0.7mを測る。埋土は粘土質シルトを主体とする6層から成る。遺物は古墳時代後期以降の土師器、須恵器、国産陶磁器、屋瓦等の小破片が極少量出土している。構築時期は江戸時代中期以降が推定される。

S E 208（写真11）

25調査区北東部のⅧ-14-4 D地区で検出した円形状の掘方を有する農耕用の素掘り井戸で、道路状遺構201およびS D 282を切っている。長径2.0m、短径1.8m、深さ0.7mを測る。埋土は下部においては、漸移的な堆積状況を示すが、上部は不均質な互層の堆積が顕著であり、人為的な埋め戻しが想定される。遺物は唐津焼碗の他、平瓦片が少量出土している。構築時期は江戸時代中期以降が推定される。

S E 209（写真12）

26調査区北部から25調査区南部のⅧ-14-5・6 C・D地区で検出した農耕用の井戸である。大半が26調査区内で検出されているが、25調査区内では地層観察用畦やS K 113の存在により平面形は判然としない。検出部分で東西幅8.7m、南北幅4.3m、深さ1.0m前後を測る。一つの井戸の掘方としては大きく、いくつかの井戸の重なりも考えられるが、平面・断面の地層を見る限り明確な切り合いは認められなかった。埋土は深い椀形の断面形状に沿って、灰白色～灰色の粗粒砂を多く含んだ粘土質シルトが堆積している。なお、井戸の底から立位の状態で井戸側を支えた木杭が2本検出されており、井戸側を抜き取った際に折れたとみられる。遺物は中～近世を中心とする土師器、国産陶磁器、屋瓦の破片が多く出土している。構築時期は江戸時代中期以降が推定される。

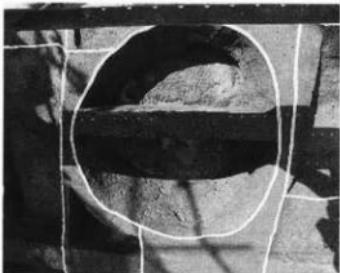


写真11 S E 208検出状況(南から)



写真12 S E 209検出状況(南東から)

土坑(SK)

SK201(第34・35図、図版一六)

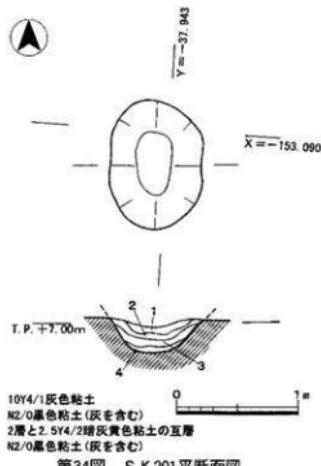
15調査区西部のⅦ-1-9・10F地区で検出した。平面形は南-北に長い梢円形を呈する。検出部分で長径1.1m、短径0.7m、深さ0.28mを測る。断面は楕円形を呈し、埋土は、上部から1層10Y4/1灰色粘土、2層N2/0黒色粘土(灰を含む)、3層N2/0黒色粘土と2.5Y4/2暗灰黄色粘土、4層N2/0黒色粘土(灰を含む)がレンズ状に堆積している。層中に灰を多く含むことから、焼土坑の可能性があるが土坑底面に硬化した部分が認められないことから、別の所で生じた灰を廃棄するために設けられた土坑と推定される。遺物は平安時代中期に比定される土師器小皿、黒色土器椀、縁釉陶器椀の小破片が極少量出土している。5点(29~33)を図化した。29~31が土師器小皿、32が黒色土器椀、33が縁釉陶器椀である。29~31は「て」の字状口縁を呈する土師器皿で、3点共に残存率は1/8程度である。復元口径は9.5~11.4cmを測る小形の29・30と、15.0cmを測る中形の31がある。色調は白色で胎土は精良である。32は黒色土器のA類椀である。復元口径7.2cmを測る。33は貼り付け高台を有する近江系縁釉陶器椀の高台部分の小破片である。復元高台径6.5cmを測る。高台は疊付部分に段を有する有段輪高台で、見込の中央部が円形状に削られている。釉色は濃緑灰色。胎土は精良。森隆氏編年(森1991)のII b(10世紀後半)に比定される。遺物には33のように10世紀後半に比定されるものが含まれているが、29~32については佐藤隆氏編年(佐藤1992)の平安時代Ⅲ期新段階にあたることから、遺構の廃絶時期は平安時代中期の11世紀前半が推定される。

SK202

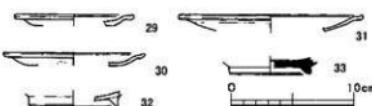
15調査区北部のⅦ-1-10H地区で検出した。北部分は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西長0.7m、南北長0.4m、深さ0.1mを測る。断面は皿形を呈し、埋土は7.5Y5/2灰オリーブ色粘土質シルトの單一層である。出土遺物は出土していない。

SK203(第36・37図、図版一七・五七・五八)

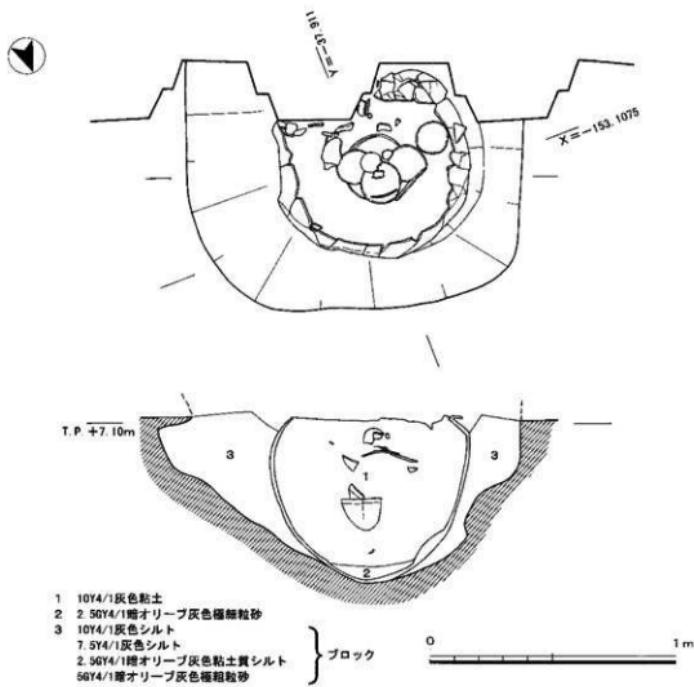
16調査区南西部のⅧ-6-1 I地区で検出した。須恵器の大甕を埋設した土坑である。南部は調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部分での掘方平面形は隅丸方形を呈し、東西幅1.36m、南北幅1.01mを測る。掘方の断面形状はV字状で深さ0.7mを測る。須恵器の大甕は掘方内のやや西よりに正位に埋置されている。体部上半より上部を欠くもので、残存部分で器高0.67m、体部最大径0.8mを測る。掘方内の埋土は粘土質シルト・シルトのブロックで構成され



第34図 SK201平断面図

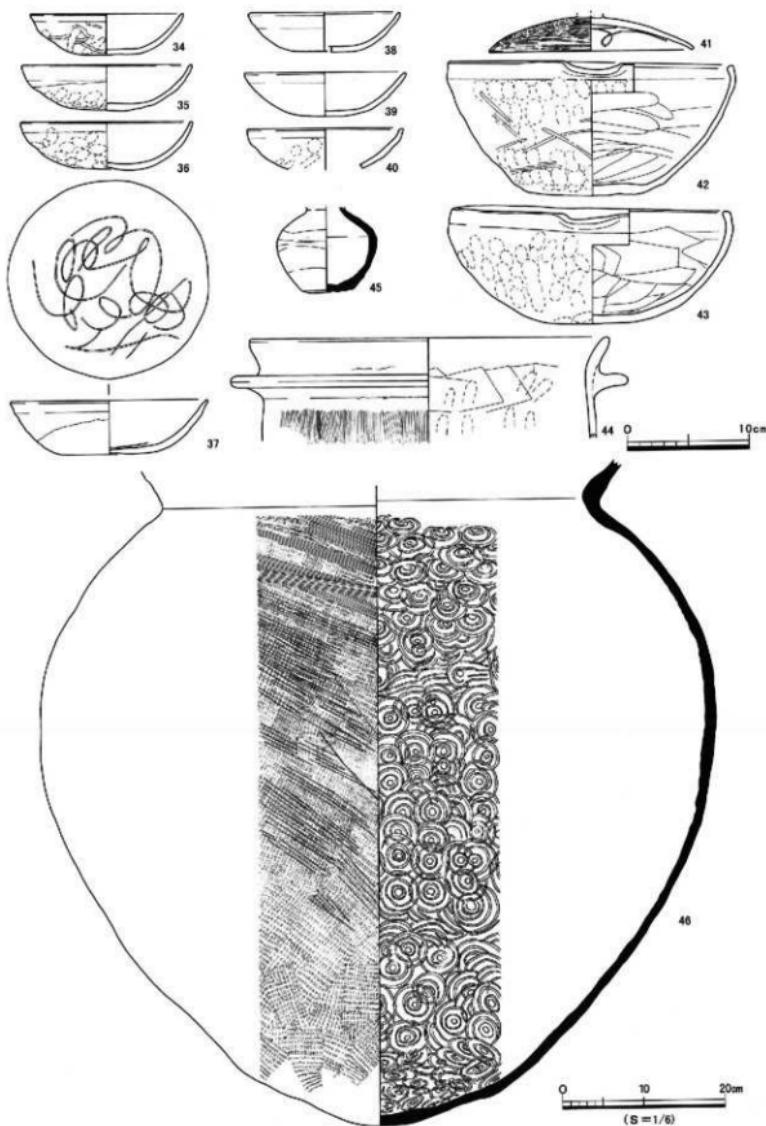


第35図 SK201出土遺物実測図



第36図 SK 203平面面図

ている3層で、大甕内の埋土は大半が1層10Y4/1灰色粘土で最下層に2層2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂が堆積している。大甕の内部からは、平安時代初頭に比定される完形品を含む土師器杯蓋・杯・鉢・羽釜、須恵器壺がほぼ中央部分に集中して出土している。遺構の性格については、水を貯蔵するために埋置された水甕と考えられるため、本遺構が調理場的な性格を持つ遺構の一角を占めていた可能性がある。13点(34~46)の土器類を図化した。その内訳は、土師器碗7点(34~40)、杯蓋1点(41)、土師器鉢2点(42・43)、土師器羽釜1点(44)、須恵器壺1点(45)、須恵器甕(46)である。34~40は土師器碗Cである。いずれも平底の底部から斜上方に内湾気味に口縁部が伸びるものである。そのうちの35・36・37・39が完形品である。法量は口径12.5~14.0cm、器高3.5~4.0cmを測る34~36、38~40と口径16.5cm、器高4.5cmを測る37に区別される。体部外面の器面調整では、指頭圧痕が残るものとナデにより平滑にされるものに二分されるが、共に口縁部付近はヨコナデ調整が行なわれている。なお、35・37については外面に粘土繋ぎの痕跡が明瞭に残る。体部内面は全てナデ調整により平滑にされている。37は見込みに螺旋暗文が施文されている。色調は赤褐色~淡褐色。胎土は概ね精良であるが、一部1mm大の長石粒が散見されるものがある。41は土師器杯B蓋でつまみを欠く以外は完存している。口径16.8cm、残存高2.7cmを測る。外面は口縁部付近が横方向のヘラミガキで、それより上部はつまみ部分を中心として「井」の字



第37図 S K 203出土遺物実測図

状に密なヘラミガキが施されている。内面は螺旋暗文が施されている。口縁部外側付近に煤の付着が認められる。色調は褐灰色。胎土は精良である。42・43は流し口を有する土師器鉢Bである。共に完形品で、42が口径23.3cm、器高11.0cm、43が口径22.6cm、器高9.7cmを測る。形態的には平底の底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部付近で角度を内側に変えるもので、口縁端部が内傾する42と水平な43がある。体部外面には、共に水平方向に連続して指頭圧痕が残る他、42には多数のクラックが認められる。内面調整は、口縁部がヨコナア、以下は指ナアが多用されている。44は土師器羽釜で口縁部の1/4が残存している。復元口径29.0cm、銅径32.5cmを測る。水平に短く伸びた鋸の上部から斜上方に口縁部が伸びる。体部外面は縱方向の密なハケ調整が行なわれている。外面および内面上位に煤の付着が認められる。色調は褐灰色。胎土に1~2mm大の長石粒が含まれている。45は須恵器の小形壺で、平城宮分類の壺Mにあたる。口縁部を欠くもので、残存高7.0cm、体部最大径8.0cm、底径4.0cmを測る。底部裏面に初および藁の圧痕が認められる。色調は青灰色。焼成は良好である。46は埋置されていた須恵器の大壺で、口頭部を欠く以外は完存している。体部は球形で、残存高78.2cm、体部最大径83.4cmを測る。器面調整は体部外面が細い格子状タキで体部上半から中位にかけてカキメ、体部内面は同心円タタキが施されている。色調は青灰色、焼成は堅緻である。出土した土器類は大阪府藤井寺市のはさみ山遺跡79-38区S E01中層出土土器群と土器組成が共通しており、これらの資料を基準とされる佐藤編年の平安時代I期(8世紀末~9世紀初頭)にあたる。

S K 204

16調査区北部のVII-7-1A地区で検出した。平面形状は円形で径約1.2m、深さ0.95mを測る。断面形状は「U」字状で、埋土は上から7.5YR5/6明褐色粗粒砂(7.5Y4/1灰色シルトのブロックを含む)、10GY4/1暗緑灰色シルト(7.5Y3/1オリーブ黒色粘土のブロックを含む)、5GY4/1暗オリーブ灰色シルト(2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土のブロックを含む)、5Y5/2灰オリーブ色シルト(5Y4/1灰色粘土のブロックを含む)の4層から成る。遺物は出土していない。

S K 205

16調査区北東部のVII-7-1A地区で検出した。北側が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で、東西幅2.3m、南北幅1.2mを測る。埋土は10Y4/1灰色粘土(7.5YR5/6明褐色粗粒砂のブロックを含む)である。遺物は出土していない。

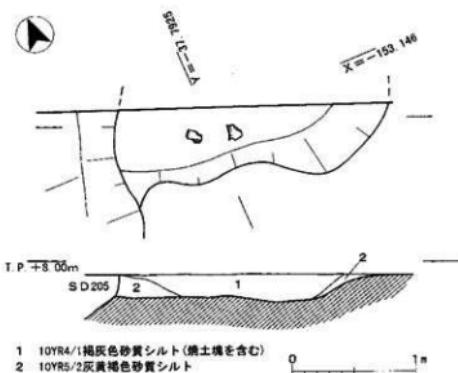
S K 206

16調査区北東部のVII-7-1A地区で検出した。南東部分がS E 201に切られているが、概ね長方形の掘方が推定される。規模は長辺2.3m、短辺1.2mを測る。断面は逆台形を呈し、深さは0.7mを測る。埋土は7.5Y4/1灰色粘土(10Y4/1灰色粘土と10YR5/6黄褐色粗粒砂のブロックを含む)である。最下層からは、近代から現代に比定される十能と呼ばれる銅製のスコップが1点出土している。

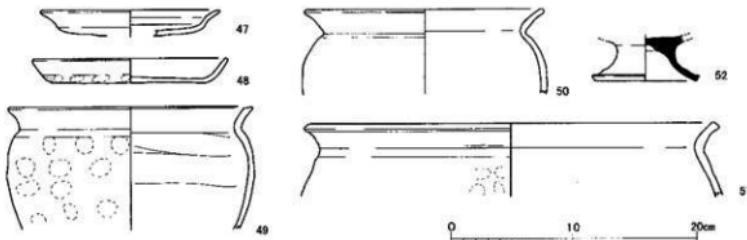
S K 207 (第38・39図、図版一八・五九)

17調査区北部のVII-8-5A地区で検出した。東西方向に伸びるもので、西部がS D 205に切れ北部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅2.2m、南北幅0.8m、深さ0.22mを測る。埋土は焼土塊を含む1層10YR4/1褐灰色砂質シルトと2層10YR5/2灰黄褐色砂質シルトの2層から成る。遺物は1層から飛鳥時代~平安時代前期に至る土師器、須恵器の小片が少

量出土している。6点(47~52)を図化した。47・48は土師器皿である。47は口縁部が強く屈曲するもので、復元口径14.5cmを測る。色調は淡褐灰色。胎土はやや粗く0.5~2mm大の長石が散見される。48は口径15.8cm、器高2.0cmを測る。色調は褐色。胎土は精良。49~51は土師器壺の小片である。49・50が中形、51が大形に分類される。復元口径は49が19.8cm、50が19.0cm、51が32.4cmを測る。3点共に口縁部が外反して「く」の字状に屈曲するもので、口縁端部の上面が強いヨコナデにより平坦面をつくる49、丸く終る50、内傾する面を作る51がある。色調は49・50が赤褐色、51が赤褐色である。胎土は3点共に0.1~2mm大の長石が散見される。52は須恵器無蓋高杯の脚部である。裾部径8.2cmを測る。時期的には、52が飛鳥時代前期(7世紀前半)である以外は、佐藤編年の平安時代Ⅰ期(8世紀末~9世紀初頭)にあたる。



第38図 SK 207平面面図



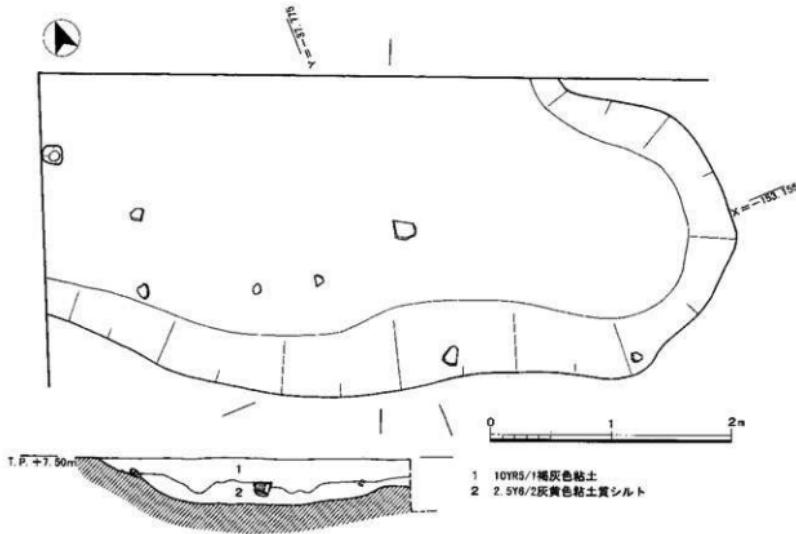
第39図 SK 207出土遺物実測図

SK 208

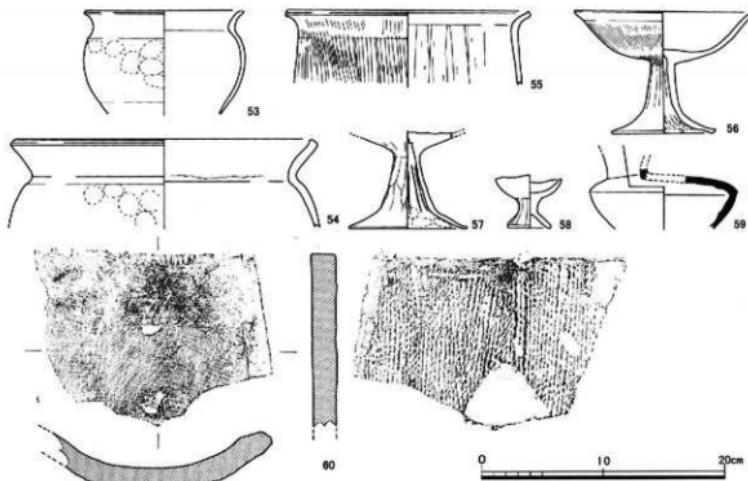
17調査区北部のⅧ-8-5B地区で検出した。南北方向に伸びるもので、北部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.1m、南北幅1.8m、深さ0.37mを測る。埋土は上層の10YR5/1褐灰色砂質シルトと下層の10YR6/4にぶい黄色褐色砂質シルトの2層から成る。遺物は平安時代後期に比定される土師器、須恵器、黒色土器の小破片が少量出土しているが図化できたものは無い。

S K 209(第40・41図、図版一八・五九)

18調査区北西部のVII-8-6C地区で検出した。北西端が調査区外のため全容は不明である。検出部分で東西幅5.78m、南北幅2.68m、深さ0.4mを測る。埋土は2層に分かれ、上層が1層10YR5/1褐色粘土、下層が2.5Y6/2灰黄色粘土質シルトである。遺物は1・2層から飛鳥時代～奈良時代前期を中心とする土師器、須恵器、屋瓦が少量出土しているが、その大半が小破片である。8点(53～60)を図化した。その内訳は、土師器壺3点(53～55)、土師器高杯(56～58)、須恵器平瓶1点(59)、平瓦1点(60)である。53・54の土師器壺は、口縁部と肩部の境を強いヨコナデ調整することで明瞭な稜を形成するものである。53は小形で復元口径12.8cm、54は大形で復元口径24.3cmを測る。色調は53が淡橙色、54が褐色で54の外面に煤の付着を認める。55は直線的に伸びる体部に「く」の字に屈曲する口縁部が付く土師器壺である。復元口径19.7cmを測る。体部外面は縦方向のハケ、体部内面はヘラケズリを行う。色調は褐色である。56・57は土師器高杯である。56はやや小振りの高杯で口径14.9cm、器高10.2cm、裾部径8.5cmを測る。杯部外面および脚柱部との境にハケ調整を施す。脚柱部外面は縦方向のナデ、内面はシボリ目で脚部の指頭圧痕が顕著である。5世紀前半のものか。57は高杯Bに分類される。飛鳥時代前半のものか。56・57共に色調は橙色で胎土は精良である。58は手づくねの高杯である。完形品で口径5.5cm、器高4.5cm、裾部径3.8cmを測る。59は須恵器平瓶の小破片である。8世紀後半。60は平瓦片である。凹面に細い布目が全面認められるが、端部から5.5cm程度がナデにより消されている。凸面は縦方向に縄目タタキが施されている。出土遺物は時期差が認められるが、造構の帰属時期は奈良時代前期が推定される。



第40図 S K 209断面図



第41図 S K 209出土遺物実測図

S K 210

18調査区東部のⅦ-8-7D地区で検出した。南部がS D 211に切られている。検出部分で東西幅0.5m、南北幅0.5m、深さ0.2mを測る。埋土は2.5Y7/2灰黄色シルト質粘土の単一層である。遺物は出土していない。

S K 211

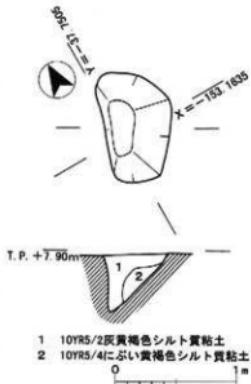
18調査区東部のⅦ-8-7D地区で検出した。掘方の平面形は方形で長辺0.7m、短辺0.7m、深さ0.3mを測る。埋土は2.5Y8/1灰白色シルト質粘土の単一層である。遺物は出土していない。

S K 212

18調査区東部のⅦ-8-7E地区で検出した。掘方が円形を呈するもので、長辺0.8m、短辺0.7m、深さ0.2mを測る。埋土は2.5Y7/2灰黄色シルト質粘土の単一層である。遺物は出土していない。

S K 213 (第42・43図、図版一八・六〇)

19調査区北西部のⅦ-8-7E地区で検出した。掘方は梢円形で長径1.0m、短径0.55m、深さ0.45mを測る。埋土は10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土と10YR5/4にぶい黄褐色シルト質粘土の2層に分かれる。遺物は平安時代後期を中心とする土器類が少量出土している。4点(61~64)を図化した。61は「て」の字状口縁を呈する土師器小皿である。完形品で口径9.8cm、器高1.3cmを測る。62~64は土師器羽釜である。3点共に水平方向に鈎が付くもので、そこから頸部が内傾した後「く」の字に屈



第42図 S K 213平面面図

曲する口縁部を形成するもので罐部は丸く終る62と内傾し幅広の端面を持つ63・64がある。色調は赤褐色で胎土中に1~2mm大の長石・チャートが多量に含まれている。遺構の帰属時期は11世紀後半~12世紀初頭が推定される。

S K214

19調査区北東部のVII-8-7・8G地区で検出した。掘方は楕円形をしており長径0.9m、短径0.8m、深さ0.5mを測る。埋土は5Y4/1灰色シルト質粘土の單一層である。遺物は出土していない。

S K215

20調査区北西部のVII-8-8G地区で検出した。掘方は、楕円形を呈しており長径0.8m、短径0.45m、深さ0.5mを測る。埋土は2.5Y8/1灰白色粘質シルトである。奈良時代後半に比定される土器類が少量出土している。

S K216

20調査区南部のVII-8-8H地区で検出した。南部が近代の搅乱により削平を受けている。検出部分で東西幅1.6m、南北幅0.8m、深さ0.07mを測る。埋土は2.5Y7/2灰黄色シルト質粘土の單一層である。遺物は土師器の小破片が出土している。

S K217 (第44・45図)

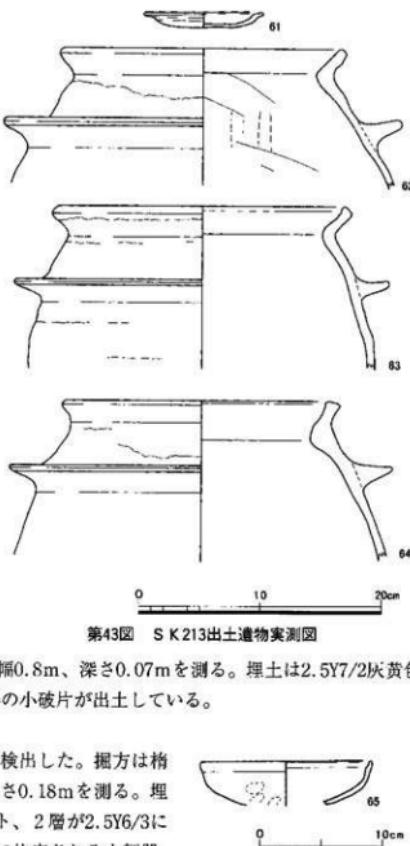
20調査区中南部のVII-8-8・9H地区で検出した。掘方は楕円形をしており長径1.15m、短径1.0m、深さ0.18mを測る。埋土は2層で1層が2.5Y6/1黄灰色粘土質シルト、2層が2.5Y6/3にぶい黄色粘土質シルトである。奈良時代前半に比定される土師器、須恵器が少量出土している。土師器杯1点(65)を図化した。65は第44図 S K217出土遺物実測図土師器杯Cの小破片である。復元口径8.9cmを測る。色調は赤褐色である。奈良時代前期。遺構の帰属時期は奈良時代前期が推定される。

S K218

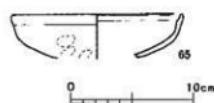
20調査区南部のVII-8-9H地区で検出した。南部は調査区外に至る。検出部分で東西幅0.8m、南北幅0.4m、深さ0.1mを測る。埋土はN6/0灰色粘土質シルトである。遺物は土師器の小破片が少量出土している。

S K219

21調査区中央部のVII-9-9A地区で検出した。円形の掘方で径1.22m、深さ0.19mを測る。



第43図 S K213出土遺物実測図



第44図 S K217出土遺物実測図

埋土はN6/灰色粗粒砂混粘質シルトの單一層である。遺物は出土していない。

S K 220

23調査区中央部のVII-14-1 E 地区で検出した。平面形は不整正方形で、長辺約0.7m、短辺約0.7mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は2.5Y5/2暗灰黄色シルトの單一層である。遺物は出土していない。

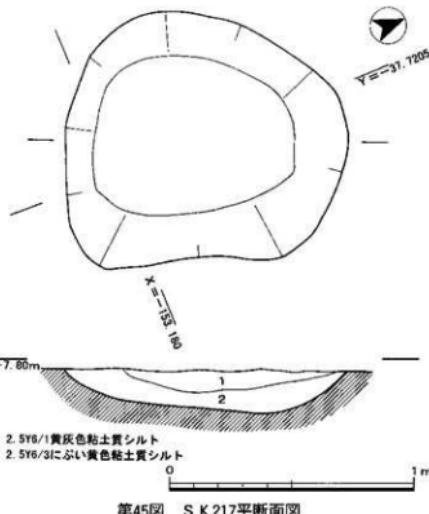
S K 221

23調査区中央部のVII-14-1 E 地区で検出した。S K 223の北に隣接 T.P +7.80m している。平面形は南北に長い楕円形で長辺0.9m、短辺0.4mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルトの單一層である。遺物は出土していない。

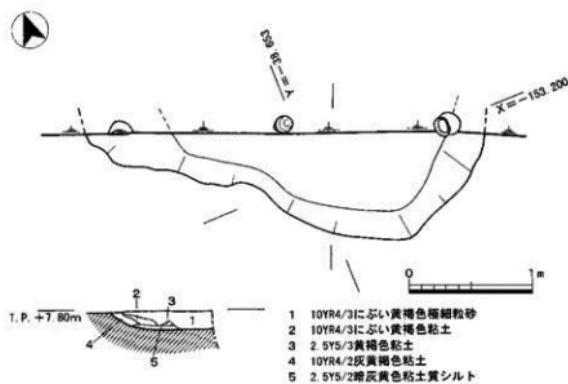
S K 222 (第46・47図、図版一九・六〇)

23調査区の中北部、VII-9-10 E、VII-14-1 E 地区で検出した。遺構の北部部分は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅3.4m、南北幅0.9m、深さ0.16mを測る。埋土は5層(1~5層)に分層が可能である。遺構内からは6世紀後半に比定される土師器のほぼ完形品が3点(66~68)出土している。66は半球形の体底部に斜上方に短く伸びる口縁部が付く土師器鉢である。口縁部の一部を欠く以外は完存している。口径14.9cm、器高7.5cmを測る。体部外面は底部がヘラケズ

リの他はナデ調整を行う。色調は橙色で胎土は精良である。67・68は土師器甕で口縁部の一部を欠く以外は完存している。67が小形、68が中形である。67が口径12.3cm、器高12.8cm、68が口径14.5cm、器高16.6cmを測る。



第45図 S K 221平面面図

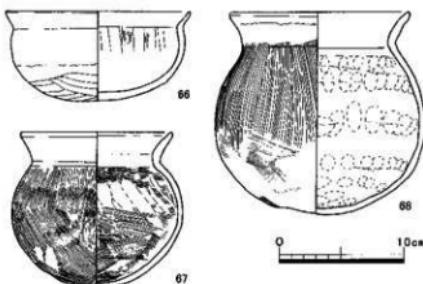


第46図 S K 222平面面図

体部外面の器面調整は共に上位から中位にかけて縦方向、中位以下は左上りのハケ調整を施す。内面はハケを多用する67と指頭圧痕を残す68がある。色調は67が赤褐色、68が褐灰色である。68には角閃石が多量に含まれている。帰属時期は3点共に6世紀後半が推定される。

S K 223

23調査区の中央部、Ⅶ-14-1 E 地区で検出した。S D 263の南東端を切っている。平面形は東西に長い楕円形で長径0.8m、短径0.7mを測る。断面は逆台形を呈



第47図 S K 222出土遺物実測図

し、埋土は1層2.5Y5/3黄褐色中疊混シルト、2層2.5Y5/2暗灰黄色シルト（鉄分を含む）、3層5Y5/2灰オーリープ色粗粒砂混粘土質シルト、4層2.5Y5/3黄褐色シルトの4層から成る。遺物は出土していない。

S K 224

23調査区中央部のⅦ-14-1 E 地区で検出した。S E 205とS D 265を切っている。平面形は南北に長い不整形で長径約0.6m、短径約0.5mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は上から2.5Y5/3黄褐色中疊混粘土、10YR4/4褐色粘土質シルト（鉄分を多量に含む）、7.5Y5/2灰オーリープ色粘土質シルトの3層である。遺物は出土していないが、室町時代後半に比定されるS E 205を切ることから近世時期のものと推定され、上層から切り込む遺構の可能性が高い。

S K 225

23調査区南部のⅦ-14-1 E 地区で検出した。南部分は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅2.1m、南北幅0.5m、深さ0.55mを測る。断面は長方形を呈する。埋土は5層に分層が可能である。遺物は出土していない。

S K 226

23調査区南部のⅦ-14-1 E 地区で検出した。S K 225の北東に隣接している。平面形は東西に長い楕円形で長径0.6m、短径0.4m、深さ0.18mを測る。断面は楕形を呈し、埋土は2.5Y5/4黄褐色粗粒砂混シルト（鉄分を含む）、2.5Y5/2暗灰黄色中疊混シルト、2.5Y5/3黄褐色粘土質シルトの3層から成る。遺物は出土していない。

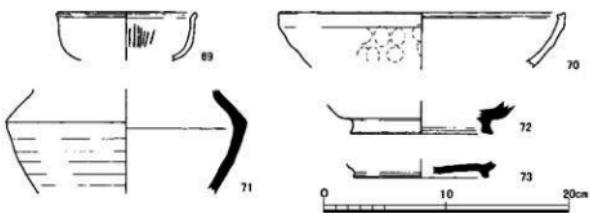
S K 227

25調査区北西部のⅦ-14-3 D 地区で検出した。北部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅2.3m、南北幅1.2m、深さ0.36mを測る。断面は逆台形を呈し、短時間の埋め戻しが想定される互層を主体とする3層が堆積している。遺物は出土していない。

S K 228 (第48図、図版六〇)

25調査区北部のⅦ-14-4 D 地区で検出した。東西方向に長い楕円形の掘方を呈するもので、北部でS D 282、南部でS D 276・S K 230を切っている。長径2.8m、短径2.0m、深さ0.4mを測る。埋土は中粒砂～粗粒砂を主体とする4層から成る。遺物は古墳時代中期～平安時代前期に至

る土師器、須恵器、
黒色土器の小破片
が少量出土している。
5点(69~73)を図化した。
69はやや深めの体部を
持つ土師器杯Cの
小破片である。復
元口径11.3cmを測



第48図 S K 228遺物実測図

る。体部内面に放射状暗文が施文されているが、器面風化のため明瞭でない。色調は淡橙色。胎土は精良である。飛鳥時代前半のものか。70は鉄鉢形を呈する土師器鉢Aの小破片である。復元口径23.2cmを測る。色調は淡赤褐色。胎土は1mm大の長石粒が散見される。平安時代前期に比定される。71は肩部が稜角を成す須恵器の壺である。72・73は共に高台を有する須恵器の底部である。器種は72が壺、73が杯と推定される。色調は71・73が青灰色、72が灰色である。焼成は3点共に堅緻である。出土遺物には時期差があるが、70の土師器鉢Aからみて遺構の廃絶時期は平安時代前半が推定される。

S K 229

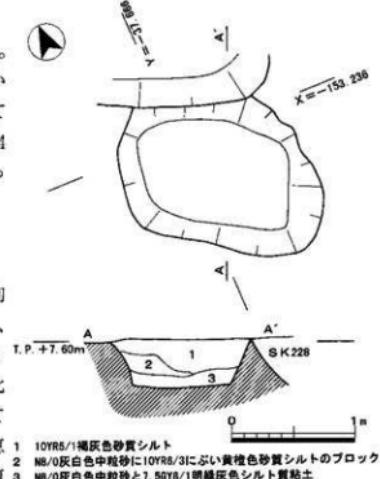
25調査区北部のVII-14-4 D地区で検出した。

S K 228の南西に隣接している。南北方向に長い
楕円形を呈するもので、南部でS D 283を切って
いる。規模は長径2.25m、短径1.9m、深さ0.44
mを測る。埋土は逆台形を呈する断面形状に沿っ
て4層が堆積している。遺物は出土していない。

S K 230(第49・50図)

25調査区北部のVII-14-4 D地区で検出した。

北端がS K 228に切られているが、概ね東西方向
に長い楕円形を呈する。検出部分で東西幅1.6m、
南北幅1.18m、深さ0.4mを測る。埋土は3層(1
~3層)から成る。遺物は古墳時代中期後半に比
定される土師器および須恵器の小破片が出土して
いる。須恵器杯身1点(74)を図化した。74は須恵
器杯身の小破片で、1/3程度が残存している。復
元口径10.7cm、復元受部径13.8cm、器高4.8cmを
測る。やや深味のある平底の底部から体部が内湾して伸び
るもので、受部は斜上方に短く伸びる。たちあがりは内傾
して直線的に伸び、口縁端部の内側に内傾する面を形成し
ている。色調は淡青灰色。焼成は堅緻である。T K 47型式
(5世紀末)に比定される。



第49図 S K 230平面断面図



第50図 S K 230出土遺物実測図

S K 231 (第51・52図)

25調査区中央部のⅧ-14-4 C・D地区で検出した。S K 229の南側に近接する。円形を呈するもので、長径1.4m、短径1.3m、深さ0.3mを測る。埋土は4層(1～4層)から成る。遺物は古墳時代中期～後期に比定される土師器、須恵器、製塙土器等の小破片と底部に張り付く形で板材が1点出土している。土師器高杯1点(75)を図化した。75は杯部および裾部を欠く。器面調整は、柱状部外面の縦方向のナデが確認できる以外は、全体に風化のため不明瞭である。杯部と脚柱部との接合に際しては、杯部側に突出部分を設け、それに脚柱部の上端を挿入する方法が取られている。色調は赤褐色。胎土中に1～2mm大の長石、チャート粒が多く含有している。5世紀代のものか。

S K 232

25調査区中央部のⅧ-14-5 C・D地区で検出した。一部、S D 284の南部を切っている。円形を呈するもので、長径2.1m、短径2.0m、深さ0.47mを測る。埋土は5層から成る。遺物は出土していない。

S K 233

25調査区南西部のⅧ-14-5 C地区で検出した。隅丸方形を呈するもので、長辺0.95m、短辺0.8m、深さ0.18mを測る。埋土は3層から成る。遺物は土師器の小破片が極少量出土しているのみで、時期等は明確でない。

S K 234

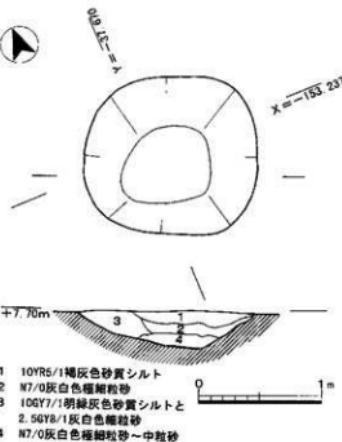
25調査区南部のⅧ-14-5 C地区で検出した。S K 232の南側に位置している。東西方向に長い楕円形を呈するもので、長径2.5m、短径1.8m、深さ0.56mを測る。埋土は5層から成る。遺物は土師器羽釜および須恵器杯身の小破片が少量出土している。帰属時期は概ね奈良時代と推定される。なお、南端中央部から南側に伸びるS D 277が伸びており、この遺構に付随するものと推定される。

S K 235

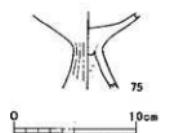
25調査区南東部のⅧ-14-5 D地区で検出した。S D 278の東部に位置する。方形を呈するもので、東端は道路状遺構201と接している。長辺1.9m、短辺1.2m、深さ0.17mを測る。埋土は2層から成る。遺物は土師器、須恵器、平瓦片が極少量出土している。時期的には江戸時代のもので農耕に関連した遺構と推定される。

S K 236 (第53・54図、図版一九)

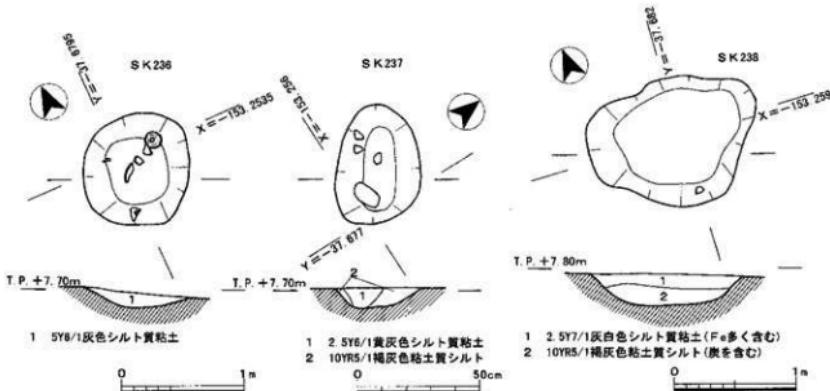
26調査区北西部のⅧ-14-6 C地区で検出した。円形の掘方を呈するもので径0.85m、深さ0.2mを測る。埋土は5Y6/1灰色シルト質粘土の単一層である。遺物は奈良時代中期に比定される土



第51図 S K 231平面図



第52図 S K 231出土遺物実測図

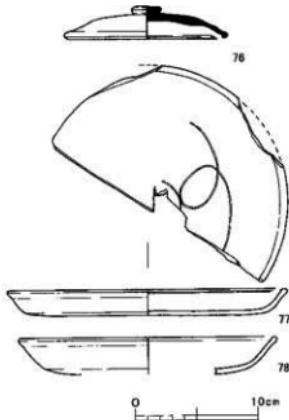


第53図 S K 236~S K 238平面面図

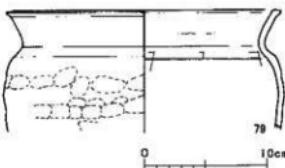
器類が少量出土している。3点(76~78)を図化した。76は擬宝珠つまみが付く、須恵器杯B蓋で完形品である。口径12.8cm、器高2.7cm、つまみ径2.3cmを測る。色調は青灰色で焼成は堅緻である。奈良時代中期のものか。77は土師器皿Aで約1/2が残存している。復元口径22.8cm、器高2.1cmを測る。見込みに螺旋暗文が施されている。78は土師器杯Aの小破片である復元口径20.8cmを測る。77・78共に略年代が760年とされる平城宮土器IVに比定される。

S K 237 (第53・55図、図版六一)

26調査区北西部のVII-14-6 C地区で検出した。梢円形の掘方を呈するもので、長辺0.55m、短辺0.35m、深さ0.08mを測る。埋土は2.5Y6/1黄灰色シルト質粘土と10YR5/1褐灰色粘土質シルトの2層から成る。遺物は奈良時代末~平安時代初頭を中心とする土師器が極少量出土している。土師器壺A 1点(79)を図化した。79は口縁部の1/4程度が残存している。復元口径22.4cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ。体部外面は指頭圧成形による指頭圧痕が顕著で凹凸が著しい。内面体部上位に一本の沈線が水平方向に伸びる。色調は褐灰色である。胎土はやや粗く0.5~1mm大の長石を多く含む。遺構の帰属時期は奈良時代末~平安時代初頭が推定される。



第54図 S K 236出土遺物実測図



第55図 S K 237出土遺物実測図

S K 238

26調査区北西部のⅦ-14-6 B地区で検出した。不整方形の掘方を呈するもので長辺1.2m、短辺1.1m、深さ0.25mを測る。埋土は2.5Y7/1灰白色シルト質粘土と10YR5/1褐色粘土質シルトの2層の他、検出面の西側に炭層の広がりが認められた。遺物は奈良時代～平安時代に比定される土師器、須恵器の小破片が極少量出土している。

S K 239

26調査区南西部のⅦ-14-8 B地区で検出した。円形を呈するもので、径0.5～0.65m、深さ0.08mを測る。埋土は5Y5/1灰色シルト質粘土と5Y6/2灰オリーブ色粘土質シルトの2層である。遺物は出土していない。

S K 240

26調査区北東部のⅦ-14-6 D地区で検出した。東部を側溝で欠くがほぼ円形を呈するものと推定される。検出部分で東西幅0.71m、南北幅0.48m、深さ0.1mを測る。埋土は2.5Y7/1灰白色シルト質粘土の単一層である。遺物は平安時代前期に比定される土師器片が極少量出土している。

S K 241

26調査区南東部のⅦ-14-7 C地区で検出した。東～西に長い楕円形を呈するもので、長径0.7m、短径0.3m、深さ0.05mを測る。埋土は2.5Y7/1灰白色シルト質粘土の単一層である。遺物は出土していない。

S K 242

26調査区南東部のⅦ-14-7 C地区で検出した。東～西に長い楕円形を呈する。長径1.0m、短径0.85m、深さ0.16mを測る。埋土は5Y5/1灰色シルト質粘土の単一層である。遺物は出土していない。

S K 243

26調査区南東部のⅦ-14-8 C地区で検出した。円形を呈するもので、径0.6m、深さ0.14mを測る。埋土は5Y5/1灰色シルト質粘土の単一層である。遺物は出土していない。

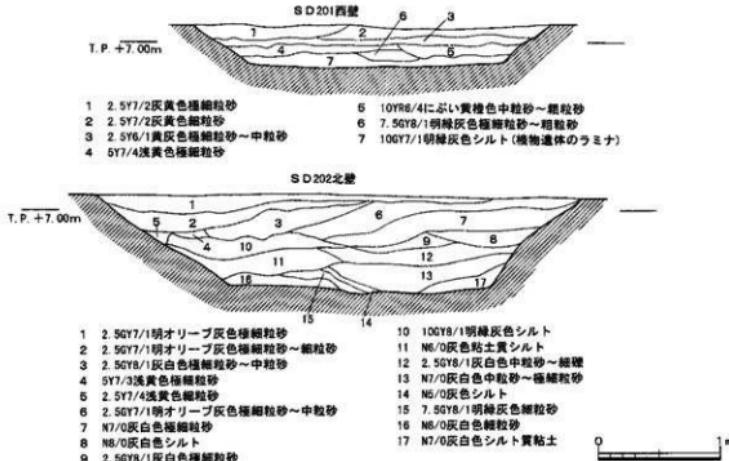
溝（S D）

S D 201（第56図）

14調査区西端のⅧ-1-8 C、9 C・D地区で検出した。南～北に伸びるもので、検出長4.7m、幅1.0～1.9m、深さ0.34mを測る。埋土は、最下層に植物遺体を含む明緑灰色シルトが堆積している他は、極細粒砂～粗粒砂を主体とする地層が逆台形を呈する断面形状に沿って堆積している。遺物は出土していない。

S D 202（第56図）

14調査区西部のⅧ-1-8・9 D地区で検出した。S D 201の東に約1.2mの間隔を持ち並列に伸びるもので、南端は擾乱により削平を受けている。検出長6.0m、幅1.9～3.5m、深さ0.78mを測る。埋土は逆台形を呈する断面形状に沿ってシルト～極粗粒砂で構成される17層が堆積している。遺物は弥生土器、土師器、須恵器の小破片が少量出土している。そのうち、最も新しいものは古墳時代中期に比定されるが、構築面が奈良時代の包含層を切ることから、道構の帰属時期は奈良時代より下る時期のものと推定される。



SD 203

14調査区東部のVII-1-9E地区で検出した。南-北に伸びるもので、南部で土器棺墓302を切っている。検出長6.8m、幅0.5~0.9m、深さ0.45mを測る。埋土は上層の2.5GY6/1オリーブ灰色粘土質シルトと下層のN5/0灰色粘土質シルトの2層から成る。遺物は出土していない。

SD 204

15調査区東部のVII-1-10H、VII-6-1H・I地区で検出した。北西-南東に直線的に伸びる溝である。検出長6.0m、幅0.6m、深さ0.01mを測る。断面は浅い皿形を呈し、埋土は7.5Y4/1灰色粘土の単一層である。溝底にはヒトの足跡が数点認められた。遺物は出土していない。

SD 205

17調査区北部のVII-8-5A地区で検出した。南-北に伸びるもので、SK207を切っている。検出長1.95m、幅1.4m、深さ0.38mを測る。埋土は砂質シルトを主とする3層から成る。遺物は土師器、須恵器の小破片が少量出土したが時期を明確にし得るものはない。

SD 206

18調査区西南部のVII-8-6・7C地区で検出した。北西-南東に伸びる幅広の溝である。検出部分で幅2.5m、深さ0.4mを測る。埋土は粘土質シルトを主体とする3層からなる。遺物は奈良時代とみられる土師器、須恵器片が少量出土した。

SD 207~SD 238

SD 207~SD 238は18~19調査区にかけて検出された溝群である。東-西に直線的に伸びるSD 207~SD 213を除けば北東-南西に伸びるもののが大半を占める。規模はSD 215・SD 224・SD 230・SD 232・SD 234・SD 235が幅1.0~3.5mを測る以外は0.2~0.7mを測る。断面形状は「U」字形を呈するものが大半で、深さ0.1~0.3mを測る。遺物としては、各溝内から奈良時代~近世にかけての土師器、須恵器、瓦質土器、国産陶磁器の小片が少量出土している。また、S

D230内からは長さ0.15m、幅0.08m、厚さ0.03m未加工の石材が1点出土している。S D207～S D238は、本調査区の北側(現在、JR線路下)で実施された久宝寺遺跡第4次調査(KH90-4)においても、同じレベルで平安時代中期を中心とする溝群が検出されており、性格としては農耕に関連した溝と推定される。法量および詳細については、第9表の一覧表にまとめた。

第9表 S D207～S D238法量表(単位m)

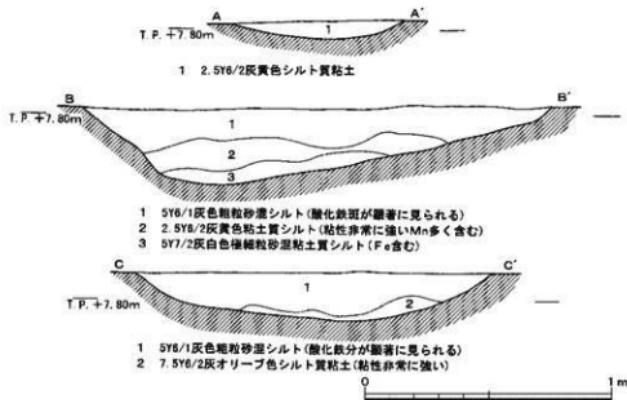
遺構名	地 区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D207	Ⅶ-8-6D	1.22	0.30	0.20	7.5Y6/1灰色粘土質シルト	土師器・須恵器
S D208	Ⅶ-8-6E	0.93	0.30	0.10	2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土	土師器
S D209	Ⅶ-8-6E	1.47	0.30	0.10	タ	
S D210	Ⅶ-8-7D-E	5.05	0.50	0.10	10YR6/1褐色灰色粘土	
S D211	Ⅶ-8-7D	8.20	0.70	0.15	タ	土師器
S D212	タ	4.00	0.40	0.20	タ	上簡器
S D213	タ	8.90	0.70	0.20	タ	須恵器
S D214	Ⅶ-8-6C	2.75	0.30	0.15	タ	土師器
S D215	Ⅶ-8-6D-7C	6.60	1.30	0.20	タ	瓦質・国産陶磁器
S D216	Ⅶ-8-6D	6.64	0.70	0.20	タ	土師器・須恵器・屋瓦
S D217	タ	4.64	0.70	0.20	2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土	
S D218	タ	4.30	0.40	0.20	タ	土師器・須恵器
S D219	タ	3.98	0.60	0.20	タ	
S D220	タ	2.60	0.50	0.15	タ	
S D221	タ	3.78	0.50	0.20	タ	須恵器
S D222	タ	3.52	0.30	0.20	タ	土師器
S D223	Ⅶ-8-6E-7D-E	4.42	0.40	0.20	タ	土師器・須恵器
S D224	Ⅶ-8-6E	6.84	1.20	0.30	タ	土師器・須恵器
S D225	Ⅶ-8-7E	5.00	0.80	0.25	7.5Y6/1灰色粘土質シルト 7.5Y5/1灰色粘土質シルト	土師器・須恵器・屋瓦・ 国産陶磁器
S D226	タ	6.42	0.50	0.25	2.5G6/1オリーブ灰色シルト質粘土	土師器・石材
S D227	タ	6.50	0.60	0.10	タ	土師器・須恵器
S D228	タ	6.50	0.20	0.10	タ	土師器・須恵器
S D229	タ	6.50	0.40	0.15	タ	土師器・須恵器
S D230	タ	6.50	1.00	0.15	タ	土師器・須恵器・屋瓦
S D231	Ⅶ-8-7F	3.00	0.50	0.10	5Y5/1灰色シルト質粘土	上簡器・須恵器・黒色土器
S D232	Ⅶ-8-7E-F	6.04	3.50	0.10	タ	土師器・須恵器・石材
S D233	Ⅶ-8-7F	5.20	0.50	0.10	2.5G6/1オリーブ灰色シルト質粘土	土師器・屋瓦
S D234	Ⅶ-8-7F-F	6.64	0.80	0.20	タ	土師器・須恵器・屋瓦
S D235	タ	6.74	1.50	0.10	5Y5/2灰オリーブ色シルト質粘土	土師器・須恵器・屋瓦
S D236	Ⅶ-8-7F-G	3.40	0.40	0.15	タ	土師器
S D237	Ⅶ-8-7G-8F-G	6.60	0.30	0.10	タ	須恵器
S D238	Ⅶ-8-7G	6.60	0.40	0.10	5Y6/2灰オリーブ色シルト質粘土	土師器・須恵器

S D239

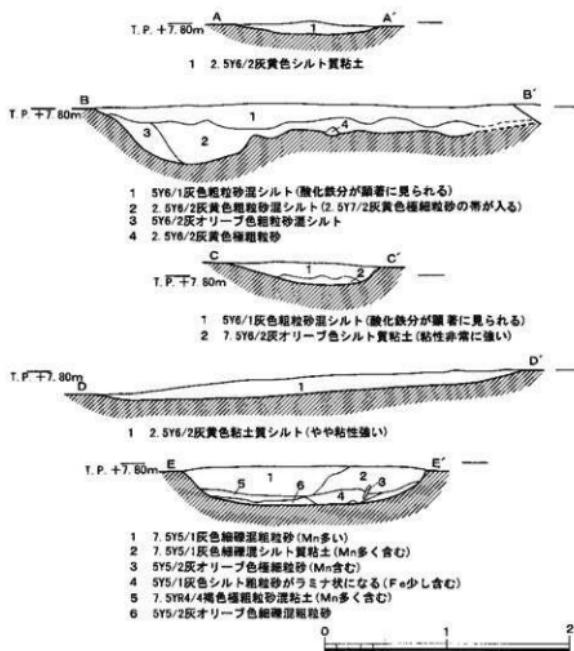
20調査区北東部のⅦ-8-8 I地区で検出した。東-西に伸びるもので、北肩は調査区外に至る。検出部分で検出長3.0m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。埋土は2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土である。遺物は出土していない。

S D240 (第57図)

20調査区北部から21調査区北部にかけて東-西に伸びる。21調査区内ではS E204に切られている。検出長38.0m、幅0.35～2.40m、深さ0.07～0.25mを測る。東西端の高低差は0.14mで、西端が低いため東から西への流路が推定される。遺物は古墳時代前期～平安時代後期に至る土師



第57図 S D 240断面図



第58図 S D 242断面図

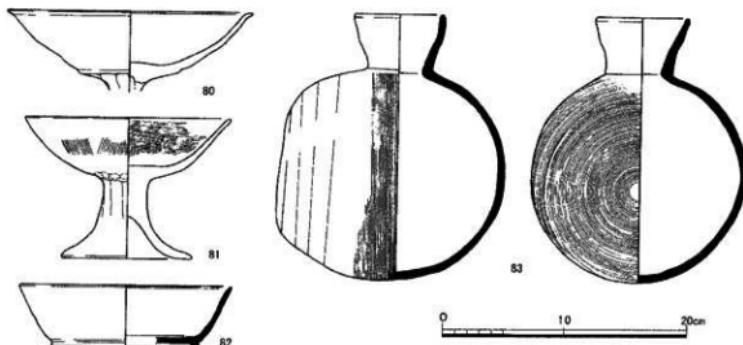
器、須恵器、黒色土器、屋瓦片が多量に出土しているが、いずれも細片化したものが大半を占めている。

S D241

20調査区北西部から21調査区西部にかけて東一西に伸びるもので、東端はS D242と合流している。検出長27.5m、幅0.70~1.20m、深さ0.09~0.14mを測る。東西端の高低差は0.25mで西が低い。埋土は2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土。遺物は奈良時代を中心とした土師器、須恵器、屋瓦が出土しているが全て小破片で図化できたものはない。

S D242 (第58・59図、図版六一)

20調査区北西部から23調査区の南西部にかけてほぼ東一西に伸びるもので、22・23調査区にかけては部分的に蛇行する部分が認められた。各構造との関係では、21調査区西部でS D241、22調査区西部でS D240と合流し、20調査区ではS D243を切り、23調査区ではS E205に切られている。検出長78.0m、幅0.4~3.08m、深さ0.14~0.32mを測る。流路の方向は東から西である。埋土は粗粒砂混シルト質粘土～極細粒砂である。遺物は、飛鳥時代～奈良時代前期に比定される土師器、須恵器が少量出土している。4点(80~83)を図化した。80・81は土師器高杯である。80は高杯Bで杯部下半に明瞭な稜を形成するもので、脚柱部外面には面取りが行われている。口径20.0cmを測る。色調は赤褐色で胎土は水窓された粘土が使用されている。飛鳥時代前半のものか。81は図上で完形に復元が可能である。口径16.6cm、器高11.6cm、裾部径10.6cmを測る。杯部の器面調整は外側が縦方向、内面が横方向のハケであるが全体に風化が著しく不明瞭である。色調は淡褐色である。80より古い様相を持つものと考えられるが時期は概定できない。82は須恵器杯Bである。復元口径12.5cm、高台径12.1cmを測る。色調は青灰色で焼成は堅緻である。83は須恵器の横瓶である。口縁部の一部を欠く以外は完存している。口径7.4cm、器高22.1cm、体部最大径18.2cmを測る。横方向に張り出す体部の一部が丸く、その反対側が平坦な面を持っている。体部の中央から丸味のある体部端に向かって縦方向のカキ目が施されている。色調は淡灰色で焼成は堅緻である。奈良時代前期のものか。出土遺物からみて、溝の廃絶時期は奈良時代前期が推定される。



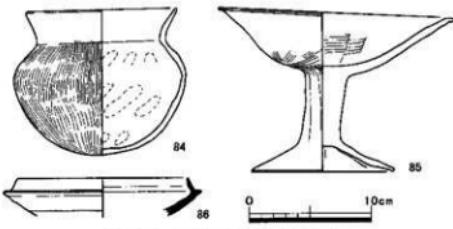
第59図 S D242出土遺物実測図

S D 243 (第60図、図版六一)

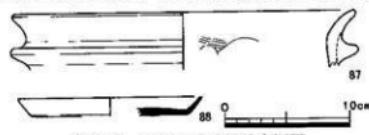
20調査区中央部を東-西に伸びる溝で西端が2条に分流している他、東端はS D 242に切られている。検出長20.5m、幅0.2~1.0m、深さ0.03~0.09mを測る。埋土は2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土である。遺物は、古墳時代後期~飛鳥時代に比定される土師器、須恵器が少量出土している。土師器2点(84・85)と須恵器1点(86)の3点を国化した。84は土師器小形壺である。ほぼ完形で口径12.2cm、器高12.0cmを測る。器面調整は体部から底部外面にかけて縱方向の密なハケ調整が施されている。黒斑が体部外面の中位に1箇所認められる。色調は赤橙色。85は土師器高杯で脚部の一部を欠く以外は完存している。口径19.3cm、器高13.3cm、裾部径11.7cmを測る。脚柱部は直線的で中実である。杯部の下半部分にやや粗目のハケ調整が行なわれている。色調は橙色である。86は須恵器杯身の小破片である。色調は灰白色で焼成は堅緻。MT 85型式(6世紀後半)に比定される。最も新しい時期の出土遺物から勘案して、飛鳥時代前半までは溝としての機能があったようである。

S D 244~S D 255 (第61・62図、図版六一)

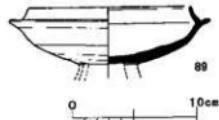
20調査区で検出した小溝群である。東-西に伸びる4条(S D 244~S D 247)と南-北に伸びる8条(S D 248~S D 255)がある。規模はS D 248を除けば幅0.22~0.90m、深さ0.03~0.12mを測る。南-北に伸びる溝については、全て飛鳥時代前半に比定されるS D 243に切られていることから、それ以前の構築が考えられる。遺物はS D 244・S D 248(87・88)・S D 249・S D 254・S D 255(89)から古墳時代後期~平安時代に比定される土師器、須恵器の小破片が出土している。87・88はS D 248から出土したものである。87は土師器羽釜の小破片である。口縁部は短く水平方向に張り出し鉤の上部から外反して伸びる。復元口径27.8cmを測る。色調は赤褐色である。胎上はやや粗く長石・角閃石・黒雲母が散見される。河内産である。88は須恵器皿Aである復元口径15.3cmを測る。色調は青灰色で焼成は堅緻である。奈良時代後半の所産である。出土遺物からS D 248の帰属時期は奈良時代後半が推定される。須恵器高杯1点(89)はS D 255から出土したものである。89は有蓋高杯で脚部を欠く。杯部は約1/2残存しており口径13.3cmを測る。色調は青灰色である。焼成は堅緻で杯部外面に灰かぶりが認められる。6世紀後半の所産である。なお、S D 244~S D 255の法量・詳細等は第10表に示した。



第60図 S D 243出土遺物実測図



第61図 S D 248出土遺物実測図



第62図 S D 255出土遺物実測図

第10表 S D 244～S D 255法量表(単位m)

遺構名	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋土	出土遺物
S D 244	VII-8-8H	13.62	0.30	0.06	5Y6/2灰オーブ色細縞混砂質土	土師器・黒色土器
S D 245	タ	0.80	0.22	0.05	タ	
S D 246	タ	1.26	0.23	0.05	タ	
S D 247	VII-8-8G	2.50	0.50	0.07	タ	
S D 248	VII-8-8H	3.60	0.90	0.10	タ	
S D 249	タ	0.82	0.25	0.10	タ	土師器・須恵器
S D 250	タ	3.20	0.35	0.07	タ	土師器
S D 251	タ	3.00	0.30	0.06	タ	
S D 252	タ	2.90	0.30	0.03	タ	
S D 253	VII-8-8GI	2.20	0.60	0.12	タ	
S D 254	VII-8-9I	1.60	0.40	0.09	タ	
S D 255	タ	1.42	0.40	0.10	タ	土師器・須恵器

S D 256

21調査区北東部のVII-9-A・B地区で検出した。東-西に伸びるもので、検出長10.6m、幅0.85m、深さ0.2mを測る。埋土は5Y6/1灰色粗粒砂混シルトである。遺物は出土していない。

S D 257～S D 259

22調査区で検出した。いずれも南-北に直線的に伸びている。S D 258はS D 242によって切られS D 259はS D 242を切っている。なお、S D 257・S D 258については、S B 202に付随していることから、建物に伴う雨落ち溝の可能性がある。遺物はS D 257～S D 259から、奈良時代～平安時代にかけての土師器の小片が少量出土している。

第11表 S D 257～S D 259法量表(単位m)

遺構名	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋土	出土遺物
S D 257	VII-9-10C	1.14	0.30	0.13	N6/0灰色シルト質粘土	土師器
S D 258	タ	1.90	0.30	0.16	タ	土師器・須恵器
S D 259	VII-9-10D、 VII-14-1D	7.14	0.80	0.15	タ	土師器

S D 260～S D 262

23調査区北西隅部分のVII-9-10D・E地区で検出した。東-西に伸びる溝群である。各溝は約0.1mの間隔を有し並行に伸びる。法量は長さ1.3～3.7m、幅0.2～0.29m、深さ0.04～0.11mを測る。断面は皿形を呈し、埋土は、S D 260とS D 261が7.5Y5/2灰オーブ色細縞混シルト粘土、S D 262が7.5Y4/4褐色細縞混粘土である。遺物はS D 261から飛鳥時代～奈良時代の土器片が極少量出土したのみである。遺構の性格としては、農耕に伴う可能性が高い。

第12表 S D 260～S D 262法量表(単位m)

遺構名	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋土	出土遺物
S D 260	VII-9-10D-E	1.30	0.28	0.04	7.5Y5/2灰オーブ色細縞混シルト質粘土	
S D 261	タ	2.20	0.20	0.04	タ	土師器・須恵器
S D 262	タ	3.70	0.29	0.11	7.5Y4/4褐色細縞混粘土	

S D 263

23調査区中央部のVII-9-10E、VII-14-1E地区で検出した北西-南東に伸びる溝である。遺構の南端はS K 223に切られている。検出部分で検出長3.2m、幅0.5m、深さ0.13mを測る。断面は楕円形を呈し、埋土は上から5Y6/2灰オーブ色中縞混シルト質粘土、5Y6/3オーブ黄色シ

ルト質粘土である。遺物は土師器の小破片が極少量出土している。

S D 264

23調査区東部のⅦ-14-1 E・F地区で検出した溝である。南肩が並行して伸びるS D 265に切られている。検出部分で検出長4.5m、幅0.5m、深さ0.07mを測る。埋土は5Y5/2灰オリーブ色粘土質シルトの單一層である。遺物は出土していない。

S D 265

23調査区南部のⅦ-14-1 D～F地区で検出した。東～西に直線的に伸びる溝でS E 205・S D 264・S D 269を切っている。検出長16.8m、幅1.0m、深さ0.2mを測る。埋土は5Y5/2灰オリーブ色細礫混粘土質シルトの單一層である。遺構内からは土器片が少量出土したもの、遺構の存続期間を示すものは含まれていないが、室町時代後期に比定されるS E 205を切ることからこれ以降の遺構と考えられる。

S D 266

23調査区東部のⅦ-14-1 E・F地区で検出した。東～西に直線的に伸びる溝で、西部がSK 225・S D 267・S D 268に切られている他、東部でS D 269を切っている。検出長4.5m、幅0.5m、深さ0.11mを測る。断面は楕円形で、埋土は5Y5/1灰色粘土質シルトの單一層である。遺物は土師器、須恵器片が極少量出土している。

S D 267

23調査区南部のⅦ-14-1 E地区で検出した。南～北に伸びる溝でS D 266を切っている。検出長1.0m、幅0.7m、深さ0.08mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は5Y5/2灰オリーブ色細礫混粘土質シルトの單一層である。遺物は出土していない。

S D 268

23調査区南西部のⅦ-14-1 E地区で検出した。S D 267の東側に約0.2m間隔を有して並行に伸びる。検出長1.0m、幅0.3m、深さ0.09mを測る。断面は楕円形で、埋土は、5Y5/2灰オリーブ色細礫混粘土質シルト、5Y5/2灰オリーブ色粘土質シルトの2層に分かれ。遺物は出土していない。

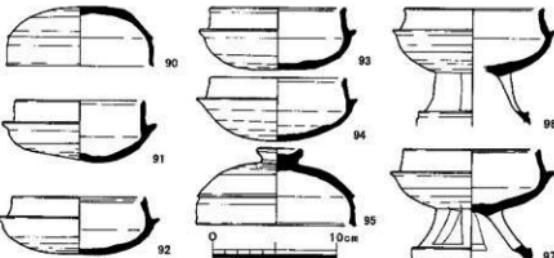
S D 269

23調査区の東端のⅦ-14-1 F地区で検出した。南～北に伸びる溝で、S D 264～S D 266に切られている。東肩が調査区外に至るために全容は不明であるが、検出部分で検出長4.0m、幅1.5m、深さ0.1mを測る。埋土は5Y5/1灰色細礫混粘土質シルトの單一層である。遺物は土師器、須恵器片が極少量出土している。

S D 270 (第63・65図、図版六一・六二)

24調査区北西部のⅧ-14-1・2 D地区で検出した。S P 2129およびS P 2116に切られている。北西～南東に伸びるもので、検出長6.3m、幅1.8～2.5m、深さ0.24mを測る。埋土は3層(1～3層)が断面形状に沿って水平に堆積している。遺物は1・2層から古墳時代中期後半を中心とする土師器片の他、完形品を含む須恵器類が少量出土している。須恵器8点(90～97)を図化した。90は須恵器杯蓋で、完形品である。口径12.0cm、器高4.9cm、縁径11.8cmを測る。天井部から口縁部にかけて自然釉が厚く附着している他、焼成時に溶着した須恵器片が認められる。色調は灰色。焼成は堅緻。TK 47型式に比定される。91～94は須恵器杯身で、91・93は完形、92・94は

3/4程度が残存している。法量は口径10.8~11.0cm、器高4.7~5.3cm、受部径12.5~13.1cmを測る。たちあがりの角度では、垂直方向に伸びる91の他は内傾して伸びる。色調は青灰色~灰白色で焼成は堅緻。型的には92~94に比して91が占い

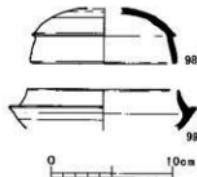


第63図 S D 270出土遺物実測図

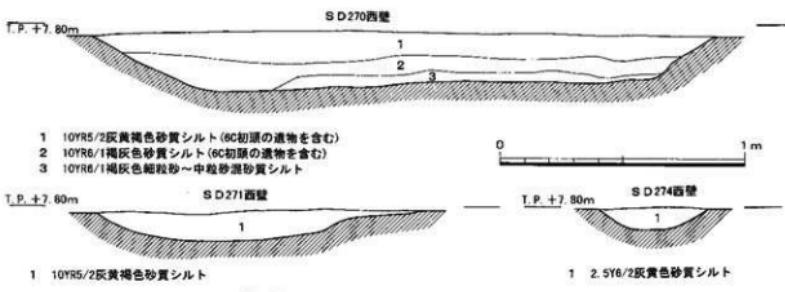
様相を示している。91がTK23型式、92~94がTK47型式にあたる。95は丸味のある天井部を持つ有蓋高杯の蓋で、口縁部を欠く以外は完存している。口径12.7cm、器高6.4cm、つまみ径3.7cm、つまみ高1.3cmを測る。天井部から口縁部にかけて灰かぶりが認められる。色調は青灰色。焼成は堅緻。96・97是有蓋高杯である。97は裾部の一部を欠く以外は完存、96は1/4程度が残存している。97は口径11.2cm、器高9.3cm、裾部径9.4cmを測る。裾部の形態は全体に丸味を持つ97と端部の上部が斜上方に張り出し側面に段を有する96がある。型的には97が古くTK208型式、96がTK23型式にあたる。遺構の帰属時期は古墳時代中期末が推定される。

S D 271 (第64・65図)

24調査区中央部のVII-14-2・3 D・E地区で検出した。北西~南東に伸びるもので、西部がS K106、中央部がS P2118に切られている。検出長7.4m、幅1.0~1.3m、深さ0.12mを測る。埋土は10YR5/2灰黄褐色砂質シルトの単一層である。遺物は古墳時代中期から後期中葉に至る土師器、須恵器の小破片が少量出土している。須恵器2点(98・99)を図化した。98は須恵器杯蓋の破片である。1/4程度が残存している。復元口径11.9cmを測る。色調は青灰色。天井部を中心に灰かぶりが認められる。焼成は堅緻。TK47型式に比定される。99は須



第64図 S D 271出土遺物実測図



第65図 S D 270、S D 271、S D 274断面図

恵器杯身の小破片である。たちあがりは内傾して伸びた後、口縁部付近で角度を垂直方向に変えるもので、端部は丸く終る。色調は青灰色。TK10型式にあたる。99の遺物から遺構の帰属時期は古墳時代後期中葉が推定される。

S D272

24調査区南部のⅦ-14-3 D・E地区で検出した。西部がS E207に切られている。北西-南東に伸びた後、調査区の西部で屈曲して南-北に流路を変えている。検出長19.2m、幅0.8~1.7m、深さ0.12mを測る。埋土は10YR5/2灰黄色砂質シルトの單一層である。遺物は須恵器片、国產陶磁器(唐津焼・瀬戸焼)碗、中国製青磁碗、屋瓦等の小片が出土している。時期的には中世末期~近世前半に比定されよう。

S D273

24調査区北東部のⅦ-14-2 E地区で検出した。S B203の東部から東に向かって直線的に伸びる小溝である。検出長7.9m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は10YR5/2灰黄色砂質シルトの單一層である。遺物は土師器羽釜、須恵器杯身の小片が極少量出土したが、時期を明確にし得るものはない。

S D274 (第65・66図)

24調査区東部のⅦ-14-2 E地区で検出した。S D273の南に位置し、「L」字状を呈する小溝である。検出部分で南北長3.4m、東西長3.8m、幅0.40m、深さ0.11mを測る。埋土は2.5Y6/2灰黄色砂質シルトの單一層である。遺物は古墳時代後期~飛鳥時代中葉に至る土師器、須恵器の土器片が極少量出土している。須恵器杯蓋1点(100)を固化した。100は口縁部にかえりを持つ須恵器杯蓋の小破片である。復元口径14.7cmを測る。天井部全体に灰かぶりが認められる。TK217型式にあたる。遺構の帰属時期は飛鳥時代中葉が推定される。

S D275

25調査区北西部のⅦ-14-3・4 C地区で検出した。北東-南西に伸びるもので、S D282・S D283を切っている。検出長9.0m、幅0.7m、深さ0.1mを測る。埋土は青灰色砂質シルトの單一層である。遺物は出土していない。

S D276

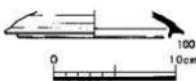
25調査区中央部のⅦ-14-4 D地区で検出した。北東-南西に伸びる小溝で北部がSK228に切られている。検出長0.7m、幅0.15m、深さ0.05mを測る。埋土は10YR5/1褐色砂質シルトの單一層である。遺物は出土していない。

S D277

25調査区南部のⅦ-14-5 C地区で検出した。SK234の南端から北東-南西に直線的に伸びる。検出長4.2m、幅0.3m、深さ0.05mを測る。埋土は10YR5/1褐色砂質シルトの單一層である。遺物は出土していないが、SK234に付随する遺構であるため、時期的には奈良時代が想定される。

S D278

25調査区中央~南部のⅦ-14-5 C・D地区で検出した。北東-南西に伸びるもので、北端は



第66図 S D274出土遺物
実測図

S D 284、南部は S E 209に切られている。検出長7.7m、幅0.69~1.2m、深さ0.25mを測る。埋土は上層の10YR5/1褐灰色砂質シルトと下層の2.5Y5/1黄灰色砂質シルトの2層から成る。遺物は土師器、須恵器の小破片が極少量出土しているが、時期を明確にし得たものはない。

S D 279

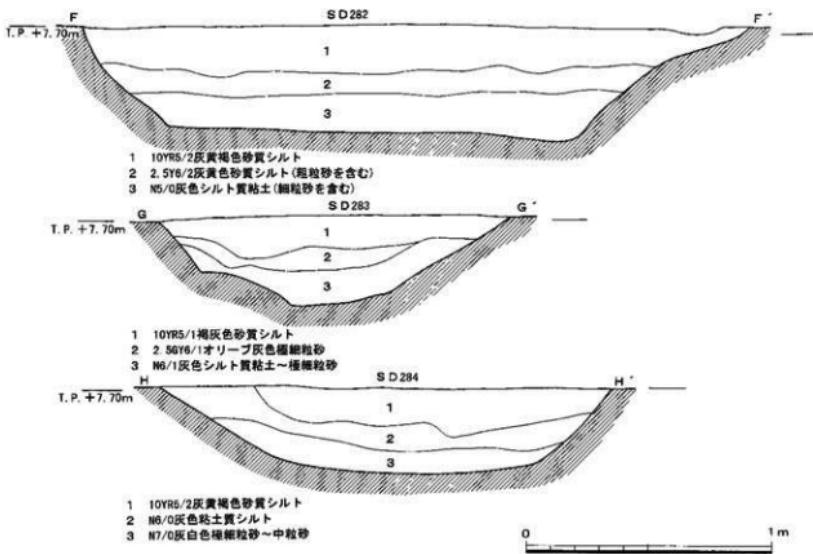
25調査区東部のⅦ-14-4 D・E、5 D地区で検出した。道路状遺構201の西側に付随して北東-南西に伸びるもので、S D 282・S D 283・S D 284を切って、S P 2132に切られている。検出長12.7m、幅0.9~1.1m、深さ0.09mを測る。埋土は10YR5/3に近い黄褐色砂質シルトの単一層である。遺物は古墳時代中期~後期に比定される土師器、須恵器等の小破片が出土地で出土しているが、切り合い関係から見てこれらの遺物が構築時期を示すものとは言い難い。

S D 280

25調査区東部のⅦ-14-4 D・E、5 D地区で検出した。道路状遺構201の東側に付随する溝で、性格的にはS D 279と同様である。S D 282・S D 283を切り、S E 208に切られている。検出長19.6m、幅0.7~0.9m、深さ0.15mを測る。埋土はシルトを主体とする3層から成る。遺物は土師器須恵器の小片が出土しているが、時期を明確にし得たものはない。

S D 281

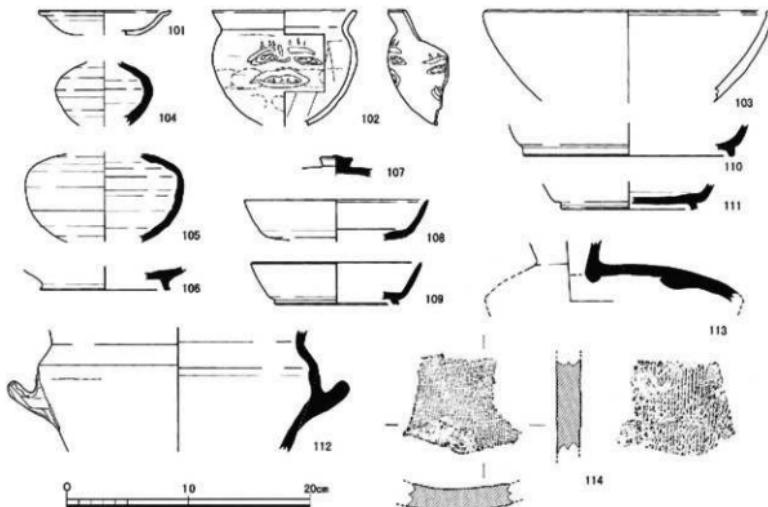
25調査区東部のⅦ-14-4 D・E、5 D地区で検出した。S D 280の東側に並行して南-北に伸びる。検出長10.4m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。埋土はシルトを主体とする3層から成る。遺物は出土していない。



第67図 S D 282~S D 284断面図

S D 282 (第67・68図、図版六二・六三)

25調査区北部のⅦ-14-3 C、4 C-E地区で検出した。北西-南東に伸びるもので、西端でS D 275、中央部でS K 228、東部でS D 279-S D 281・S E 208・道路状遺構201に切られている。検出長16.6m、幅1.7~3.3m、深さ0.44mを測る。埋土は逆台形の断面形状に沿って3層がほぼ水平に堆積している。遺物は古墳時代中期~平安時代中期に比定される土師器、須恵器の土器類の他、屋瓦等がコンテナ1箱程度出土しているが小片化したものが大半を占めている。14点(101-114)を図化した。101は「て」の字状口縁を有する土師器小皿である。復元口径10.8cmを測る。平安時代中期の所産である。102は墨書き人面が書かれている土師器の壺Aである。体部の約1/4が残存している。復元口径11.8cmを測る。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部は内面がナデ、外面には指頭圧痕が残る。色調は淡赤褐色。胎土中に1mm以下の長石が残る。墨書き人面は、残存部分では全容がわかる1面(A面)と、さらにその右側面に描かれた2面(B面)が確認できることから、本来は4面に描かれていたものと推定される。A面の墨書き人面は体部外面の中位から上部に描かれている。全体にやや雑な書き方で、各部位の表現は目について、左右共に黒目部分を点として描きその外側にアーモンド形の輪郭を描いている。眉は、内が太く外へ行くに従って細く表現されており、その上に綫方向に細く短い線で2~3本の睫毛が表現されている。鼻は、向かって左側に鼻筋が通る形で表現されている。口は、アーモンド形でやや大きめに表現されており、下から伸びる5本の歯が描かれている。B面は向かって左側の目、眉、口の約半分が残存している。時期的には奈良時代後半~平安時代初頭が考えられる。103は土師器鉢Aの小破片である。復元口径22.8cmを測る。色調は淡褐灰色。胎土は精良である。104・105は須恵器壺



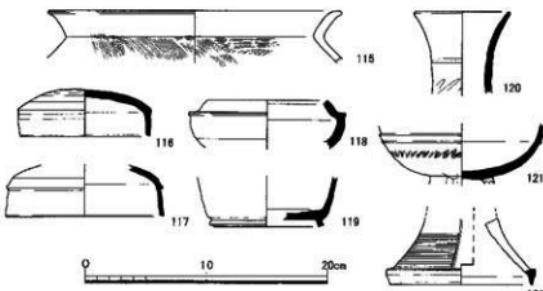
第68図 S D 282出土遺物実測図

の小片で共に口頸部を欠く。104の色調は灰白色である。105の色調は青灰色である。奈良時代後半のものか。106は壺底部の小破片である。「ハ」の字状に開く高台が付く。復元口径12.2cmを測る。107は有蓋高杯蓋のつまみ部分である。つまみ幅2.8cm、つまみ高0.8cmを測る。5世紀前半に比定される。108~111は須恵器杯身の小破片である。無高台の杯Aの108と高台が付く杯Bの109~111がある。112は把手の付く須恵器広口壺で口縁部と底部を欠く。色調は灰白色。胎土中に1~3mm大の長石、チャート粒が散見される。113は須恵器平瓶の上部付近の破片である。平瓶の上面および口縁部内面に自然釉が附着している。114は平瓦片である。凹面に布目、凸面に純タタキが施されている。出土遺物は時期幅があるが、101の土師器小皿からみて平安時代中期頃に廃絶したことが推定される。

S D283 (第67・69図、図版六三)

25調査区中央部のⅧ-14-4 C・D、5 D地区で検出した。調査区を北西-南東に横断してS D282の南側に並行して伸びるもので、S P2133~S P2135・S K229・S D279~S D281に切られている。検出長16.6m、幅0.9~1.4m、深さ0.36mを測る。埋土は3層(1~3層)で構成されている。遺物は古墳時代中期~奈良時代中期に至る土師器、須恵器の土器片が少量出土しているが、その大半が細片化したものである。8点(115~122)を図化した。115は土師器壺である。復元口径24.6cmを測る。色調は淡橙色。胎土中に0.5mm以下の大長石粒が多く含まれている。飛鳥時代前半のものか。116・117は須恵器杯蓋である。116は口縁部の一部を欠く以外は完存している。口径10.5cm、径11.0cm、器高4.0cmを測る。やや雑な作りで、全体に器縁が厚く重量感がある。その形態からみて、初期須恵器の範疇に含まれるものと推定される。117は口縁部の1/8が存在している。突出度が強い稜から口縁部がやや開き気味に直線的に伸びるもので、口縁端部は内傾し平坦面を作る。TK208型式(5世紀中葉)にあたる。118・119は須恵器杯身で、共に1/4程度が残存している。118は水平に小さく張り出す受部から、たちあがりが内傾して伸びるもので口縁端部は内傾して面を作る。体部は楕円形を呈するものと推定される。復元口径11.0cmを測る。色調は淡灰青色。焼成は堅緻である。形態の特徴からTK85型式(5世紀前半)前後の時期が推定される。119は高台が付く須恵器杯Bである。復元高台径9.4cmを測る。奈良時代中期のものか。120は須恵器細頸壺の口縁部付近の破片である。復元口径7.8cmを測る。頸部に1条の沈線が巡る。口縁部内外面の一部に灰かぶりが認められる。奈良時代前半か。121は須恵器無蓋高杯の破片である。体部と口縁部を画す

る2条の凸帯の下部に波状文が施文されている。古墳時代中期後半の所産である。122は須恵器高杯の脚部である。脚部外面にカキメ調整が行なわれている。古墳時代中期末の所産である。出土遺物には時



第69図 S D283出土遺物実測図

期幅が認められるが、最も時期の新しい遺物から勘案して、遺構の廃絶時期は奈良時代中期が推定される。

S D 284 (第67図)

25調査区中央部のVII-14-4 C・D、5 D地区で検出した。S D 283の南側に併行して伸びるもので、S P 2136を切っている他、S D 279・S D 280・道路状遺構201・S E 105に切られている。検出長16.5m、幅1.9m、深さ0.35mを測る。埋土は3層(1~3層)から成る。遺物は6世紀代に比定される土師器、須恵器の小片が少量出土している。

S D 285

25調査区中央部のVII-14-5 C・D地区で検出した。北西-南東に伸びる小溝で東端はS D 278を切っている。全長1.9m、幅0.25m、深さ0.1mを測る。埋土は10YR5/1褐色灰色砂質シルトの單一層である。遺物は出土していない。

S D 286

26調査区南西部のVII-14-7・8 B地区で検出した。北東-南西に直線的に伸びるもので、検出長6.12m、幅0.45~5.90m、深さ0.08mを測る。埋土は5Y7/3浅黄色シルト質粘土。遺物は土師器、須恵器の小破片が少量出土している。

S D 287 (第70図)

26調査区北部のVII-14-6・7 G地区で検出した。北東-南西に伸びるもので、北端がS E 209、南端がS O 201に切られている。検出長8.5m、幅0.60~8.50m、深さ0.06mを測る。埋土は2.5Y7/2灰黄色シルト質粘土。遺物は古墳時代後期~平安時代後半に比定される土器類の小破片が少量出土している。土師器小皿1点(123)を図化した。123は「て」の字状口縁を呈する土師器小皿で復元口径8.1cmを測る。11世紀後半から12世紀初頭に比定される。

S D 288

26調査区で検出したS D 287の東に近接して並行して伸びる溝である。道路状遺構201の西に付随するもので、北端がS E 209に切られている。検出長15.2m、幅0.60~14.4m、深さ0.07mを測る。埋土は2.5Y7/2灰黄色シルト質粘土である。遺物は古墳時代後期~江戸時代に比定される土師器、須恵器、屋瓦の小破片が少量出土している。北端がS E 209により削平を受けているが、25調査区で検出したS D 278と連続する可能性がある。

S D 289

26調査区で検出した道路状遺構201の東に付隨して北東-南西に伸びる溝である。北端がS E 209に切られている。検出長20.64m、幅2.20~2.70m、深さ0.16mを測る。埋土は2.5Y7/2灰黄色シルト質粘土。遺物は古墳時代後期~平安時代に比定される土師器、須恵器の小破片が少量出土している。北端がS E 209により削平を受けているが、25調査区で検出したS D 288と一連の溝であった可能性がある。

S D 290・S D 291、S D 293~2107 (第71図)

26調査区の東部で検出した小溝群である。北東-南西に伸びるS D 290・291以外は、北西-南東に伸びる。北西-南東に伸びるものは、大半が調査区外に至り詳細は不明であるが、検出部



第70図 S D 287出土遺物
実測図

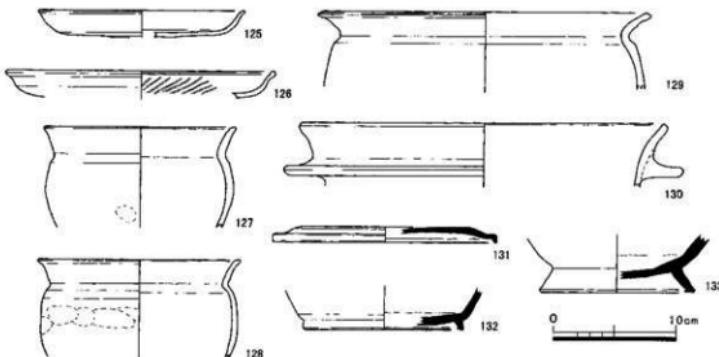
分で幅0.25~2.50m、深さ0.06~0.20mを測る。埋土は2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土の單一層である。遺物は奈良時代~平安時代を中心とする土器類が、S D294・S D295・S D297・S D299・S D2100・S D2104・S D2107から出土している。S D2107から出土した土師器皿A 1点(124)を図化した。124は口縁部の1/8程度の小破片で、復元口径17.2cmを測る。奈良時代後半に比定される。なお、26調査区南東部で検出されたS D292が奈良時代中葉と推定されることから、溝群はそれ以前のもので、農耕に関連した溝と推定される。

第13表 S D290・S D291・S D293~S D2107法量表(単位m)

遺構名	地 区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D290	VII-14-7C	4.40	0.25	0.10	2.5Y6/1黄灰色シルト質粘土	
S D291	VII-14-8C	2.60	2.50	0.07	タ	
S D293	VII-14-6D	1.40	0.25	0.04	2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土	
S D294	VII-14-6-7D	1.80	0.65	0.11	タ	土師器・須恵器
S D295	VII-14-7D	1.50	1.10	0.13	タ	土師器
S D296	VII-14-7C-D	1.70	0.50	0.13	タ	
S D297	タ	1.80	0.45	0.10	タ	土師器・須恵器
S D298	タ	2.20	0.40	0.10	2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土	
S D299	VII-14-7C	1.50	0.70	0.20	タ	土師器
S D2100	タ	2.24	0.30	0.10	タ	土師器
S D2101	タ	1.44	0.40	0.05	タ	
S D2102	タ	1.10	0.40	0.07	タ	
S D2103	タ	0.90	0.40	0.05	タ	
S D2104	VII-14-8C	2.02	0.30	0.07	タ	土師器
S D2105	タ	1.04	1.00	0.05	タ	
S D2106	タ	2.52	2.50	0.06	タ	
S D2107	タ	0.70	0.65	0.06	タ	土師器

S D292 (第72図、図版六四)

26調査区の南東隅で検出した。東~西に伸びるもので、S D2105~S D2107を切っている。検出長4.5m、幅1.8m、深さ0.33mを測る。埋土は2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土。遺物は奈良時代前~中期を中心とした土師器、須恵器、屋瓦の小破片が少量出土している。9点(125~133)を図



第72図 S D292出土遺物実測図

化した。125・126は土師器皿Aで共に小破片である。125が復元口径12.8cm、126が復元口径21.8cmを測る。126の体部内面に放射状のヘラミガキが認められる。127~129は土師器壺Aである。127・128が口径16cm前後の中形、129が口径26.3cmを測る大形品である。色調は127・129が赤褐色、128が褐灰色である。130は土師器羽釜の小破片である。復元口径29.3cmを測る。色調は褐灰色で胎土中に角閃石が含まれている。131は完形ならば擬宝珠の付く須恵器杯B蓋である。132は須恵器杯Bの小破片である。133は「ハ」の字に張る高台を有する須恵器壺と推定される。遺構の帰属時期は平城宮土器Ⅲ(730~750)に比定される。

小穴 (S P)

S P 201

15調査区北東部のVII-1-10H地区で検出した。南北に長い楕円形を呈するもので、長径0.28m、短径0.2m、深さは0.1mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は7.5Y4/1灰色粘土の単一層である。遺物は出土していない。

S P 202

17調査区北部のVII-8-5B地区で検出した。SK 208の東に接する。北部が調査区外に至る。検出部分で東西幅0.8m、南北幅0.5m、深さ0.2mを測る。埋土は上層の10YR5/1褐灰色砂質シルトと下層の10YR6/4にぶい黄褐色砂質シルトの2層から成る。遺物は平安時代後期に比定される土師器の小破片が極少量出土している。

S P 203~S P 210

S P 203~S P 210は、18調査区全域で散発的に検出された小穴で規則的に並ぶものはない。遺物は、S P 204・S P 206からは、奈良時代~平安時代前半の土師器、須恵器、黒色土器、屋瓦の小破片が少量出土している。各小穴の法量・詳細は第14表に示した。

第14表 S P 203~S P 210法量表(単位m)

遺構名	地 区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 203	VII-8-6C	楕円形	0.20	0.20	0.10	10YR5/1褐灰色シルト質粘土	
S P 204	*	不明	0.70	0.50	0.35	10YR5/1褐灰色粘土上 7.5YR4/2灰褐色粘土質シルト	土師器・黒色土器・ 須恵器・瓦
S P 205	VII-8-7C	△	0.60	0.40	0.20	5G6/1緑灰色粘土質シルト	
S P 206	VII-8-6D	円形	0.30	0.30	0.20	5Y6/1灰色シルト質粘土	土師器・須恵器・屋瓦
S P 207	VII-8-7D	△	0.40	0.40	0.15	2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土	
S P 208	VII-8-7E	△	0.40	0.30	0.20	5Y5/1灰色粘土質シルト	
S P 209	△	△	0.50	0.40	0.20	2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土	
S P 210	VII-8-7D	△	0.60	0.50	0.25	2.5Y7/1灰白色粘土質シルト	

S P 211~S P 222

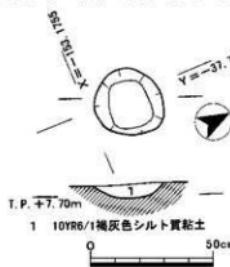
19調査区の全域にわたって散発的に検出されたもので、S P 214~S P 216が建物を構成する可能性がある以外は規則性を持たない。上面形状では、円形、楕円形、方形がある。規模は幅0.2~0.9m、深さ0.05~0.50mを測る。遺物は出土していない。S P 211~S P 222の法量等の詳細は、第15表に示した。

第15表 S P 211～S P 222法量表（単位m）

遺構名	地 区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 211	VII-8-7E	楕円形	0.30	0.20	0.10	5Y6/2灰オーリーブ色シルト質粘土	
S P 212	ク	円 形	0.20	0.20	0.15	ク	
S P 213	VII-8-7F	ク	0.40	0.40	0.05	ク	
S P 214	ク	方 形	0.60	0.50	0.10	5Y5/1灰色シルト質粘土	
S P 215	ク	楕円形	0.40	0.30	0.10	2.5Y6/1黄灰色シルト質粘土	
S P 216	ク	ク	0.50	0.30	0.25	5Y4/1灰色粘土質シルト	
S P 217	ク	方 形	0.60	0.60	0.20	2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土	
S P 218	ク	円 形	0.30	0.30	0.50	ク	
S P 219	ク	楕円形	0.50	0.40	0.30	5Y6/1灰色シルト質粘土	
S P 220	VII-8-7G	ク	0.90	0.80	0.30	ク	
S P 221	VII-8-8G	ク	0.40	0.30	0.05	ク	
S P 222	ク	ク	0.40	0.40	0.05	ク	

S P 223～S P 298（第73～75図）

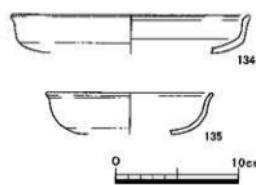
20調査区西部を中心に多数検出された小穴群で、特にVII-8-8 G・H地区で密集している。S P 234・S P 256・S P 259・S P 277・S P 289がS B201を構成する柱穴と想定される。それ以外にも、明確に確認できなかったが切り合い関係から数回程度の建て替えがあったとみられる。遺物は、奈良時代～平安時代頃とみられる土師器、須恵器が少量と周辺から安山岩2点が出土しており、これらの石材も建物の礎石に使用されたものと推定される。出土遺物のうち岡化できたものは、S P 241出土の土師器皿A 1点(134)とS P 252出土の土師器杯A 1点(135)である。134は土師器皿Aの小破片である。復元口径19.5cmを測る。色調は赤褐色である。奈良時代の所産であるが時期は限定できない。135は土師器杯Aの小破片である。復元口径13.4cmを測り、口縁端部内側に沈線が巡る。色調は灰褐色である。平城宮土器Ⅲに比定される。なお、各小穴の法量・詳細等は、第16表に示した。



第73図 S P 241平面図



第74図 S P 252平面図



第75図 S P 241(134)、S P 252(135)出土遺物実測図

第16表 S P 223～S P 298法量表（単位m）

遺構名	地 区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 223	VII-8-8G	楕円形	0.18	0.12	0.05	5Y5/2灰オーリーブ色シルト質粘土	
S P 224	ク	円 形	0.14	0.14	0.10	2.5Y6/2黄灰色シルト質粘土	土師器
S P 225	ク	楕円形	0.38	0.34	0.17	5Y5/2灰オーリーブ色シルト質粘土	土師器小皿(11C)-石材
S P 226	ク	円 形	0.20	0.18	0.07	ク	
S P 227	ク	ク	0.20	0.18	0.04	ク	

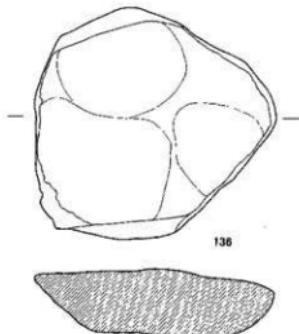
I 久宝寺遺跡第23次調査(K H 97-23)

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 228	Ⅶ-8-8G	楕円形	0.18	0.12	0.03	5Y5/2灰オリーブ色シルト質粘土	
S P 229	+	タ	0.18	0.14	0.10	10YR6/1褐灰色シルト質粘土	
S P 230	タ	円形	0.48	0.42	0.13	タ	土師器・須恵器
S P 231	タ	楕円形	0.36	0.24	0.06	タ	土師器
S P 232	Ⅶ-8-8H	タ	0.22	0.18	0.12	タ	土師器刷毛(11C)
S P 233	タ	円形	0.24	0.24	0.13	2.5Y6/3に赤い黄色シルト質粘土	土師器
S P 234	タ	楕円形	0.32	0.24	0.06	タ	S B201 須恵器
S P 235	+	円形	0.18	0.18	0.06	タ	
S P 236	タ	タ	0.18	0.16	0.07	タ	
S P 237	タ	タ	0.16	0.14	0.07	10YR6/1褐灰色シルト質粘土	
S P 238	Ⅶ-8-8G	タ	0.20	0.20	0.09	タ	
S P 239	タ	タ	0.21	0.20	0.09	タ	
S P 240	タ	タ	0.28	0.27	0.10	タ	土師器
S P 241	タ	タ	0.30	0.28	0.06	タ	土師器
S P 242	タ	タ	0.14	0.12	0.06	タ	
S P 243	Ⅶ-8-8H	タ	0.20	0.18	0.10	タ	土師器
S P 244	Ⅶ-8-8G	楕円形	0.28	0.26	0.07	タ	土師器
S P 245	Ⅶ-8-8G-II	タ	0.16	0.14	0.03	タ	
S P 246	Ⅶ-8-8H	円形	0.18	0.18	0.09	タ	
S P 247	タ	タ	0.24	0.24	0.17	タ	
S P 248	タ	タ	0.28	0.28	0.16	タ	土師器
S P 249	タ	タ	0.14	0.14	0.09	タ	
S P 250	タ	タ	0.16	0.14	0.11	タ	
S P 251	タ	楕円形	0.42	0.38	0.11	タ	
S P 252	タ	円形	0.18	0.16	0.05	2.5Y6/1黄灰色シルト質粘土	土師器杯A(平底式)
S P 253	タ	タ	0.21	0.19	0.15	2.5Y6/3に赤い黄色シルト質粘土	
S P 254	タ	タ	0.21	0.18	0.07	タ	
S P 255	タ	タ	0.20	0.18	0.10	タ	土師器
S P 256	タ	楕円形	0.62	0.52	0.12	タ	S B201 加彩器・土師器
S P 257	タ	円形	0.16	0.14	0.10	10YR6/1褐灰色シルト質粘土	
S P 258	タ	タ	0.22	0.22	0.20	タ	土師器
S P 259	タ	タ	0.52	0.44	0.05	タ	S B201 十輪器・須恵器
S P 260	タ	タ	0.20	0.20	0.15	タ	土師器
S P 261	タ	タ	0.24	0.24	0.09	タ	黑色土器A型楕(11C)
S P 262	タ	タ	0.28	0.28	0.08	タ	土師器
S P 263	タ	タ	0.21	0.20	0.09	2.5Y6/3に赤い黄色シルト質粘土	
S P 264	タ	タ	0.18	0.16	0.11	タ	
S P 265	タ	楕円形	0.26	0.22	0.09	タ	
S P 266	タ	タ	0.18	0.14	0.13	タ	
S P 267	タ	円形	0.20	0.20	0.07	タ	
S P 268	タ	タ	0.32	0.30	0.05	タ	土師器
S P 269	タ	タ	0.12	0.12	0.05	タ	
S P 270	タ	タ	0.14	0.14	0.04	タ	
S P 271	タ	タ	0.20	0.18	0.08	タ	
S P 272	タ	楕円形	0.31	0.20	0.06	タ	土師器
S P 273	タ	円形	0.22	0.22	0.09	タ	
S P 274	タ	タ	0.20	0.20	0.10	10YR6/1褐灰色シルト質粘土	
S P 275	タ	楕円形	0.18	0.14	0.04	タ	
S P 276	タ	タ	0.30	0.16	0.05	タ	須恵器(5C)
S P 277	タ	円形	0.42	0.40	0.17	タ	S B201
S P 278	タ	タ	0.16	0.14	0.20	タ	
S P 279	タ	タ	0.12	0.12	0.06	タ	
S P 280	タ	タ	0.12	0.12	0.07	タ	

遺構名	地 区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 281	VII-8-8H	稍凹形	0.26	0.20	0.05	2.5Y6/3にびい黄色シルト質粘土	土師器
S P 282	ク	ク	0.20	0.16	0.03	ク	
S P 283	ク	凸形	0.12	0.12	0.03	ク	
S P 284	ク	稍凹形	0.21	0.18	0.05	ク	
S P 285	ク	凸形	0.24	0.22	0.13	ク	
S P 286	ク	稍凹形	0.26	0.22	0.20	2.5Y6/2黄灰色シルト質粘土	
S P 287	ク	凸形	0.22	0.22	0.15	2.5Y6/3にびい黄色シルト質粘土	
S P 288	ク	ク	0.12	0.10	0.03	ク	
S P 289	ク	ク	0.18	0.16	0.09	ク	S B201
S P 290	ク	ク	0.28	0.28	0.07	ク	
S P 291	ク	稍凹形	0.30	0.18	0.11	ク	
S P 292	ク	ク	0.16	0.14	0.12	ク	
S P 293	ク	ク	0.31	0.24	0.13	ク	
S P 294	ク	凸形	0.14	0.14	0.06	2.5Y6/2黄灰色シルト質粘土	土師器・瓦器片(1C後半)
S P 295	ク	ク	0.21	0.20	0.10	2.5Y6/3にびい黄色シルト質粘土	
S P 296	VII-8-8I	稍凹形	0.32	0.28	0.12	ク	
S P 297	VII-8-9I	凸形	0.22	0.21	0.20	ク	
S P 298	VII-8-8I	ク	0.24	0.24	0.20	ク	

S P 299～S P 2103 (第76図、図版二〇)

22調査区の北部で検出した。S B202を構成する柱穴群である。S D242の北側を中心に位置する。平面形状はS P 2101以外が円形である。規模は幅0.2～0.5m、深さ0.2～0.4mを測る。柱穴の中央部に柱痕を残すものが多い。なお、S P 2100内に長さ0.2m、幅0.1m前後を測る柱根とその下部に、最大幅0.19m、厚さ0.05mを測る扁平な石材(カンラン石)を礎石(136)として設置している。遺物はS P 2101から土師器片、須恵器杯身(8世紀前半)、S P 2103から須恵器杯蓋(8世紀前半)が出土している。各柱穴の法量、詳細は、第17表に示した。



第76図 S P 2100出土礎石実測図

第17表 S P 299～S P 2103法量表(単位:m)

遺構名	地 区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 299	VII-9-10C	円 形	0.20	0.20	0.25	7.5Y5/1灰色粘土質シルト	
S P 2100	ク	ク	0.30	0.30	0.25	ク	柱根・礎石
S P 2101	ク	方 形	0.50	0.40	0.20	ク	土師器・須恵器杯身(8C前)
S P 2102	ク	円 形	0.30	0.30	0.20	ク	
S P 2103	ク	ク	0.40	0.40	0.20	ク	須恵器杯蓋(8C前)

S P 2104

23調査区北西部のVII-9-10E地区で検出した。S D261とS D262を切っている。北部分が調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部分で東西長0.8m、南北長0.3m、深さ0.17mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は上から2.5Y7/6明黄褐色粗粒砂、5Y5/1灰色粘土の2層から成る。遺物は出土していない。

S P 2105

23調査区の北西部のVII-9-10E地区で検出した。平面形は円形で長径0.4m、短径0.4mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は2.5Y5/2暗灰黄色シルトの單一層である。遺物は出土していない。

S P 2106

23調査区の南西部のVII-14-1D地区で検出した。平面形は楕円形で、長径3.4m、短径2.4m、深さ0.1mを測る。断面は逆三角形を呈し、埋土は5Y5/2灰オリーブ色中疊混粘土シルトの單一層である。遺物は出土していない。

S P 2107 (第77図、図版六四)

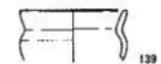
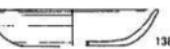
23調査区中央部のVII-14-1E地区で検出した。S K 222の南西に隣接している。平面形は円形で、径0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は10YR4/3にぶい黄褐色細疊の單一層である。遺物は図化した奈良時代に比定される土師器壺1点(137)のみが出土している。137は小形の土師器壺で底部を欠く以外は完存している。口径11.0cmを測る。体部外面はハケ調整を施している。当該期の同型の壺としては底部が丸底を主体とするが、本第77図 S P 2107出土遺物実測図例は平底を呈する可能性が残されている。色調は淡褐灰色である。

S P 2108~S P 2130 (第78図、図版二〇・六四)

24調査区の北部で検出された小穴群である。その内、S P 2114~S P 2124について、S B 203を構成する柱穴である。上面の形状では、円形、不整円形、楕円形、隅丸方形があり、規模は幅0.22~1.20m、深さ0.06~0.40mを測る。埋土は灰色~灰黄色の砂質シルトを主体としている。S P 2130では根石を検出している。その内遺物が出土したのは、S P 2114、S P 2120、S P 2125、S P 2129、S P 2130である。図化した遺物は、S P 2114出土の土師器杯A1点(138)とS P 2120出土の土師器壺B1点(139)、S P 2129出土の須恵器杯蓋2点(140・141)である。138は土師器杯の小破片で、残存率は1/6程度である。色調は淡赤褐色。胎土に1mm以下の長石、チャートを含む。時期は奈良時代後半の所産か。139は土師器の小形壺Bの小破片である。復元口径7.3cmを測る。色調は赤褐色。胎土は精良である。時期は奈良時代前半のものか。140・141の須恵器杯蓋は共に1/2程度が残存している。140は口径13.4cm、器高5.0cm、141は口径13.0cm、器高5.3cmを測る。色調は140が青灰色、141が灰色である。焼成は共に堅緻である。TK23型式(5世紀後半)にあたる。小穴の法量、詳細等は第18表に示した。

第18表 S P 2108~S P 2130法量表(単位:m)

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 2108	VII-14-1E	円形	0.24	0.24	0.08	5Y5/1灰色砂質シルト	
S P 2109	タ	タ	0.28	0.26	0.11	タ	
S P 2110	VII-14-2E	タ	0.22	0.22	0.15	タ	
S P 2111	タ	不明	0.45	0.54	0.20	タ	



第78図 S P 2114(138)、
S P 2120(139)、
S P 2129(140・141)
出土遺物実測図

造構名	地 区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 2112	Ⅷ-14-2F	梢円形	0.41	0.36	0.14	5Y5/1灰褐色砂質シルト	
S P 2113	タ	円形	0.40	0.40	0.20	タ	
S P 2114	Ⅷ-14-1-2D	梢円形	0.90	0.78	0.40	N2/0黒色灰混砂質シルト 5Y6/2灰オリーブ色砂質シルト	S B203 土師器(138)・ 須恵器・製塙土器
S P 2115	Ⅷ-14-1-1D	隅丸方形	0.72	0.66	0.20	タ	S B203 土師器・ 須恵器
S P 2116	タ	タ	0.68	0.68	0.25	5Y6/2灰オリーブ色砂質シルト 5Y5/1灰褐色砂質シルト	S B203 土師器・ 須恵器
S P 2117	タ	タ	0.90	0.90	0.16	タ	S B203 上師器・ 須恵器
S P 2118	タ	タ	0.80	0.66	0.15	タ	S B203 上師器
S P 2119	タ	円形	0.80	0.68	0.22	5Y6/2灰オリーブ色砂質シルト 5Y5/1灰褐色砂質シルト 2.5Y6/1黄灰色シルト質粘土	S B203 土師器・ 須恵器・製塙土器
S P 2120	Ⅷ-14-2E	隅丸方形	0.92	0.92	0.36	タ	S B203 土師器(139)・ 須恵器
S P 2121	タ	タ	0.90	0.88	0.26	N2/0黒色灰混砂質シルト 5Y5/1灰褐色砂質シルト	S B203 土師器・ 須恵器
S P 2122	タ	タ	0.98	0.90	0.28	N2/0黒色灰混砂質シルト N2/0黒色灰混砂質シルト	S B203 土師器・ 須恵器・製塙土器
S P 2123	タ	タ	1.20	1.10	0.40	5Y6/2灰オリーブ色砂質シルト 5Y5/1灰褐色砂質シルト	S B203 土師器・ 須恵器
S P 2124	タ	梢円形	0.06	0.04	0.29	2.5Y6/2灰黄色砂質シルト	S B203
S P 2125	タ	タ	0.70	0.54	0.06	10YR5/2灰黃褐色砂質シルト	土師器・須恵器
S P 2126	タ	タ	0.32	0.24	0.06	タ	
S P 2127	タ	円形	0.22	0.20	0.06	N5/0灰褐色砂質シルト	S B203
S P 2128	Ⅷ-14-2D	タ	0.30	0.30	0.21	2.5Y5/2暗灰褐色砂質シルト	
S P 2129	タ	タ	0.42	0.42	0.11	2.5Y6/2灰黄色砂質シルト	須恵器・杯蓋(140-141)
S P 2130	Ⅷ-14-2E	不定形	0.62	0.54	0.07	2.5Y6/3にい黃褐色砂質シルト	上師器壺・根石

S P 2131～S P 2142

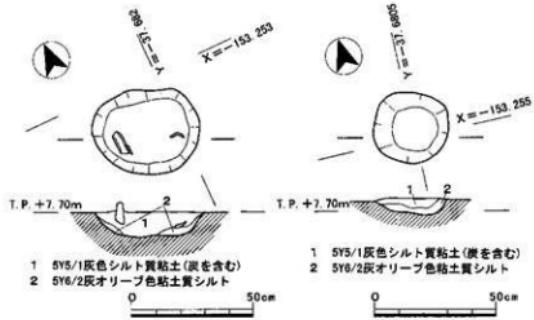
S P 2131～S P 2142は25調査区で検出された小穴群である。調査区の西部を中心として散発的に検出されており、建物の柱穴を構成するものは認められない。掘方の形状では、一部の梢円形のものを除けば円形のものが大半を占めている。規模は幅0.20～0.70m、深さ0.04～0.32mを測る。遺物は出土していない。小穴の法量・詳細等は第19表に示した。

第19表 S P 2131～S P 2142法量表 (単位m)

造構名	地 区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 2131	Ⅷ-14-3C	梢円形	0.70	0.42	0.06	N5/0灰褐色砂質シルト	
S P 2132	Ⅷ-14-4D	円形	0.60	0.50	0.32	10YR7/1灰白色砂質シルト	
S P 2133	Ⅷ-14-4C	梢円形	0.42	0.34	0.11	10YR5/1褐色砂質シルト	
S P 2134	タ	円形	0.20	0.20	0.12	タ	
S P 2135	Ⅷ-14-4D	梢円形	0.32	0.20	0.13	タ	
S P 2136	Ⅷ-14-4C	不明	(0.40)	0.20	0.11	タ	
S P 2137	Ⅷ-14-5C	円形	0.42	0.42	0.04	タ	
S P 2138	タ	タ	0.40	0.38	0.08	タ	
S P 2139	タ	タ	0.26	0.24	0.09	N6/0灰褐色砂質シルト	
S P 2140	タ	タ	0.38	0.32	0.05	10YR5/1褐色砂質シルト	
S P 2141	タ	タ	0.24	0.24	0.04	タ	
S P 2142	タ	タ	0.28	0.26	0.05	タ	

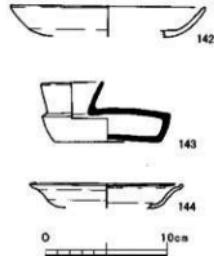
S P 2143~S P 2159 (第79~81図、図版二〇)

26調査区の西部を中心に検出された小穴群である。散発的な分布を示しており、規則的な配置は確認できなかった。平面形状では、円形、橢円形、方形がある。規模は幅0.30~0.60m、深さ0.04~0.16mを測る。なお、S P 2148・S P 2153には柱根が残存していた。遺物はS P 2145から、奈良時代後半に比定される須恵器平瓶1点が横倒しの状態で出土している。S P 2147から土師器の小破片が出土している。3点(142~144)を図化した。142・143はS P 2145から出土したものである。142は土師器皿Aの小破片である。復元口径16.2cmを測る。色調は褐灰色。143は小形の須恵器平瓶である。口縁部の一部を欠く以外は完存している。口径5.0cm、器高4.8cm、体部径10.6cm、底径8.9cmを測る。体部上面に灰かぶりと自然釉が認められる。奈良時代中期のものか。144の土師器杯AはS P 2147から出土したものである。復元口径12.5cmを測る。奈良時代中期のものか。各小穴の法量・詳細は、第20表に示した。



第79図 S P 2145平面図

第80図 S P 2147平面図

第81図 S P 2145(142+143)
S P 2147(144)出土遺物
実測図

第20表 S P 2143~S P 2159法量表 (単位m)

造構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 2143	VII-14-6B	円形	0.30	0.30	0.12	5Y4/1灰色シルト質粘土	
S P 2144	タ	タ	0.35	0.35	0.08	タ	土師器
S P 2145	タ	方形	0.50	0.35	0.11	5Y5/1灰色シルト質粘土 5Y6/2灰オリーブ色粘土質シルト	土師器(142) 須恵器(143)
S P 2146	VII-14-6D-C	円形	0.30	0.30	0.04	2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土	土師器
S P 2147	VII-14-6B	橢円形	0.30	0.30	0.07	5Y4/1灰色シルト質粘土 5Y6/2灰オリーブ色粘土質シルト	土師器(144) 須恵器
S P 2148	VII-14-6C	タ	0.40	0.40	0.04	タ	須恵器
S P 2149	VII-14-7B	タ	0.50	0.50	0.08	タ	
S P 2150	タ	タ	0.40	0.40	0.05	タ	須恵器
S P 2151	タ	タ	0.35	0.35	0.15	タ	
S P 2152	タ	タ	0.30	0.30	0.09	タ	須恵器
S P 2153	タ	タ	0.45	0.45	0.14	タ	
S P 2154	タ	タ	0.40	0.40	0.08	タ	土師器
S P 2155	タ	タ	0.35	0.35	0.07	タ	土師器・石材
S P 2156	VII-14-8B	方形	0.60	0.50	0.10	タ	
S P 2157	VII-14-6D	橢円形	0.60	0.60	0.16	タ	土師器
S P 2158	タ	タ	0.30	0.30	0.04	タ	土師器
S P 2159	タ	タ	0.35	0.35	0.09	タ	

自然河川（N R）

N R 201（図版二一）

15調査区中央部のⅧ-1-10G・H地区で検出した。南一北に伸びる自然河川である。検出部分で、検出長7.0m、幅7.4m、深さ1.2mを測る。断面形は逆台形で、埋土は粘土～細礫で形成されている。その状況からみて、流速が速い河川であったことが推察できる。検出部分の北東隅と南東隅において用途不明木製品の集積を検出した。これらの木製品の中には、先端部分を尖らせた杭が含まれており、上流に何らかの施設の存在が想定できる。その他の遺物としては、土師器小破片が極少量出土しているが時期を明確にし得たものはない。

N R 202（写真13、図版二一）

16調査区中央～南部のⅨ-6-1 I・J、2 J、Ⅹ-7-1・2 A・B地区で検出した。第IV層上面から切り込む自然河川で、河川の東肩は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で検出長7.0m、幅21.0mを測る。深さについては、下層確認を行った結果、1.5m以上あることが確認された。河川の西肩に近い地点で、堰部材2点（北側～堰部材①、南側～堰部材②）が出土した。上流から流れてきたと思われるこの木製品は、二股の木を利用し、先端部分を杭状に尖らせている。長さは、堰部材①が2.9m、堰部材②が3.5mを測る。堰部材②には、二股に分かれる部分に長方形の枘穴があけられていた。同様の堰部材は、本調査区の東約50m地点で（財）大阪府文化財調査研究センターにより実施された久宝寺遺跡・龍華地区96-1トレンチでも検出されている。この調査では、修羅状に加工された部材が古墳時代中期以前の自然河川に構築された堰を構成する堰部材として使用されていたことが判明している。その他の遺物としては、弥生時代後期に比定される高杯の脚部が一点のみ出土している。遺物の中には、古墳時代中期前半の堰の構築部材に使用された2点の修羅状木製品が出土しているが、本自然河川の構築面は平安時代中期の遺構を検出した第IV層を切ることから、河川が機能した時期としては、平安時代中期以後が推定される。



写真13 N R 202堰部材検出状況(南から)

道路状造構（道路状遺構）

道路状遺構201

25調査区東部から26調査区東部にかけて検出した。北東～南西に伸びるもので、S E 208・S E 209に切られている。検出長49.5m、幅0.8～2.5mを測る。本遺構に付随する遺構としては、西側に S D 279・S D 288、東側に S D 280・S D 289があり、道路状遺構に伴う側溝の役割を果たしたものと考えられる。この道路状遺構に沿って近世井戸が多く構築されていることから、耕地を区画する性格を持つ遺構であると推定される。

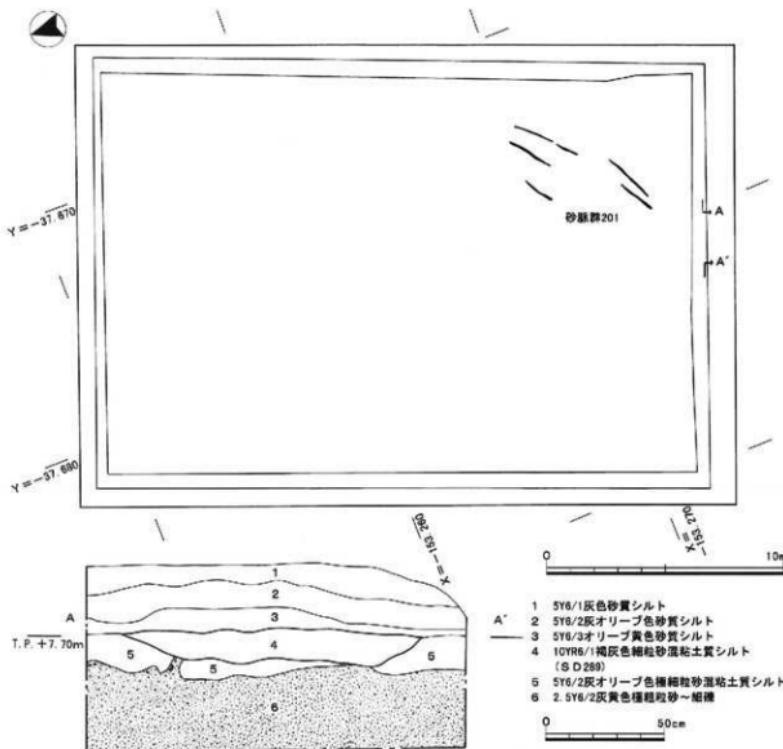
地震跡

砂脈群201（写真14、第82図）

地震発生時の液状化現象で生じた個々の砂脈のまとまりを群として捉えた。砂脈群201は26調査区の南東部のⅧ-14-7・8地区で検出した。T.P.+7.6m付近を上部とする6層2.5Y6/2灰黄色極細粒砂～細砂から噴き上がるもので、幅0.5～10cmを測り、北東～南西に伸び、最上部はT.P.+7.7mに達する。なお、平安時代中期までの遺物を含むSD289が砂脈群201を切っていることから、液状化を引き起こした地震の発生時期は平安時代中期以前が推定される。



写真14 砂脈群201検出状況(北東から)



第82図 26調査区 砂脈群201平面面図

・第3面【古墳時代前期前半(布留式古相)～平安時代末期】(第83～104図、図版二二～二七)
 1・14・17・18・20・21調査区で検出した。大半が第VI層上面(T.P.+7.7～7.4m)で検出した遺構面であるが、一部、第IX層上面で検出した遺構が含まれている。時期的には、構築面が上部に求められる平安時代末のものや、古墳時代前期前半(布留式古相)のものを除けば飛鳥時代前期～奈良時代前期を中心としている。検出した遺構には、土坑12基(S K 301～S K 312)、溝7条(S D 301～S D 307)、小穴14個(S P 301～S P 314)、土器棺墓2基(土器棺墓301・土器棺墓302)、地震痕跡7箇所(砂脈群301～砂脈群307)がある。

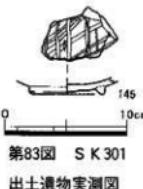
土坑(S K)

S K 301(第83・84図、図版二五)

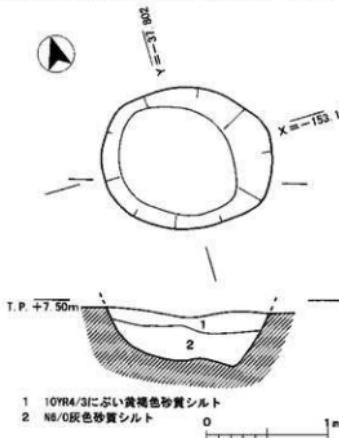
17調査区西部のⅦ-7-5J地区で検出した。上部は近世の島畑構築時に削平を受けており、本来の構築面は第2面が推定される。東一西に長い楕円形を呈するもので、長辺1.41m、短辺1.16m、深さ0.46mを測る。埋土は上層の10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトと下層のN6/0灰色砂質シルトの2層から成る。遺物は下層を中心として、奈良時代～平安時代末期に比定される土師器、須恵器、瓦器碗の小破片が少量出土している。瓦器碗1点(145)を図化した。145は瓦器碗底部の小破片である。復元高台径5.1cmを測る。見込みに斜格子状へラミガキが施されている。12世紀後半。出土遺物には時期幅のある夾雜遺物を含むが、145からみて遺構の帰属時期は平安時代末期(12世紀後半)が推定される。

S K 302(第85図、図版二五)

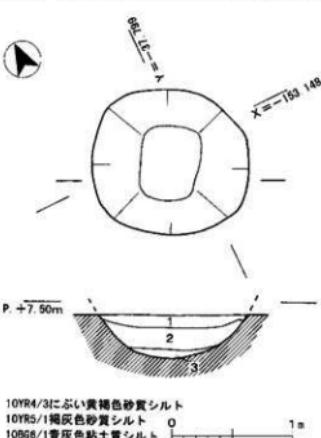
17調査区中西部のⅦ-7-5J、Ⅶ-8-5A地区で検出した。S K 301と同様、本来の構築面は第2面が推定される。円形を呈するもので、長辺1.30m、短辺1.2m、深さ0.35mを測る。埋土



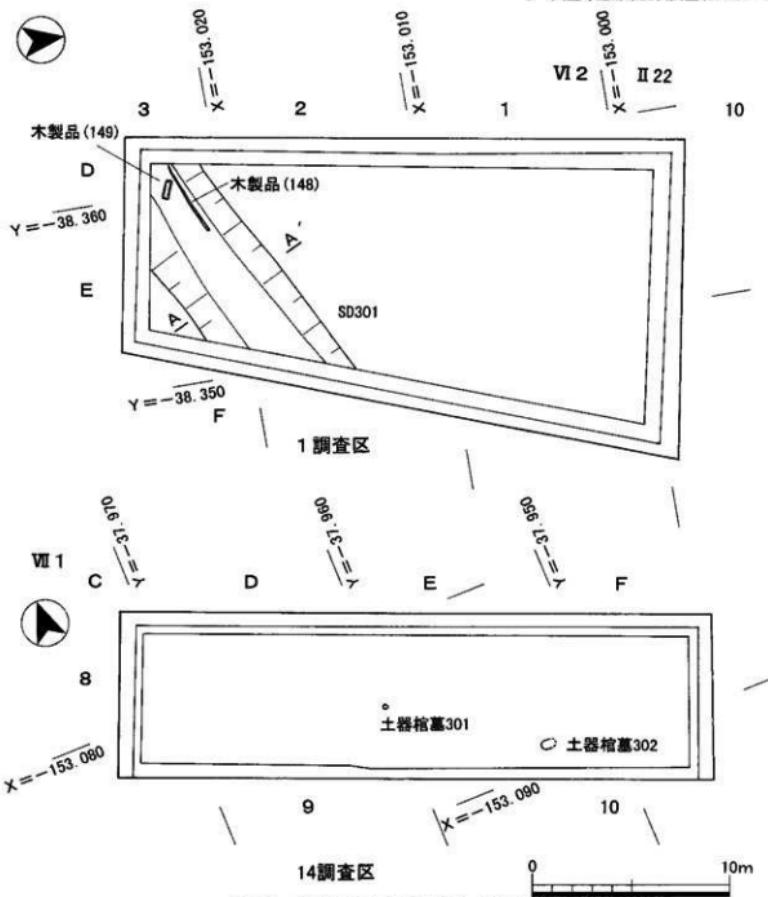
第83図 S K 301
出土遺物実測図



第84図 S K 301平面面図



第85図 S K 302平面面図



第86図 第3面平面図(1調査区、14調査区)

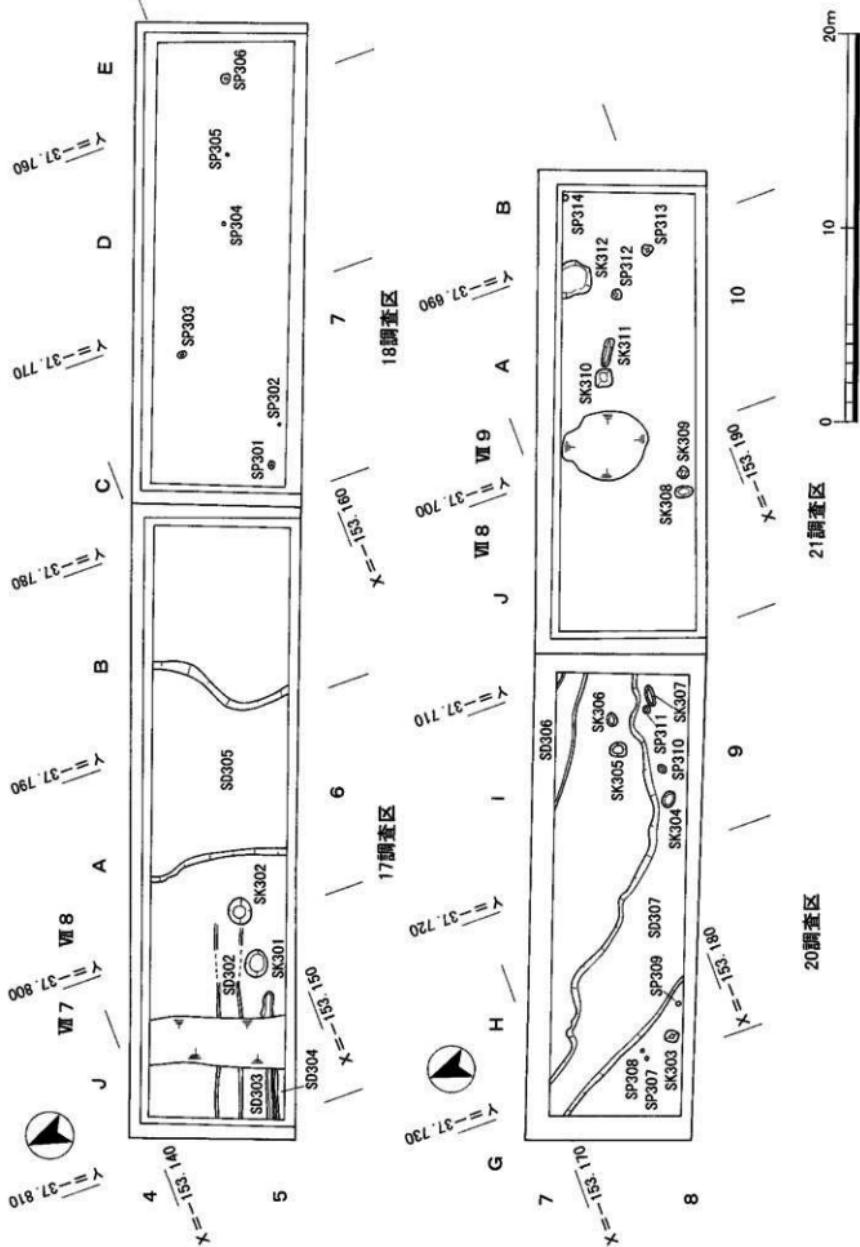
は半球形の断面形状に沿って3層がレンズ状に堆積している。遺物は主に上層から平安時代末期に比定される須恵器、瓦器碗の小破片が極少量出土している。

SK 303 (第89図)

20調査区西部のVII-8-8H地区で検出した。方形の掘方を呈するもので、長辺0.74m、短辺0.60m、深さ0.22mを測る。埋土は2.5Y5/3黄褐色粘土質シルトと2.5Y6/2灰黄色粘土質シルトの2層である。遺物は土器器片が少量出土したが、小破片のため時期を明確にし得たものはない。

SK 304 (第89図)

20調査区東部のVII-8-9I地区で検出した。楕円形の掘方を呈するもので、長径1.10m、短



第87図 第3面平面図(17調査区・18調査区、20調査区・21調査区)

径0.70m、深さ0.13mを測る。埋土は5Y6/1灰色粘土質シルトである。遺物は土師器、須恵器片が数点出土したが、時期を明確にし得たものはない。

S K 305 (第88・89図、図版二五)

20調査区東部のⅧ-8-8 I 地区で検出した。楕円形の掘方を呈する

もので、長径0.90m、短径0.80m、深さ0.08mを測る。埋土は2.5Y6/2灰黄色粘土質シルトである。遺物は土師器、須恵器片が少量出土している。土師器鍋1点(146)を図化した。146は復元口径36.0cmを測る大形の鍋である。色調は赤褐色。胎土は精良。飛鳥時代前期に比定される。

S K 306 (第89図)

20調査区東部のⅧ-8-8 I 地区で検出した。楕円形の掘方を呈するもので、長径0.80m、短径0.60m、深さ0.09mを測る。埋土は2.5Y6/2灰黄色粘土質シルトである。遺物は土師器片2点が出土しているが、時期は明確でない。

S K 307 (第89図)

20調査区のⅧ-8-9 I 地区で検出した。楕円形の掘方を呈するもので、長径1.10m、短径0.50m、深さ0.06mを測る。埋土は2.5GY6/1オリーブ灰色粘土である。遺物は出土していない。

S K 308 (第89図)

21調査区南部のⅧ-8-9 J 地区で検出した。隅丸方形の掘方で、長辺0.6m、短辺0.8m、深さ0.2mを測る。断面形状は皿形を呈している。埋土は2.5Y6/1黄灰色小疊混粘土質シルトである。遺物は土師器、須恵器の小破片が出土したが、時期は明確でない。

S K 309 (第89図)

21調査区南部のⅧ-8-9 J 地区で検出した。円形状の掘方で、長辺0.5m、短辺0.5m、深さ0.2mを測る。断面形状は逆台形を呈している。埋土はS K 308と同じである。遺物は出土していない。

S K 310 (第89図)

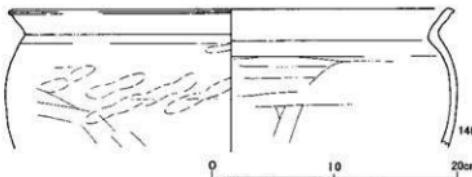
21調査区中央部のⅧ-9-9 A 地区で検出した。長方形の掘方で、長辺1.0m、短辺0.8m、深さ0.8mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は粘土質シルトを主体とする4層から成る。遺物は出土していない。

S K 311 (第89図)

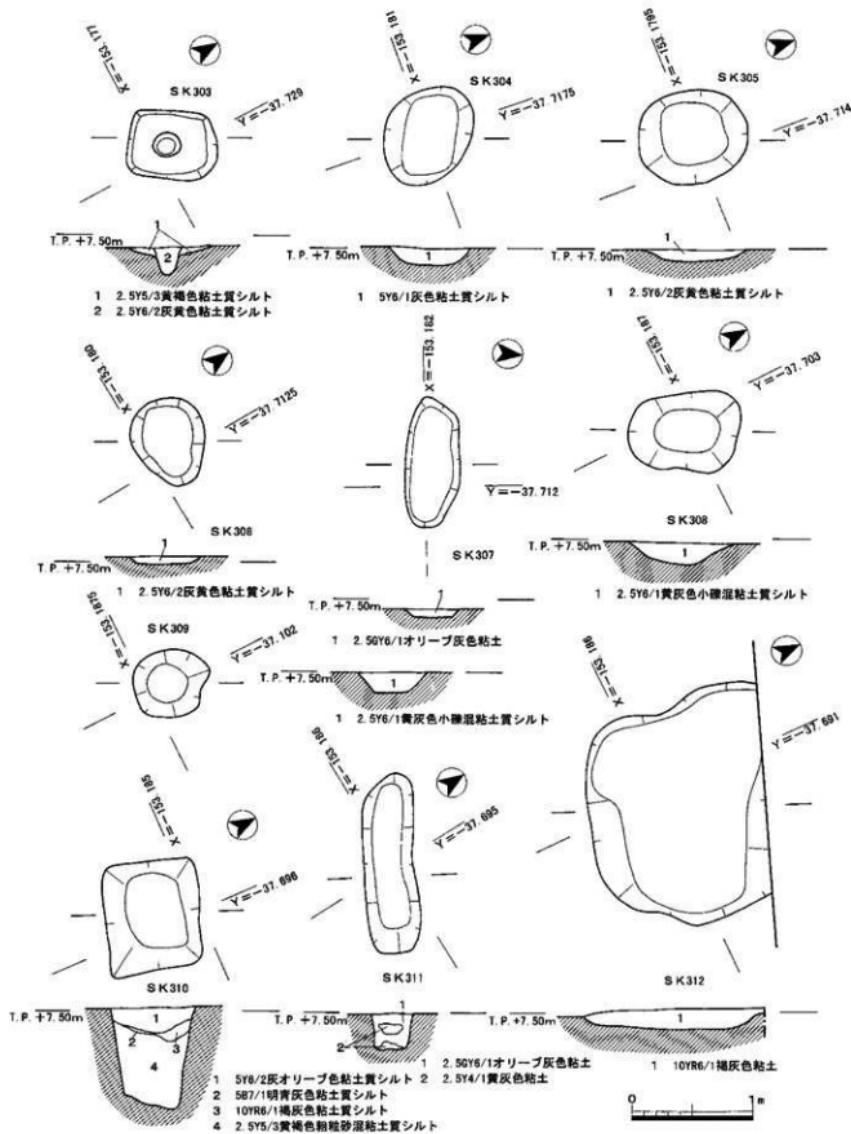
21調査区中央部のⅧ-9-9 A 地区で検出した。東-西に長い楕円形の掘方で、長径1.5m、短径0.5m、深さ0.3mを測る。埋土は粘土を主体とする2層から成る。遺物は出土していない。

S K 312 (第89図)

21調査区北東部のⅧ-9-9 A 地区で検出した。北側は側溝によって削平を受けており、全容は不明である。検出部分で東西幅1.8m、南北幅1.5m、深さ0.16mを測る。埋土は10YR6/1褐色粘土の單一層である。遺物は出土していない。



第88図 S K 305出土遺物実測図



第89図 SK 303～SK 312断面図

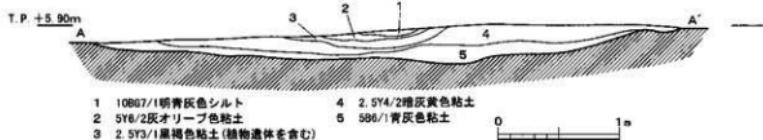
溝(SD)

SD 301(第90~92図、図版二六・六五・六六)

1調査区南部のVI-2-2E、3D-E地区で検出した。北東-南西に伸びるもので、検出部分で検出長14.5m、幅5.3m、深さ0.3mを測る。埋土は5層から成り、最上層がシルトである以外は粘土が優勢な層相である。遺物は4層から、須恵器杯身1点と木製品2点および自然流木片1点が出土している。須恵器杯身1点(147)、木製品2点(148・149)を図化した。147の須恵器杯身はほぼ完形で、口径13.6cm、器高5.0cm、受部径16.0cmを測る。色調は青灰色。焼成は堅緻である。MT15型式(6世紀前半)に比定される。148は建築部材と推定される。長さ218cm、幅5~12cm、厚さ3~4cmを測る。両端は折れており、図上で上にした部分の幅が広く下方に行くに従って幅を減じている。材の形状は、A面の上部より89cm付近までは左端に突出した部分があり断面「L」字形を呈する。長方形を基準とする枘穴が中央部に集中して5箇所とその外側に2箇所づつの計9箇所に設けられている。樹種はスギである。149は原構えを構成する蹴放しと考えられる。長方形の板材で長さ95cm、幅23cm、厚さ4cmを測る。両端付近に一辺5cmを測る方形の貫通する枘穴が2箇所、A面側から貫通した枘穴に隣接した位置に2箇所と中央部付近に2箇所の計4箇所に貫通しない枘穴が穿たれている。A面側の一部には、焼け焦げて炭化した部分がある。樹種はモミ属である。出土遺物から6世紀前半の遺構と考えられる。



第90図 SD 301出土遺物実測図



第91図 SD 301西壁断面図

SD 302

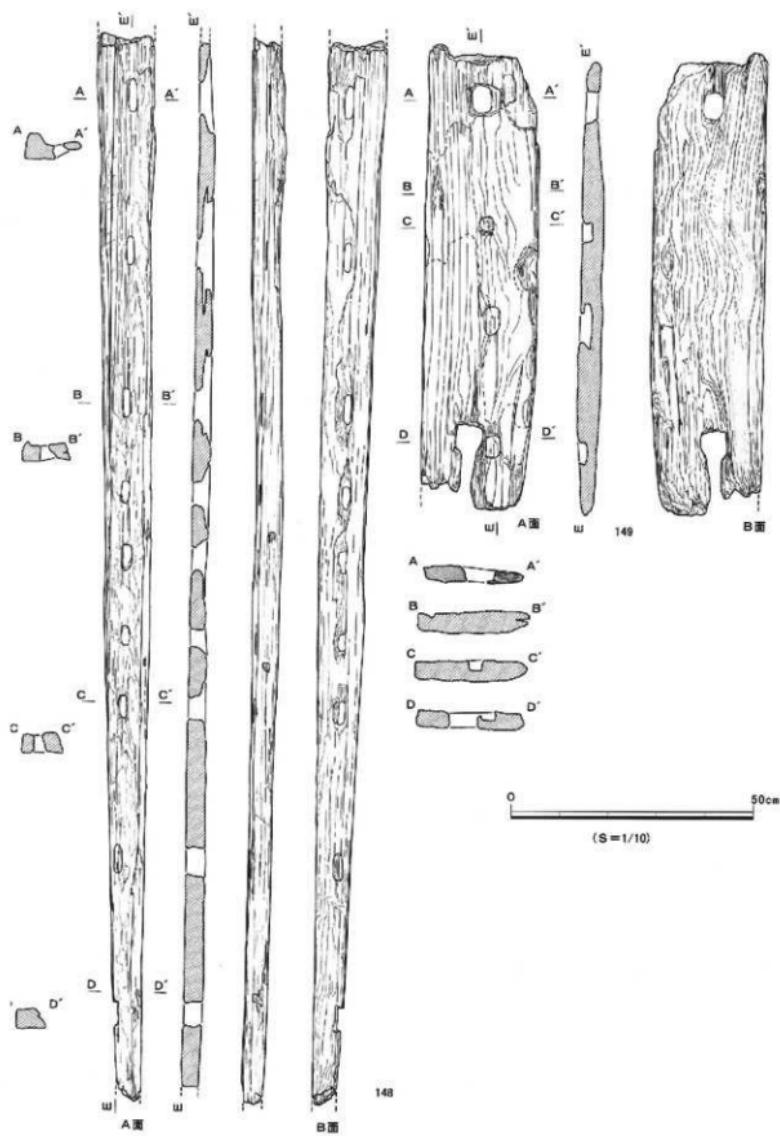
17調査区西部のVII-7-5J地区で検出した。東-西に伸びるもので、近代の搅乱およびSD 101に一部が切られている。検出長17.5m、幅1.34m、深さ0.17mを測る。埋土は10YR5/2灰黄褐色砂質シルトの單一層である。遺物は土師器片が極少量出土しているが、小破片のため時期は明確にし難い。

SD 303

17調査区南西部のVII-7-5J地区で検出した。SD 302の南側に並行して伸びる。SD 302と同様、一部が近代の搅乱により削平を受けている。検出長5.8m、幅0.56m、深さ0.1mを測る。埋土はN6/0灰白色砂質シルトとN7/0灰白色細粒砂の2層から成る。遺物は土師器片が極少量出土しているが、小破片のため時期は明確にし難い。

SD 304

17調査区南西部のVII-7-5J地区で検出した。SD 303の南側に並行して伸びる。南肩は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で検出長2.4m、幅0.38m、深さ0.07mを測る。埋土



第92図 SD 301出土木製品実測図

はN6/0灰色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

S D 305 (第93図、図版六六)

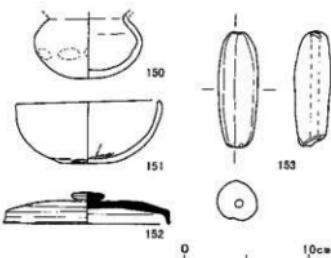
17調査区の中央部のⅦ-7-5・6 A・B地区で検出した。南-北に伸びるもので、検出長6.0m、幅7.6~10.0m、深さ0.25mを測る。溝幅に比して深さが浅い溝で、断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は10YR5/2灰黄褐色砂質シルトと7.5Y6/3にびい黄色砂質シルトの2層から成る。遺物は古墳時代前期後半(布留式新相)~奈良時代前期に至る土師器、須恵器、土製品、屋瓦等が少量出土している。4点(150~153)を図化した。150は小形丸底壺である。体部上端に擬円線を形成しており、その部分より上部を欠損している。色調は赤褐色~淡褐色。時期的には布留式新相に比定される。151は杯Cでほぼ完形である。口径11.8cm、器高5.0cmを測る。色調は淡褐色。胎土はやや粗く、0.1~0.5mmの大の長石、赤色酸化土粒を多く含む。7世紀前半のものか。152は須恵器B蓋である。ほぼ完形で、口径13.6cm、器高2.6cmを測る。つまみは扁平で、つまみ径2.8cm、つまみ高0.7cmを測る。天井部全面に緑灰色の自然釉が厚く附着している。色調は灰色、焼成は堅緻である。奈良時代前期。153は管状土錠である。一部を欠く以外は完存している。長さ9.5cm、幅3.0cm、紐孔径0.5cmを測る。出土遺物には時期幅があるが、152からみて造構の廃絶時期は奈良時代前期が推定される。

S D 306

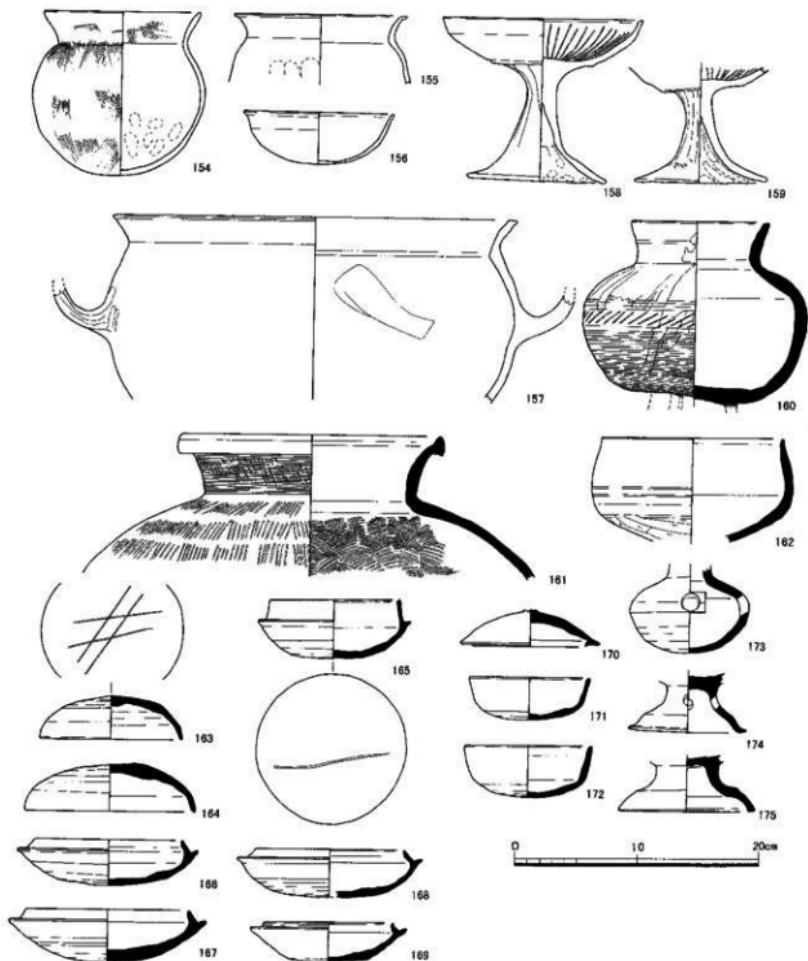
20調査区の北東部のⅧ-8-8 I・J地区で検出した。南東-北西に伸びている。検出部分で、検出長6.0m、幅1.45m、深さ0.2mを測る。断面形状は浅い皿形を呈している。埋土は7.5Y6/3にびい黄色粘質シルトである。遺物は時期不明の土師器片が少量出土した。

S D 307 (第91・95図、図版六六~六九)

20調査区の北西~南東部のⅧ-8-7 G・H、8 G~I、9 H・I地区で検出した。南東-北西に伸びる幅の広い溝である。検出部分で、検出長24.5m、幅1.9~4.9m、深さ0.3mを測る。断面形状は逆台形を呈している。埋土は2.5Y6/3にびい黄色砂質シルトを主体としている。遺物は古墳時代中期~飛鳥時代前期に比定される土師器、須恵器、石製品等が多量に出土している。23点(154~176)を図化した。内訳は土師器壺2点(154・155)、杯1点(156)、鍋1点(157)、高杯2点(158・159)、須恵器台付き壺1点(160)、壺1点(161)、鉢1点(162)、杯蓋3点(163・164・170)、杯身7点(165~169・171・172)、高杯2点(174・175)、瓶1点(173)、紡錘車1点(176)である。154・156は土師器壺Aである。154はほぼ完形で口径12.5cm、器高13.5cmを測る。外側の器面調整は縦方向のハケを多用する。体底部の内面に指頭圧痕を残す。色調は淡赤褐色である。胎土は精良である。155は土師器壺Aの小破片で、復元口径14.0cmを測る。156は深めの体部を持つ土師器杯Cである。ほぼ完形で口径12.0cm、器高5.3cmを測る。飛鳥時代前半のものか。体部前半に黒斑が認められる。157は把手が付く鍋Bである。復元口径32.8cmを測る。色調は橙色。飛鳥時代前半のものか。158・159は土師器高杯Bである。158がほぼ完形で復元可能で口径16.2cm、器高13.4cm、柄部径11.4cmを測る。共に杯部下半に稜を形成した後に椀形を呈する杯部を作るもので、内面には放射状暗



第93図 S D 305出土遺物実測図



第94図 S D 307出土遺物実測図一 1

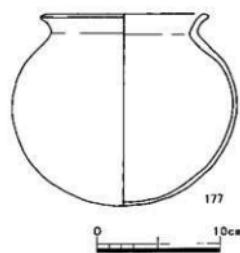
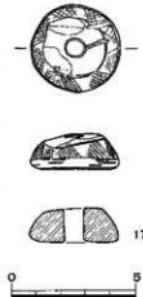
文が施文されている。脚柱部のうち柱状部外縁は面取りを意識した指ナデが顕著な他、裾部端面の成形が雑で全体の形状や器壁の厚みが不揃いとなっている。色調は158・159共に赤褐色で、胎土には水簸された精良な粘土が使用されている。2点共に飛鳥時代前半に比定される。160は須恵器台付壺で脚部を欠く。壺の口縁は直口の形態を持つもので口径11.5cm、器高14.5cm、体部最大径18.1cmを測る。体部中位の沈線間にヘラ書きによる斜文が施文されており、それ以下にはカキメ調整が行われている。自然釉が体部内面および外表面全体に厚く附着している。胎土中に1mm

大の長石が散見される。色調は灰色、焼成は堅緻である。飛鳥時代後半のものか。161は大形壺である。復元口径21.0cmを測る。口縁部は上外方に伸びた後外反し、口縁端部が下方に肥厚し幅広の外縁面を形成する。頸部外面は縦方向のハケの後、横方向のカキメを施す。体部外面は縦方向のタタキを施すが灰かぶりが厚く降着しているため不明瞭である。体部内面は青海波タタキを施す。色調は青灰色。焼成は堅緻。6世紀前半に比定される。162は台付鉢と推定されるが類例が少ない器種であるため詳細は不明。1/2が残存しており復元口径15.0cmを測る。体部外面に2本の沈線が巡る他、下半は静止ヘラケズリが行われている。色調は淡青灰色で焼成はやや甘い。帰属時期は明確でない。須恵器杯蓋は3点163・164・170である。163・164は○完形で163が口径11.5cm、器高3.5cm、164は口径14.0cm、器高3.7cmを測る。
第95図 S D 307
163の天井部に斜格子状のヘラ記号が施文されている。色調は163が灰白色、
164が灰青色である。共に古墳時代末期に比定される。170は宝珠を欠いている。T K 217型式(7世紀中葉)に比定される。杯身は7点(165~169・171・172)がある。165は完形である。底部外面には直線文が施文されている。内面の一部に漆が付着している。T K 47型式(5世紀末)に比定される。166~169は立ち上がりが内傾する杯身である。166が完形の他は1/2程度残存している。166~168が田辺編年のMT 85型式(6世紀後半)、169がT K 217型式(7世紀中葉)に比定される。171・172は宝珠つまみを持つ杯蓋と組合わされる杯身である。完形である。共に器形の歪みが著しい。T K 217型式(7世紀中葉)に比定される。173は壺である。体部は扁球形で中位に径1.5cmを測る円孔が穿たれている。7世紀前半の所産。174・175は「ハ」の字状に開く短い脚部に杯部が付く小形の無蓋高杯である。共に杯部を欠く。174の脚部にスカシ孔が2個穿たれている。176の滑石製紡錘車は溝底部付近(VII-8-8H地区)から出土した。台形状を呈するもので中央部分に径8mmを測る円孔が穿たれている。上面の一部が削られている他は完存している。上面幅2.5cm、下面幅3.2cm、高さ1.4cmを測る。側面に格子入りの鋸歯文が9個線刻されている。同様の滑石製紡錘車については、近畿地方を中心として分布が認められるもので、これまでの出土例からみて6世紀末~7世紀初頭のものと推定される。出土遺物から遺構の廃絶時期は飛鳥時代前期中葉(7世紀中葉)の時期が推定される。

小穴(S P)(第96図、図版六八)

S P 301~S P 306

18調査区の全域で検出された小穴である。平面形状では、円形、楕円形がある。規模は径0.2~0.5m、深さ0.1~0.2mを測る。S P 304~S P 306が直線的に並ぶため建物を構成した柱穴の可能性がある。遺物はS P 303内から横位の状態に埋置された平安時代中期の土師器壺1点(177)が出土している。177は全体の3/4程度が残存している。球形の体部に「く」の字に曲る口縁部が付く中形の壺で口径13.1cm、器高15.8cm、体部最大径18.4cmを測る。全体に風化が著しく調整は不明な点が多い。色



第96図 S P 303出土遺物実測図

調は淡褐色で胎土中に0.5~1mm大の長石が多量に含まれている。10世紀後半~11世紀初頭の所産と考えられる。なお、各小穴の法量および詳細等は第21表に示した。

第21表 S P 301~S P 306法量表(単位m)

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 301	Ⅷ-8-6C	楕円形	0.40	0.30	0.20	7.5Y5/1灰褐色シルト質粘土	
S P 302	ク	ク	0.20	0.20	0.20	ク	
S P 303	ク	ク	0.40	0.30	0.20	ク	土師器(177)
S P 304	Ⅷ-8-6D	円 形	0.30	0.30	0.20	ク	
S P 305	Ⅷ-8-7D	ク	0.30	0.30	0.20	N5/0灰色シルト質粘土	
S P 306	Ⅷ-8-7E	楕円形	0.50	0.40	0.10	10Y6/1灰色粘土質シルト	

S P 307~S P 311

20調査区内で検出された小穴である。散発的な広がりを持っており規則性は見出せない。平面の形状では、円形、楕円形がある。規模は径0.2~0.5m、深さ0.05~0.10を測る。遺物はS P 310・S P 311から土師器、須恵器の小破片が少量出土したが、時期を明確にできたものはない。各小穴の法量および詳細は第22表に示した。

第22表 S P 307~S P 311法量表(単位m)

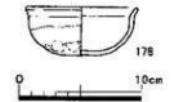
遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 307	Ⅷ-8-8H	円 形	0.24	0.24	0.10	2.5Y6/3に赤い黄色粘質シルト	
S P 308	ク	ク	0.20	0.20	0.09	ク	
S P 309	ク	ク	0.20	0.20	0.09	ク	
S P 310	Ⅷ-8-9I	楕円形	0.50	0.40	0.10	5Y6/1灰色シルト質粘土	土師器、須恵器
S P 311	Ⅷ-8-8G, 9I	ク	0.40	0.30	0.05	ク	土師器

S P 312~S P 314 (第97図、図版六八)

21調査区で検出した。散発的な検出で規則性はない。平面の形状は全て楕円形で、規模は径0.3~0.5m、深さ0.07~0.21mを測る。遺物はS P 312・S P 313から土師器片が極少量出土している。S P 312から出土した土師器杯1点(178)を図化した。178は平底気味で椀形を呈する体部に小さく屈曲する口縁部が付く土師器杯Cである。1/2が残存しており口径9.0cm、器高4.0cmを測る。体部外面に粘土紐の継ぎ目や痕跡が残る他、底部付近に指頭圧痕が残る。色調は赤褐色で胎土は精良である。時期的には飛鳥時代前半のものか。なお、各小穴の法量および詳細は第23表に示した。

第23表 S P 312~S P 314法量表(単位m)

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 312	Ⅷ-9-9A	楕円形	0.50	0.50	0.21	10Y6/1灰色粘質シルト	土師器(178)
S P 313	ク	ク	0.50	0.50	0.07	2.5GY6/1オリーブ灰色粘土	土師器
S P 314	Ⅷ-9-9B	ク	0.30	0.30	0.14	ク	



第97図 S P 312出土遺物
実測図

土器棺墓（土器棺墓）

土器棺墓301（写真98・99図、図版二六・六九）

14調査区中央部のⅦ-1-9 D地区の東部で検出した。第IX層上面を構築面とする土器棺である。検出時点では上部が削平を受けており、土器棺を構成した大形二重口縁壺の体部中位以下のみが検出されているにすぎない。残存部分では幅27cm、高さ13cmを測るが、土器棺上層からは削平により遊離した大形二重口縁壺片が検出されている。土器棺内からは遺物は出土していない。構築時期は古墳時代前期前半（布留式古相）である。土器棺墓301を構成する二重口縁壺179は、頸部から体部中位が欠損する。口頸部は器壁が厚く、重厚感があるので、復元口径26.4cmを測る。口縁部は明瞭な段を形成する頸部端から斜上方に伸びた後、外傾する幅広の端面を形成している。口縁部外面に雜な波状文様のヘラミガキが施されている。体底部は球形で、体部最大径31.5cmを測る。底部の中央に焼成後に穿たれた径6.0cmを測る穿孔がある。体底部の器面調整は外面がハケ、内面がヘラミガキである。視覚的には、いわゆる河内型庄内式壺と同様で、色調は褐灰色、胎土に長石、角閃石が多量に含まれている。180は小形丸底壺の小破片である。179を取り上げる際に出土したものであるが、土器棺墓301の上部が削平を受けていたため本来の位置は判然としない。口径が体部径を遥かに凌駕するもので、復元口径10.2cm、体部最大径8.0cmを測る。器面調整は口縁部および体部外面が密なヘラミガキ、体部内面はナデが施されている。色調は赤褐色。胎土は精良である。原田編年による土器分類の小形壺B₃にあたるもので、布留式古相（布留II期）に比定される。

土器棺墓302（写真15、第100・101図、図版二七・六九）

14調査区南東部のⅦ-1-9 E地区で検出した。東部はSD203に切られている。東西方向に長い楕円形の掘方内に大形直口壺を横位に埋置している。検出部分で東西幅56cm、南北幅53cm、深さ24cmを測る。埋土はN4/0灰色シルト質粘土の單一層である。土器棺に使用された大形直口壺は底部穿孔を有するもので、口径18.5cm、器高38.3cm、体部最大径29.6cmを測る。土器棺内から遺物は出土していない。土器棺墓302に転用された181は、体部下半の一部を欠く以外は完存している。体底部はやや胴長球形で、最大径を中位よりやや上位に持つ。口頸部は斜上方に直線的に伸びるもので、端部は内外に肥厚し外傾する面を持つ。底部中央に穿たれた穿孔は、焼成後によるもので径5.5cmを測る。器面調整は密なハケが多用されており、口頸部外面がタテハケ、体部外面は上位がヨコハケ、以下はタテハケが施文されている。内面は口頸部がヨコナデ、体部はヘラケズリが多用されている。色調は赤褐色～灰白色で口頸部と体部中位に赤色顔料が塗布された痕跡を残す。胎土に0.5～2mmの大長石、チャートが多く含まれている。体部外面のハケ調整の施し方が布留式壺の古相段階の壺と共通する特徴を持つものである。原田編年の大形直口壺Aに分類されるもので、布留式古相（布留II期）に盛行する器種である。出土遺物から、構築時期は古墳時代前期前半（布留式古相）が考えられる。

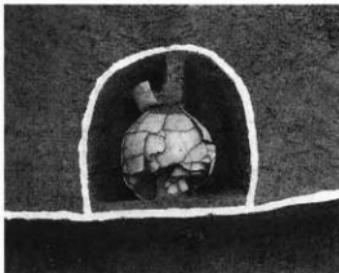
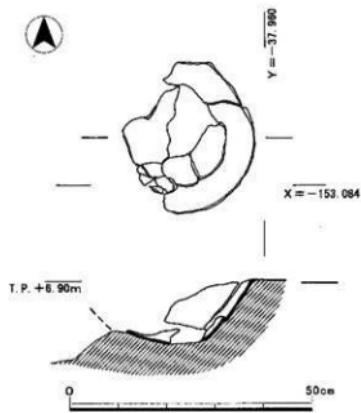
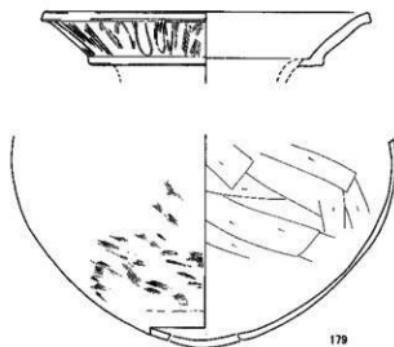


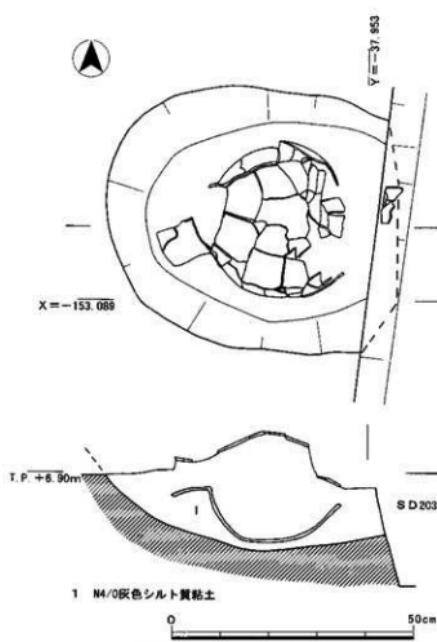
写真15 土器棺墓302検出状況(東から)



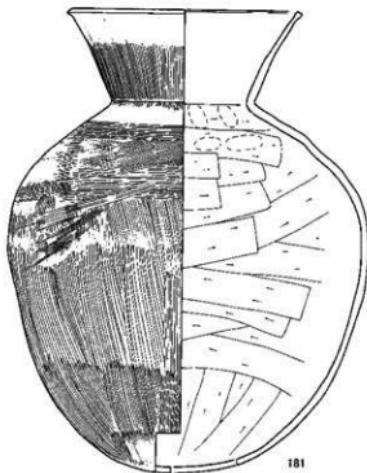
第98図 土器棺墓301平断面図



第99図 土器棺墓301出土遺物実測図



第100図 土器棺墓302平断面図



第101図 土器棺墓302出土
遺物実測図

地震跡

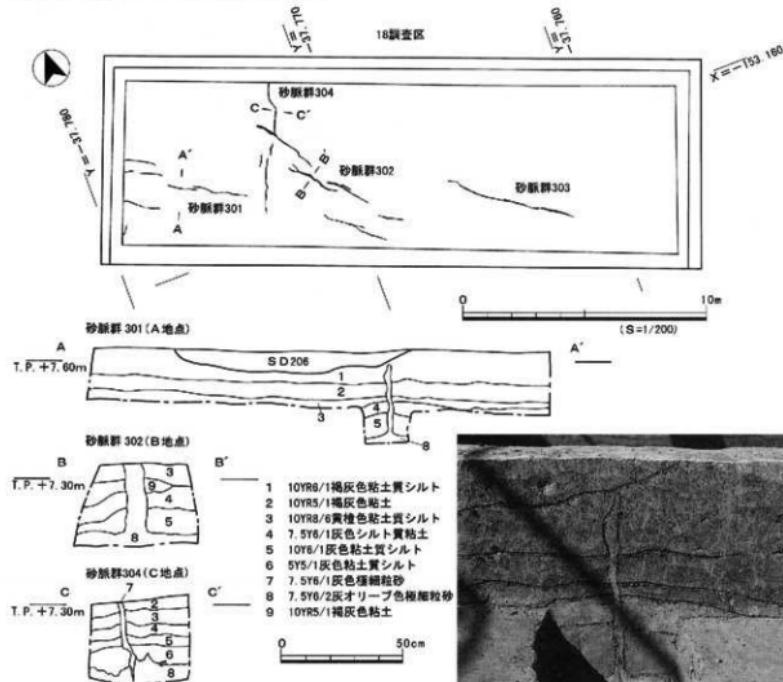
18・20・21調査区の第3面調査で地震発生時の液状化現象で生じた砂脈群を7箇所(砂脈群301～砂脈群307)検出した。なお、本文では、検出された砂脈個々に名称を冠せずに個々の集合体を群として捉えて呼称し、調査区毎に概略を記述した。

砂脈群301～砂脈群304(写真16～19、第102図)

18調査区中西部のⅧ-8-6・7 C・D地区で検出した砂脈群で、平面的には北西-南東に伸びる砂脈群301～砂脈群303と北東-南西に伸びる砂脈群304がある。T.P.+7.1～7.2m付近に堆積する河川堆積層(埴層)から上部に噴き上がるもので、幅は1～10cmで上部はT.P.+7.6m付近に達している。なお、砂脈群301の断面観察では、砂脈の先端部が奈良時代と考えられるSD206に達していないことが観察できるが、地震発生時期については限定できない。



写真16 18調査区 砂脈群302
検出状況(北から)



第102図 18調査区 砂脈群301～304平断面図

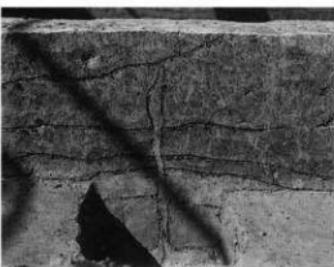


写真17 砂脈群301[A地点](東から)

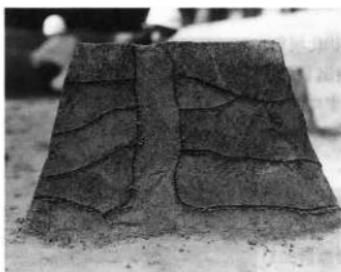


写真18 砂脈群302〔B地点〕(南東から)

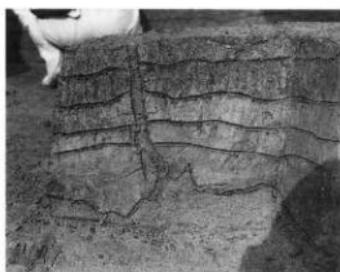


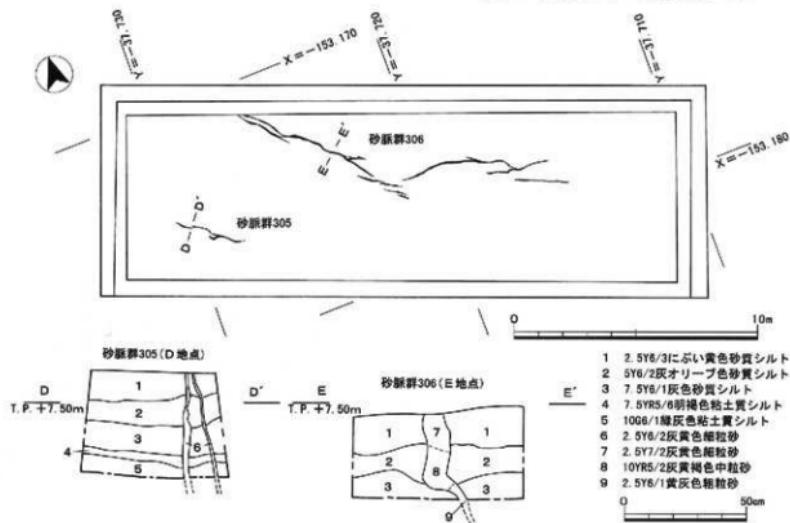
写真19 砂脈群304〔C地点〕(南から)

砂脈群305・砂脈群306 (写真20~22、第103図)

20調査区中央部のⅧ-8-8 H・I 地区で検出した砂脈群である。平面的には共に南東-北西に伸びる。T.P. +7.1m以下に堆積する河川堆積層上部(第Ⅷ層)から噴き上がるるもので、最上部はT.P. +7.6m付近に達する。砂脈群の方向や吹き上がりのレベルにおいては18調査区で検出した砂脈群301～砂脈群303と共に通しているが、地震の発生時期は限定できない。



写真20 砂脈群305〔D地点〕(南東から)



第103図 20調査区 砂脈群305、砂脈群306平断面図